COBALT-SERIES

グラスハート



若木未生

集英社

「あんた、うちでドラム叩く気ある？」プロ志向のバンドでキーボードを弾いていたバンド少女・朱音のもとに、突然かかってきた謎の電話。だがそれはいたずらでも冗談でもなく、ロック界のアマデウスとも呼ばれる若き天才音楽家・藤谷直季が作ったバンドからの本気の誘いだった。訳のわからないままいつしか彼らのペースにはまっていく朱音だったが…。熱い鼓動が響くハードビート・ノベル！

恋気分いっぱいの夢♥小説誌！

コバルト
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社



COBALT-SERIES

グラスハート

若木未生

集英社

CONTENTS

グラスハートⅠ
——a piece of introduction ……7

グラスハートⅡ
——the BAND has no name ……75

グラスハートⅢ
——break the GLASS HEART(前編) ……153

グラスハートⅢ
——break the GLASS HEART(後編) ……213

あとがき ……276


西条朱音
高2のバンド少女。プロ志向のバンドでキーボードを弾いていたが、理不尽な理由でバンドをクビになる。だが、「うちでドラムをやらないか」という奇妙な電話がかかってきて…。
高岡 尚
謎の藤谷バンドのギタリスト。有名バンド〈Z-アウト〉のサポートメンバーとしてステージに立っていた頃から、朱音の憧れのミュージシャンだった。



坂本一至（さかもとかずし）

謎の藤谷バンドのキーボーディスト。朱音よりひとつ年上。「傍若無人に弾きとばすソロプレイ」を身上とするが、体が弱く、また複雑な家庭の事情も抱えている。

藤谷直季（ふじたになおき）

14歳の若さで彗星のごとく音楽シーンに現れた、ロック界のアマデウスと呼ばれる天才音楽家。数年間の沈黙を破り、自らのバンドを結成。朱音をドラムに勧誘するが…。

登場人物紹介

イラスト／橋本みつる


グラスハートI
——a piece of introduction

1

――死ぬかと思った。

（尚（ショウ）だ）

まさか、だった。

我が目を疑うってのは、きっとこれをいうんだ。

吹きさらしの交差点で信号待ちをしてる後ろ姿は、たしかに尚だった。

肩のかたちだけでも腰の高さだけでも尚のことなら見分ける自信あるけど、ご丁寧（ていねい）にギターケースまでかついですぐ目の前に現れられた日にはどうしていいかあたしにはわからない。

ちょっとラフに伸ばした茶色い髪も、さんざんビデオでくりかえして観（み）た、そのまんまだった。

なんで御茶ノ水（おちゃのみず）の交差点なんかで、こんな不意打（ふいう）ちくらわなきゃならないんだろう。

よりによってこんな日に。こんなサイテーの、むちゃくちゃ悔（くや）しいこの日この時この瞬間を狙（ねら）いすましたみたいに。

（高岡（たかおか）さん）

呼んだらふりかえるだろうか。

（高岡さん、聞いて!!）
（あたし、西条アカネっていいます、朱色の音って書いて朱音）
（高校二年生です、バンドやってます）
（あなたのギター好きです）
だけど、信号待ちしてるときにいきなり真後ろから制服姿の女にそんなこと言われたら、尚でなくたって仰天すると思う。
すぐそこのCD屋からは、昨日発売されたばっかりの、超人気バンドの新曲がガンガン流れてくる。ちょっと昔のUSAヒットチャートで流行った曲とそっくりのコード進行で、うちのバンドの連中にはすこぶる評判の悪い歌だった。
信号が変わってくれればこのつまらん歌を聞かなくてすむけど、信号が変わってしまったら目の前のギタリストに話しかけるチャンスはなくなる。きゅーきょくの選択……。
なぁぁんて迷ってるヒマもなくてっ!!　——どうしたらいいんだ!!
「くだらない曲」
ぼそっ、と吐き出した低い声があった。
尚——かと思ったら、違った。そのすぐ隣に立っていた男の子が言ったセリフだった。
ぼさぼさの頭、してる。
後ろに立ってたあたしからは、眼鏡のフチだけが見えた。

「負け惜しみだろ」

ちょっと笑ったみたいな声でそう答えたのが、尚だった。びっくりしたのかムッとしたのか隣のメガネがバッと顔をあげた。あたしもびっくりした。尚に口をきいてもらえるなんて、そんな奴がこの世にいるなんて信じらんなかった。

「そういう言い方ないでしょ!?」

おい!!　そっちこそそーゆー口のききかたないだろ!?　え!?　誰と喋ってんのかわかってんのか、こら!!!!!　――というのがその時のあたしの心境だった。

ひどい。替われ、あたしの立場と。

頼む、お願い、替わって。あたしに譲ってよ、あんたのいるその場所を。

「あかねっ!!」

がくし。

怒り狂ってるところにさらに怒りの材料が増えると、反動みたいにして力がぬける。

両方の掌に力をこめなおして、あたしはふりむいた。

「何？　まだなんかあんの？」

「何って、おまえな、話の途中で出てかなくたっていいだろー？」

人差し指で頭をかきながら現れたのは、うちのドラムスのヒロマサ君だった。

「途中ったって、もう話は決まってたじゃん！」

畜生。体裁とりつくろったって同じなんだよ。

畜生。

「でもさあ、ほら、あいつらだって悪気があって言ってたわけじゃねえからさ……そのへんわかってやってくれよ。やっぱし……いやな思いはしたくないもんだろ、お互いにさあ」

うんうん、いやな思いはしたくないよ、誰だって。

そんなこと知ってる。

あたしひとり我慢すれば、あたしひとりにこにこして納得すれば片付く。

結局あんたたちは——ヒロマサだって、あたしじゃない。そんなのは当然。

「あたし、みんなが悪気があって決めたことだなんて一回も言ってないよ」

ボリュームを落としてあくまで穏健に、あたしは答える。

「そんなもんあったってなくたって、クビはクビじゃん」

「……だからさあ……」

ヒロマサが困る。

「こーゆーことは、音楽やってる以上は、何度かあることなんだから……あんま気にするなよ……。あいつらも、たしかにちょっと強引っちゃ強引なところは、あるけど、さあ……」

あたしだってヒロマサを困らせたいわけじゃない。

もともとヒロマサのおまけで入れてもらったバンドだった。みんな年上で、みんなプロ志向

で、本気で音楽やってる連中だってのはわかってた。
だからって。
（やっぱさー、俺たちの音に、女ってのは似合わないと思うんだよなー）
いきなりそれはないだろう、それは!!
下手くそだからクビだって、音の方向性が違うからやめろって、そう言われりゃ何百倍マシだった。
本気で音楽やってんだったら音楽の話、しろよ!!　男だ女だなんてつまんない話、するなよっ!!
「もういいよ」
女の子バンドでキーボードの空きでも捜せよなんてヒロマサが言い出す前に、あたしはケリをつけた。
本当に、もうよかった。
あたしを追い出すバンドのメンバーより、追い出される程度の価値しかなかったあたし自身に愛想がつきた。
女でもなんでも、しがみつかれて行かないでくれって言われるくらいの腕があればよかったんだ。
「もういいよ。仕方ないよ」

「……」
「ヒロマサのせいじゃないよ」
ヤスノリの声（ボーカル）、好きだったし、キヨシのギターもハルのベースも高校生にしちゃすごく上手（うま）かったけど、でも仕方ない。
「だから大丈夫だよ」
あたしが言うと、ヒロマサはまたぽりぽりと指で頭をかいた。
「まあ……あかねなら大丈夫だと、俺も思ってんよ」
「うん」
そのとおり。
ヒロマサは正しい。
「知ってんでしょ。あたしはめげないよ。いつだってそうでしょ。あたしが泣いてひきさがったためしないでしょ。んなことヒロマサがよくわかってんでしょ」
「……うん……」
まあ、そうだな、なんてヒロマサは口ごもる。
「んじゃ、ライブには招待してよ。みんなによろしく」
うわああ、すっげえオトナのあいさつ。
我ながら自分の言動に感心しつつ、あたしはヒロマサに手を振った。今日はこれでバイバイ

だよ、ヒロマサ。

一緒に駅まで歩く気になんかならない。

「また電話すっから」

テレパシーは無事に通じたみたいで、ヒロマサは頭をかきながらメンバーが待ってるバーガーショップに舞い戻っていった。一八八センチの巨体が離れていくさまを、あたしはしばらく見送っていた。

気がつけば近くのCD屋でかかってる三流国産ロックミュージックが、フルコーラス終わってしまうところだった。

「サイテー……」

あたしは今後一生、この曲を聞くたんびに今の場面を思い出すのかとおもったらぞっとした。サイテーのBGM。

こんな手抜きの音でもプロだなんて名乗れて、ステージに立つことができて、CDを売ることができるってのに。

あたしときたら、音を出す場所さえなくして、突っ立っている。明日からの練習の予定もライブもコンテストもオーディションも、全部パアで。

おまけに。

(しまったっ!!)

ガーンときた。すっかり忘れてた。
尚。あたしの目の前にいた、手の届くところに立ってたあの後ろ姿は、今のやりとりの最中にとっくの昔に――。
「あ……」
交差点を見返ったとたん、がつっ、と視線が誰かの目とぶつかった。間のはずれた呟きを漏らしたのは向こうのほうだった。
さっきのメガネ野郎。
なんでまだそんな所にいるんだろうとか、なんであたしのこと見てんだろうとか考えるより先に、あたしは思いっきり超高速で顔をそらして全速力で走りだしていた。
見られた。
あんな奴に。
尚とタメ口なんかきけちゃう奴なんかに。
ぶあついレンズの眼鏡かけたのび太くんみたいな男に。
涙なんか見られた。
ひどい。
神様はひどい。
あんまりひどすぎる。

（負け惜しみだろ）

ふと、尚の声が頭ん中でくりかえした。ヒマな女子大生であふれてるドーナツ屋の前で、あたしは立ち止まった。

さっきとおんなじ曲が性懲りもなく有線でかかっていた。

よく考えたらあたし、ナマで尚の声を聞いてしまったのでは。

それってば、よく考えなくてもものすごいラッキーなのでは。

ちょっとくらいなら、神様は褒められてもいいかもしれない。

（負け惜しみ？）

どういう意味で、尚は言ったんだろう。

冷静になったら、今度はそんなことが気になった。このスカスカのつまらない曲をくだらないって言って、それがどうして負け惜しみなんだろう。

全然わからない。

通りすがりの誰かに気付かれたりしないように、あたしは下を向いて、こっそり涙を拭いながら駅をめざした。頭の内側が少し、痛んだ。もう泣きたくなかった。

2

今さらだけど、言いそこねていたから説明するけど、高岡尚って奴は、ついこの間まで《Z－アウト》という有名バンドのサポートメンバーとしてステージに立っていたギタリストである。

ついこの間までってのは、一カ月前のクリスマスの日にZ－アウトの全国ツアーは終わってしまって、その後の彼の行き場は、ただ外側から見てるだけのあたしたちからは窺い知ることもできないからだ。

スポットライトもあんまりあたらないサポートメンバーなんかの音に惚れると、あとあとがキツい。売れてるバンドのメンバーならあちこちの雑誌で顔は出てるし情報はあり余ってるし、ウラの情報だってファン同士のネットワークでかけめぐる。

Z－アウトそのものもあたしは嫌いじゃないけど、尚のギターにくらべたら全然お話にならなかった。

誰にも似てない、誰にも負けない、ものすごくプライドの高い、そのくせどっか人懐っこいみたいな音。それが尚のギターだった。

「ちょっとお、いつまでそのビデオかけっぱなしにしてんのよお」

恨めしげにずりずりとふすまをあけて、よれよれのモモコがあたしの部屋に侵入してきたのはその晩、九時をまわったころだった。ちなみにモモコというのはあたしの母である。

「おんなじ曲目とおんなじMCとおんなじ歓声ばっかしで、飽ーきーちゃったよおお」

「やかましい」

あたしがあたしの部屋であたしのビデオを好きなだけ観ていて何が悪い。

「Z－アウトも昔はいい曲やってたけど、最近はめっきりマンネリなのよねえ」

ぶつぶつ言いながらモモコは勝手に入ってきて、図々しくこたつに両足つっこんだと思ったらみかんの皮をむいている。

「やっぱレージ君の歌の下手さが致命的よー。ケンちゃんは天才なのにかわいそー。どんな曲書いても全部あの調子で歌われちゃ情熱も失せるってもんよねー」

「モモコ、締め切りは？」

「あああっ、出たわよ朱音っ、尚ちゃんがちょこっとだけ映ったわよっ」

「ちょおっと!!　やめてよ、みかん食った手で尚の顔さわんないでよ!!」

「カンケーないでしょお、実物じゃないんだからー」

「指紋が残った!!　指紋が!!　ブラウン管にっ!!」

「そんっなちっちゃいことにまで目くじらたてなくたって……ひどい……冷たい……愛情のカケラも感じられない……」

「モモコ、あんたねえ、締め切りに煮詰まってあたしんとこで気晴らしすんのやめなよね!!逃避だよ、逃避!!」

ちなみに母の職業はフリーの音楽ライターである。

こんなヒトでもそれなりに知名度はあるらしくて(ギョーカイってやつのいいかげんさは今いちよくわからない……)、けっこう大きな仕事を何本も抱えているんだそーである。

もひとつちなみに、ライターってのは、音楽雑誌のインタビューとかディスクレビューとかコンサートレポートとかCDについてる解説とか宣伝文とかを書く人のことをいうらしい。

モモコに言わせると、ニッポンの若手ミーハー向けアーティスト諸君を相手にこーゆーお仕事をしているモモコは『音楽ライター』で、洋楽関係でおんなじお仕事をしている人たちのことは『音楽評論家』と呼ぶんだそうである。たしかにモモコは評論家センセイって柄じゃない。根っからミーハーだし。

「仕事があるだけマシじゃん、おカネがもらえるんだからさー」

「だああって、どう聴いたってド下手くそな駄作のCDなのに『好意的なレビュー』を書かなくちゃいけないんだもーん」

こたつの布団にくるまってモモコはグレている。

「やなんだったら書くのやめたら」

「そうはいかない世の中のしがらみがあるんだってば……広告もらってるアーティストだし

ー、編集長の義理もあるしー……」
「んじゃさっさと適当に書いちゃえば」
「あんなCD褒めたらあたしのライターとしての信用ガタ落ちよおお」
「どっちかに決めろよ、どっちかに!!」
ああ鬱陶しい。
「その発想が未熟なり」
いきなりむくっと顔をあげて、モモコが神妙に言った。
「非常に好意的で、しかしよーく読むと決して褒めていない、辛口ながら愛情がほの見えるレビューを書けばいいのよ。そこがテクニックってやつなのよ。ふふふ、若いわね、まだまだ」
「……勝手にすれば」
書くのはあんたでしょ。あたしに威張ってどうする。
「あのさ、そういや進路調査書、今月中に提出なんだけど」
「あれ、あんた、何年生だっけ」
「あーのーねー、二年生でしょお？　三学期だから、そろそろ決めろって先生が」
「あ、そっかあ。うん、進路？　好きにしていいよ」
これだし。
「あんた、もうちょっと母親らしいことをねえ……」

「あああっ、尚ちゃん生意気にもソロなんか弾きはじめてっ。やだわー、テクにまかせて押してるけど音がなーまーいきー、若ーい」
「なによ、それえええっ、そこがいんじゃん、ナマイキなのがいんじゃんっ!!」
「未熟者ーっ、手伝いの分をわきまえてないもん、この子。少しはまわりを見なさいよねえ、そんなムキになって弾いたって浮くだけなんだってば」
「妥協しないからカッコいいんでしょ!!」
「妥協しないってのと無理をするってのはちがうんじゃないの？　尚ちゃんには合わないのよ、こんな風にスタイルが落ち着いちゃってるバンドは」
こういう話題になるとモモコは容赦がない。
あたしがムッとくるのは、それがあたし自身ちょっとだけ考えてたことと同じだからだと思う。
「あんたもね」
二個めのみかんに手をのばしながら、ついでみたいにモモコが言った。
「なにもイケイケのヘヴィメタ洋楽おたくバンドで、無理して自分を合わせて弾くことなかったわよ。ぬけて正解だよ、あそこは」
「……ひっでー言い方……」
洋楽おたくって……ヒロマサたちが聞いたら怒るよ。

「だーって、やりたいことやってない人がどんなに努力して無理したって、やりたいことやってるフツーの人にはかなわないもん」

「やってるよ、あたしは」

やりたいこと。

あたしはやってる。ごまかしてない。ちゃんと、好きなこと目指してる。

別々の人間がひとつの音になる。それぞれの楽器が一緒になって目に見えない波をつくる。音楽、ってやつを。

「でも、あんたはもっと贅沢になっていいと思うな。音が出てりゃ楽しいってのは当然だもん、『音楽』っていうくらいだからさ」

さらっとモモコが言う。

「その、みんなで音を出して気持ちいいーってところじゃ満足いかなくなったから、尚ちゃんもあんな弾き方してるんでしょ。あんただってそうだよ」

「……そうかあ……!?」

よくわかんない。

「でなきゃクビになったからって辞めないよ、あんたが。あんたはね、あの四人に切られたんじゃなくて、あんたがあの四人をクビにしたんだよ」

「そうかあ!?」

そんなにご立派な成りゆきじゃ全然なかったような気がするけど。
「あたしが言うんだから、それは確実」
モモコは胸をたたいてみせる。どこがどーして確実やねんと突っこみたかったけど、あたしは何か言う代わりにモモコがむいたみかんを丸ごと奪いとって口の中に放りこんだ。
モモコ流の、変な慰めかた。
ぜんぜん母親らしくないけど。でもモモコらしい。
「ひどい……あたしのみかん……あたしのむいたみかん……」
「まぁだあるっしょ、新しいのが、ほら、ここに!!」
「皮むいたのにィ……ちゃああんと皮むいたのにィ……」
「わぁぁかったよ、むいてやるよ、むきゃいんでしょ!?」
あたしたちは、あたしが六つの頃から、こんな毎日を送っている。
あたしの父は中学校で音楽を教えている人なのだけれど、ピアノを弾いてバイオリンも弾いてオーボエも吹けちゃうという芸術家肌のダンディなお父様で、万事いいかげんなモモコとはどーっしても生活のリズムが合わなかったらしい。
〃永遠に変わらない愛のためには、僕たちは別れて暮らしたほうがいい〃
この映画みたいなセリフを大マジで吐いたというのだから、パパもけっこー変なヒトである。まあそれ以前に、モモコと結婚できちゃうあたりがすでに充分どっかぶっとんでいる。

だからあたしが音楽に染まったのは、当然といえば当然のことだった。生まれたときからピアノが家にあったし、BGMには荘厳なクラシックとばりばりのハードロックが交互にかかっていた。

こと音楽に関するかぎり、うちの両親は子供に甘い。洋服一枚にもケチケチするくせに、キーボードもシンセサイザーもドラムセットもサキソフォンもステレオコンポも、買ってくださいおねがいします、の一言でポンと手に入った。

(他の何を削っても、僕の子供に音楽だけは不自由させたくないよ)

というのがパパの弁だった。パパ自身がいかに不自由しながら音楽をやってきたのかしのばれるセリフのような気がする。

あたしはラッキーだと思う。とても、恵まれていると思う。

……だからクサってる場合じゃない。

動きださなくちゃならない。新しい場所をさがさなきゃならない。

じりじりする。

早く、音を出したい。

音楽をやりたい。

ロックバンドを、やりたい。

電話のベルが鳴ったのは、その時だった。
「あたしはいないっ！　あったっしっはっ、留っ守――っ!!」
締め切りをかかえたモモコがとびあがって逃げてゆく。しょーもない。そんなに催促が怖いなら原稿あげちゃえばいいのに。
やむなくあたしが受話器をとりあげる。
「もしもし、西条です」
西条モモコでしたら現在、北国へ逃亡中ですが。
月刊ロックン・パーティー編集部が相手だったら、そう言ってやるつもりであたしは身構えたんだが。
『あのっ!!　西条朱音さんはっ!?』
いきなりとんでもない大声がとびだしてきてあたしは受話器を落としかけた。なんだ、このバカでかい声の男は。
「あたしですけどっ!!　何かご用でしょうかっ!?」
なんとなく張りあってこっちの声もでかくなる。
『……ええっ!?　本当にっ!?』
「は？」
がちゃん。

つーつーつー。
「……」
しばし絶句。
……おい!!　何なんだ、今のは!!
「何？　まちがい電話だった？」
ふすまのむこうがわからモモコが訊いてくる。
「まちがい……じゃないと思う……よ」
あたしはあいまいな答え方をした。
西条朱音、って呼んでた。あたしの名前を知ってる奴？
だけど聞き覚えなんかない声だし。
「よくわかんないけど、イタズラじゃ……」
言いかけたところに、またもや電話のベルが鳴りひびいた。
モモコは姿をひそめる。やれやれと思いながらあたしは受話器をとる。
「はい、もしもし!?　西条ですがっ!?」
『……もしもし？』
あれっ。
さっきの大声とは違う。

別の人？

『もしもし……西条、朱音さんですか』

「……そうですけど」

『あ、よかった。夜分すいません、高岡と申しますが』

……は!?

（え!?）

高岡!?　――高岡尚!?

何それ!?

どがしゃんっ、とあたしが凄まじい勢いで電話を切ったんで、モモコがびっくりしてこっちをのぞきこんだ。

なんでそんなことしちゃったのか、自分でも全然わからない。

「……どしたの？」

モモコが言うけど、全然わかんないから答えらんない。

「やっ……やだやだやだ嘘嘘嘘ッ」

「だからどーしたのー？」

あたしは慌てふためいてもう一回受話器をはずしたけど、すでに手遅れだった。どうでもいい信号音がつーつー鳴っているだけだった。

何なんだよ。
何なんだよ、これって。
誰かのいたずら？　からかわれてんのか、あたしは。
だけど今の声は。
今の声は、知ってる。たしかにあたしはその声を知っていた。
（朱音さんですか？）
信じらんない。
「……尚だ」
「え？」
「尚だった、今の」
「なーによ、それー」
半信半疑のモモコの声。だってそうなんだよ。
信号待ちの交差点で聞いた、あの声と同じなんだよ。
同じ、なのに……。
「モモコぉーっ、切っちゃったああっ、どうしようっ!?」
「ちょっと、ねえ、あんた、泣ーくーなーよ、泣かないでよ、それしきのことでーっ」
「だってだってあたしに名指しで来たんだよ、あたしに来たのにさあっ。どーしよ、超サイテ

ー、最っ悪、ドン底おおっ」

「むこうからかかってきたんだったら、またかけてくるよ、ほら」

あたしたちがふたりしてパニックして大騒ぎしてる最中に——三度めの電話はやってきた。

ぎくり、とあたしたちは一緒になって硬直する。

「……モモコっ!!　出ろっ!!」

「だめよっ!!　編集部からだったらどーすんのよ、あんたが出なさいよっ!!」

「あたしまた切っちゃうよ、絶対パニクって切るっ!!」

「あんたにかかってきた電話に母が割りこんじゃ失礼よっ!!」

「あんたの仕事先に娘が出るのは失礼じゃないのかよっ!!」

「あっ、ほらほら、ベルが終わっちゃうよ、切れちゃっていいの!?　あったっしっはっ、かまわないんだよ別に。どーすんのよ、ねええっ」

ちっくしょーっ、この女——っ!!

歯ぎしりしながらあたしは受話器に手をのばした。

「……もしもし、西条ですが」

『あ……坂本っていいますけど』

へ？

坂本？　誰？

『朱音さん、いますか』
「……あたしですが」
ずいぶんぶっきらぼうな喋り方をする男だなあとあたしはぼんやり思う。
『なんだ、いるんじゃん……』
ぼそりと坂本某はひとりで呟く。
『あんたたちの……が、悪いんだよ……』
ちがった。ひとりで——じゃなくて、近くにいる誰かにむかって言ってるみたいだった。
どっちにしても人に電話かけといて、いきなり自分たちだけで喋ってるなんて、かなり無礼な奴だと思う。一言くらいこっちに断ってからにしろよ。
『……え？　明日？　六時？　……渋谷……？』
まだやってる。
「もしもし？」
『あのさ、あんた、うちでドラム叩く気ある？』
「え？」
今のは、あたしにむかって言ったんだよ……ね。
『大至急なんだけど、あんたのドラムが欲しい』
坂本某はたたみかけてくる。ちょっ……ちょっとおちつけっ。

助っ人の要請？

バンド内のもめごとで誰かがぬけちゃったとか、ライブ当日にメンバーの都合が悪い、なんてときに足りないパートの穴ウメをする人間のことを助っ人という。

たまーにならやったことあるけど。でも知りもしないバンドじゃできない。

「あっ、あのね……どこのバンドの人？」

『バンドの名前はまだない』

名前がない？　初心者バンド？

『だけどメジャーデビューは決まってる。春にはシングル出すことになってる』

「え？」

なに言ってんの、この人。

なんかまちがえてない？　人違いしてんじゃないの？

「あの、それ、ほんとに、あたしに言ってる？」

『《テディ・メリー》の西条さんでしょ？』

坂本某は、あたしを追いだしたバンドの名前を言う。

……元、だけど。まちがいじゃない。

「でもあたしは《テディ》じゃキーボードをずっとやってて」

『知ってる』

せっかちにこっちのセリフをさえぎる。
『でもとにかく必要なのはドラムだから』
でもとにかくったって。あんた人の話、聞いてる？
ドラムなんてヒロマサがサボってる時にちょっとだけ代理で叩いたくらいで、しかもメンバーには軟弱だのパワーが足りないだのさんざんけなされたんだから。あたしは。
『明日、六時、渋谷まで来れる？』
「……行けるけど……」
『じゃあそんとき話す。いろいろ。マイアミって店、知ってる？　そこに来て』
じゃあ、と言って坂本は電話を切りそうになる。
「ちょ、ちょっ、ちょおおっと待ってよ!!」
慌ててあたしは声をはりあげた。
「バンドの名前なくたって、やってる曲のジャンルは!?　バンドの構成は!?　そっちの連絡先は!?」
『……』
けっこう長めの無言があった。
もう切られてんじゃないかと思ったころに。
『ジャンルは、うまく言えない……けど……ロック』

うまく言えないけど、ってあたりに、なんかすごく困ったような唸ってるみたいな複雑な感じがした。

『構成は今んとこボーカル兼ベースが一人、ギターが一人、キーボードが一人。連絡先は……』

坂本は都内の電話番号を言って、最後にフジタニナオキという名をつけたした。

……フジタニ……？

『それじゃ』

初めから終わりまで無愛想な奴だった。あたしは受話器をおろして、首をかしげた。

フジタニ……藤谷……聞いたことがあるよーなないよーな……。

「モモコぉ」

「あん？」

バンド関係の電話とわかったとたん、なーんだつまんないと言ってこたつにもぐっていたモモコが、亀みたいに首だけあげる。

「フジタニナオキって知ってる？」

「あん？　それがどした？」

「そこのバンドに誘われた。なんか、そのお方たち、メジャーデビュー決まってるなんて言ってんですけど、センセイご存じ？」

「まーたまたっ、そういうホラ吹く奴、多いんだよねー」

そう言いつつモモコは仕事部屋にのそのそ這っていって、秘蔵の音楽関係者名簿、別名『モモコファイル』をひっくりかえしている。母親がギョーカイの人だとこういうとき役に立つ。

あれ？

坂本某に毒気をぬかれたような感じでスッキリしちゃったけど、あたし何か忘れてないか？

おや？

「ふっ……藤谷ナオキっ!?」

いきなりモモコのすっとんきょうな声が聞こえてきた。あたしは耳を押さえた。

「なあにー？　ブラックリストに載ってたー？」

訊いたけど、返事がない。

仕事部屋をのぞいたら、モモコはどこぞに電話をかけてなにやら熱心に話していた。どうやら相手はロック雑誌の編集部らしい。さっきまで編集部から逃げ回ってた人はどこに行ったんだよ。

そのうち、ピーヒョロヒョロとファックスが鳴って紙が一枚、吐き出されてきた。

「あっりっがっと、たーさん、このお礼は原稿のほうで必ず」

あんまり信用のおけない約束をしてモモコは電話を切る。あたしはなにげなしに届いたファックス用紙をのぞきこみ、思わずその場にへたりこんでしまった。

『――藤谷直季。
十四歳の若さで彗星のごとくシーンに現れたロック界のアマデウス。あらゆる楽器を難なくあやつり、森生リカ、高野仁実などの人気ボーカリストに数々の楽曲を提供。自らもサポーターとしてさまざまなバンドを渡り歩いたが、十八歳で大学入学を理由に音楽活動を停止、以後まったくの沈黙を保っていたが……』

ここまではいい。ここまでは。

『……ついに今年、長期的なバンドづくりへの意欲を見せている。メンバー構成は、スタジオワーク等ですでに技術には定評のある高岡尚（G）、新人の坂本一至（Dr）、そして藤谷（Vo&B）という、バンドとしては最小形態の……』

『スタジオワーク等ですでに技術には定評のある高岡尚（G）』
何度みても、その文字の並びは変わらなかった。
（そっ、それじゃ、さっきの電話って）
忘れてたけど。
いたずらでも夢でも幻聴でも、なんでもなかった。あたしはくらくらと目眩をおこしてその

まま床にぶっ倒れた。
……あれ。
そしたら。
（あ……坂本っていいますけど）
どっか間のはずれた、無愛想な、あの声って。
ぶっきらぼうで、ぼそぼそしてる、あの喋り方って。
「ああっ!!　のび太じゃん!!」
へっ？　のび太くん？　どこに？　とモモコがあっけにとられた。説明する気力もなくて、あたしはボーゼンと床にころがっていた。

3

どうやら早く来すぎたみたいだった。駅前の時計を見あげたら、時刻は四時四十五分だった。
約束は六時。
渋谷駅の出口であたしはコートのポケットに両手をつっこみ、白い息を吐き出した。なんだかひどく冷えこんでいる日だった。

学校で、休み時間にヒロマサに会ったから、これこれこんな事情で今日これから謎の三人組に会いにいくと言ったら、ヒロマサはものすごく疑わしげな顔をして、やめといたほうがいいと思うな俺だったら行かないな、と言った。話がうますぎてうさんくさいよ、だってそいつらが朱音のこと知ってるのからして変じゃんよ。

まさにそのとおり。ヒロマサはいつも正しい。

だけどここで出かけていって事の次第をたしかめなかったら、あたしは一生、頭ん中モヤモヤで暮らさなきゃならないわけで、そんなのは冗談じゃなかった。

道玄坂を少し行ったところには、有名楽器メーカーのショップがある。あたしはなんとなく時間つぶしにそこを目指して坂道をのぼりはじめた。コートのポケットにはウォークマンのリモコンが入っている。あたしはさっきから、同じボーカリストの同じ曲ばかりくりかえして聴いている。

目的地について、イヤホンをはずしながら自動ドアの入り口をくぐって店内に踏みこんだら、なじんだ空気がふわりとまわりを包んだ。寒さにかじかんだ身体がほっとした感じだった。フロア全体にところせましと並んでいるキーボードのおかげだった。それと、学校帰りに新しい機種をのぞきにきているお仲間の皆さんもたくさんいるからだ。

「あ……」

忘れもしない、間のはずれた呟きが、なにやらすぐ近くで聞こえたのはその時だった。

店のすみっこにディスプレイされたマッキントッシュ・コンピュータにすがりついていたぼさぼさ頭のメガネくんが、びっくりしてこっちをふりむいたところだった。
なんたることか。
のび太――というか、そうじゃなくて。
坂本一至、だ。

「ローランドの新作なんだけどさ、もう触ってみた？」
人の顔を見るなり、坂本一至はまるっきりドッ外れた話題を口にした。
「今回すっごく出来がいいんだ。基本的には前のシリーズの延長なんだけど、実用性もキャパシティもクリエイティヴィティもくらべものになんないくらい広がってんだ。音作りには文句なしだと思うんだ。ライブでの耐久性はちょっとまだ気になるけど……」
「あたし、ローランドは使ったことないんだけど……」
なんで初対面の（……たぶん、意識的には、初対面だ）相手にいきなり楽器（シンセ）のことで講釈（こうしゃく）さ れてんのかさっぱりわからないまま、あたしはもごもごと答えている。
「え!?　嘘。じゃあ今まで何使ってたの!?」
「えーとねー……」
あたしがとある国産メーカーのとある機種の名前を口にすると、うーん、と坂本のび太は深

刻に唸った。

「そうかアレも古典だから……使い勝手はまあ悪くないけど……でも音の幅は圧倒的に狭い!! 俺はアレは薦めない、センスが古くなる!! どうせなら安物でもコレとかコレに手を広げといたほうが将来的には絶対いいと思う!! 国産で安いのだったらこっちの奴がいい、キーのタッチが別物だから。でなきゃこのモジュールとこいつを組みあわせて使うって手もあるし」

何なんだ、この男は、歩くキーボードマガジンか!?

ばっさばっさと棚からカタログをとりだしては機関銃のように説明してあたしに投げてよこす。

よもやこいつはここの店員で、それであたしを客とまちがえてる……なんてことは、ないか。

「だからあんなに地味な音作りになってたんだよ。《テディ》の曲調じゃシンセは飾りにしか使えなかったってのはわかるけど、うちの場合、そうはいかないから」

その発言で、客とまちがえてるっていう説は消えてなくなった。

どういうつもりなんだろう。

「でも弾き方はよかった。テープ聴いたかぎり。基礎訓練のできてる、まじめなキーボーディストだと思った。……クラシックピアノやってた?」

「……三歳んときから、十年間」

「そのせいかな。上手い。オリジナリティーがあって品もあるし、ノリは悪くない」
中学に入った頃からバンド活動にのめっちゃったから、ピアノはそこでうやむやに辞めていた。
だけど今になってそのことで、こんなストレートな褒め言葉をもらえるとは思わなかった。
「クラシックやってる人ってうらやましくってさ」
ぽつんと言って坂本はふらふらとフロアを横切っていく。あたしはつられる格好でその後についていった。
「俺なんて独学だし。邪道なんだ」
たどりついた電子ピアノの前で、ため息まじりにそんなこと言って。
わきわきっと両手の指を動かしたと思ったら。
「!!」
たたきおろした指の先で鍵盤が滝の流れみたいに、溢れかえった湧き水みたいに、一気に揺れ動いた。
凄まじい早弾きだった。怒濤の音が次から次へ襲ってくる。勢いがありすぎて、何を弾いてるのかもわかんないくらいだった。
(あ)
一瞬のきっかけで、メロディーのかたちが見えてくる。

（トルコ行進曲）

あまりといえばあまりにスタンダードな、誰でも知ってるメロディーなのに。

原曲をぶち壊して粉々にしてぎゅっと凝縮した音。

わんわんと耳が鳴る。きっとピアノの悲鳴だ。坂本の弾き方は電子ピアノの限界に挑戦しているんだ。

縦横無尽。

（奇術師）

そんな単語が浮かんだ。何の変哲もないシルクハットから、誰も見たことのない音を取り出してみせる——手品使い。

度肝をぬかれているのはあたしだけじゃなかった。このフロアで他のキーボードを試弾していたお客さんたちも、店員も、なんだか呆気にとられてガシャガシャのトルコ行進曲を聴いていた。

坂本はハイスパートのトルコ行進曲から強引につなげて『カルメン』をおどけたピチカートで弾いて、それをダンサブルな『白鳥の湖』にひっぱってから、最後はまた最速ジェットコースターの『剣の舞』でしめくくった。

モノトーンの鍵盤を右から左まですべるように駆けおりて、じゃかじゃん、と音がやんだとき、あたしは百メートル全力疾走を四回くりかえしたような気分だった。

凄い。

こんな凄いピアノ、目の前で聴いたのは初めてだった。

おお、と歓声があがって店内は拍手で盛りあがった。やるじゃん、とか、すげえよ、とか名前も知らないメンツが口々に言っている。楽器屋のフロアで、客がみんなして一人の演奏にエキサイトするなんて、普通はちょっと考えらんない光景だった。

「どうも」

無愛想に呟いて、坂本はピアノの前を離れた。あたしは慌ててそれをまた追っかけた。あまりにもマイペースに坂本が動くものだから、あたしはよくわかんないうちにその後を追っかけることになっている。

「……どう思った？」

自動ドアの出口の横で立ち止まって、坂本はそう尋ねた。

ちっとも嬉しそうでも楽しそうでもなくて、どっちかっていったら不満な様子に見えた。

居心地が悪い、って顔に書いてある。

「派手、だと思った」

あたしはそう答える。

「すごく変わってる。びっくりした」

ただならぬ個性ってやつ。

個性の二文字はモモコにいわせると最大級の褒め言葉だ。あたしもそのつもりだった。だけど坂本は。

「……クセが強いんだ、俺。アクだらけっていうか……」

うつむいてぼそぼそとそんなことを言う。

「どう弾いてもあんな風にしかならないんだ。それって技術的には、未熟だよ。俺はもっと普通に弾けるようになりたいんだけど……基礎がなくて……ヘタクソだし……」

じゃああんたは今、客が沸いてたのも目に入ってなかったわけ!?

はっきりいってあたしはあんたの首ねっこつかまえてぐらぐら揺さぶりたいくらい、今の演奏に嫉妬しているというのに。

それだけの腕があって贅沢ぬかすなよ、畜生！　……と喉元まで出かけたけど、くやしいからやめた。

それに、自分の技術に満足しないってことは、向上心があるってことだとモモコが言っていた。天狗になって、自分の音楽センスにあぐらをかいて、努力することを忘れてるミュージシャンは大成しないんだって。

「貪欲だね」

あたしが言うと、坂本は眼鏡のレンズのむこうでまばたきをひとつした。

「別に……。とにかく自分の音が気に入らないだけだから……」

こいつはとことん生真面目というか一種ガンコな奴……なんだと、あたしは思う。
そもそも坂本一至って、どういう人間なんだろう。何年くらい、どんな場所で弾いてきたんだろう。これだけ派手なテクがあったら少しはバンド仲間のあいだで噂になっておかしくないのに。
どっちにしても、つまりキーボーディストの席はもう埋まってる。あたしにはお呼びはかからない。
中心人物のボーカル兼ベースがいて、技巧派のギターがいて、それでこのキーボードがいたら、あとは最強のドラムが加われば……立派なロックバンドのできあがり。
「なんでそれであたしなんかに白羽の矢が立っちゃうわけ？」
あたしのドラムなんかに。
「……うーん……それはつまり……」
口ごもりながら何か言いかけて、坂本はぴたりと黙りこんだ。
自動ドアのガラスごしに歩道を見やって。
「出よう」
前触れもなく背中をむけて自動ドアをくぐる。あたしはがくっと膝を崩しながら、後につづいて店を出た。こいつは……どうしてそうやって人のペースを崩すような行動にばっかし——。

「一至っ!!」

いきなり、歩道に出たとたんに、そんな怒鳴り声があたしたちにぶつかってきた。

ただの大声じゃなかった。他人の心臓を突き刺すみたいな、どこか普通じゃない、激しい声だった。

「おまえはっ!!　おまえはまた、こんなところでフラフラっ……!!」

何？

誰、この男の人？

足を止めてふりむいた坂本は、ずかずか近づいてきた背の高い男に、次の瞬間、思いきり握りこぶしで殴りとばされた。がつっ、といやな音が聞こえた。

4

そんなめちゃくちゃなことを、そんな野蛮な非常識なことを本気でやる大馬鹿野郎がこの世に実在するなんて知らなかったもんだから、あたしはしばらく唖然として立ちすくんでいた。

動けなかったんだ。

怖くて。

なんにも言わない、抵抗もしてない坂本を、そのスーツ姿の男は何度も何度も殴りつけて汚

い言葉をさんざん吐きちらした。
たくさんの人が見てる場所なのに、すぐ近くであたしっていう人間が一部始終を見ているのに、そいつは全然おかまいなしだった。
がしゃん、と坂本の眼鏡が地面に落ちてころがった。あたしは思わず、一歩あとずさった。
くりかえし殴られながら、坂本は咳きこんでるみたいだった。何がどうなってるのか、まるっきりわからなかった。
（指が）
どうするんだよ。
（腕がこわれたら）
死んじゃったらどうするんだよ!!
「いいかげんにしろよ、馬鹿野郎!!」
気がついたらあたしは奴の横っ腹にまわし蹴りをくらわせていた。坂本をボコボコにすることばっかりに集中していた馬鹿野郎の野蛮人は、不意をつかれたらしくて、けっこう大きくよろめいた。
「なんだよ、おまえっ!!　けーさつ呼ぶよっ!!　何様だよ、ふざけんじゃねえよっ!!」
仁王立ちになって、あたしは声をはりあげた。
腕力あるからって、背が高いからって、ふざけんじゃねえよ。

小娘だからってなめてんじゃねえよ!!
「どっか行っちゃえよ、馬鹿っ!!」
怒鳴ってる最中も、がくがく足元が震えた。
「うるさいっ！　兄が自分の弟を殴って何が悪いっ！」
野蛮人はふりむいて、そんなことを言い返した。
兄!?
坂本の？
「何だよ、それ!?　あきれたことぬかしてんじゃねえよ、理由にならねえよ!!　兄弟だからってそれがどうしたんだよ、人間殴っていい理由なんかあるかよ、あんた頭わるいんじゃないの!?」
あたしの口はどうやらブレーキがきかなくなってるようだった。
よく見たら、腕力ありあまった野蛮人だと思った相手も、顔色のあんまりよくない、ヒョロッとした不健康な感じの男だった。
こんな奴に負けてやらない。
こんな奴になんか負けてやらない。
絶対にひきさがらない覚悟であたしが睨みつけていたら、しばらくたって、坂本兄はようやく坂本弟からその手をはなした。ぽいっとゴミ袋を放りすてるみたいな、すごくいいかげんな

手のはなしかただった。
「君なんだろう、一至を変な遊びにひきずりこんでんのは！　今後一切、そういうことはやめにしてもらいたい！」
あたしに言ってるんだろうか。
ひきずりこむも何も、なにもかも勘違いの独り合点だった。
どうしてそんな一方的な暴力的なやりかたで他人がいうことを聞くなんて、ちょっとでも考えたりできちゃうんだよ。何なんだよ、この男は！
「おまえもおまえだ！　学校には行かない、家にはよりつかない、得体のしれない連中とはつるんで……お母さんがどれだけ泣いてると思うっ!!」
歩道に座りこんで咳きこんでいる弟を、そのバカは靴で蹴りつけた。
……坂本の様子は、なんだか、おかしかった。
ただ殴られたはずみで呼吸がつまったっていうんじゃ、ないんだ。
なんか、変だ。
息がぜんぜんできてないんだ。苦しくて、痛いんだ。胸が。ひどくつらくて、口もきけなくて。
ちょっと待ってよ。
真っ青な顔、死にそうな呼吸、してるのに、あんたの弟が。

……ちょっと、待ちなよ……この、うらなりヒョウタン野郎ッ!!

「ユウイチっ、あなたっ、あなた何してるのっ、一至にっ」

いきなりあたしの反対側から、女の人の声がとびこんできた。

うろたえた、はりつめた弱々しいおばさんの声だった。遠巻きに、あんまり関係ないような顔で、でもなんとなくあたしたちの様子をうかがってる通行人たちの向こうから、その声は聞こえてきた。あたしはそっちを見た。ユウイチと呼ばれたヒョウタン野郎もそっちをふりむいた。

その隙をついて、急に発射された鉄砲玉みたいに坂本がユウイチの足元からはねあがった。一秒の半分であたしのところに来た。がしっと右の手首をつかまれた。痛い、と思ったけど声も出せなかった。凄い力であたしをひきずって坂本は人波をくぐりぬけてダッシュした。

あたしたちは大勢の通行人に何度もぶつかったりひっかかったりしながら駅までの道を一息に駆けおりた。

ハチ公広場の片隅であたしの手をやっとはなしたと思ったら、坂本はどさっと駅の壁際にぶつかって(よりかかったというのかも知れないけど、あたしには体当たりしたようにしか見えなかった)、そのまま地面にずり落ちてしまった。

なんでこんなんで全力ダッシュができたんだろうってくらい坂本は参っていた。ボロボロだ

った。一言も喋れなくて、喉が木枯らしみたいな音をたてて、胸が痛むらしくて、ずっと手でおさえていた。心臓でも破裂したんじゃないか、この人このまま死んじゃうんじゃないかと、あたしは怖かった。

すごく怖かった。

通り魔に背中からナイフで刺されるより怖かった。

身内の人間に、家族に、こんな目にあわされるなんて考えらんなかった。

「みっ、とも、な……」

ぜいぜいと息を鳴らしながら、坂本が小さく言った。

「すっげ……みっともね……」

そういえば坂本は眼鏡を落としてしまっていた。口元をコートの袖で拭いながら坂本は呟いて、それを見てあたしはなくした眼鏡のことに気がついたけど、今はそんなことにかかずらってる場合でもなかった。

「あっ、だっ、誰か……呼んでこよっか？」

あたしは間がぬけている。今頃になってそんなことを訊いている。

「大丈……」

コートのポケットからとりだした小さいスプレーみたいなものを口元でシュッと鳴らして、坂本はもう一回言った。

「大丈夫……。俺、慣れてる、から」
「……え？」
「俺……喘息で……だめなんだ、ショックとか……すぐ発作がおきちゃって……」
喘息？
どんな病気なのか、カンペキには知らないけど、でもよく耳にする病名だった。呼吸器官の病気のはずだった。
その発作だったんだ。
「……でも、今、吸入したから、もう治る」
坂本は白いスプレーもどきをあたしに見せた。吸入器と呼ぶものらしかった。
「吸入の薬ってものすごくよく効くんだ。だけど効き目が強すぎて心臓に悪いからあんまり使うなって、医者は言うんだ。けっこうスリルがあるんだ、使うとほんとに手なんか震えて心臓ドクドクするから。自分でも、なんだかアブない病人になった気がして、面白くてさ。……あ、効いてきた。ほら、震えてる、手が」
またもや坂本は脈絡をぶっとばした話題でずらずらと喋っている。
こんなむちゃくちゃな時に、薬の効き目も心臓もなにもあったもんじゃないだろうに。
わざと話をそらしてるんだったらたいした性格だけど、こいつの場合はとことん自分のリズムで行動しているだけなんだろうとあたしは思う。あの個性的すぎる、他人のリズムを考えて


Yes, our Lollipops Were Sol

ないピアノみたいに。

展開がバラバラで。

誰も同じ速さでついていくことなんかできない。

「さっきのアレ、雄一って、俺の三歳上の兄貴なんだ」

壁際にへたりこんだまま、震える掌をひろげたまま、坂本はさらっと言う。

「頭に血がのぼりやすい奴なんだ……。俺、中学んときからずっと学校休んでるから、それであいつあんなこと言ってるんだ。あいつはいろいろやりたいこと我慢して医学部に入って親父のあとを継ぐのに、弟の俺が何年も好き勝手やってるのがあいつには納得いかないんだ」

坂本は、都内にある有名な六年制の男子校の名前を言った。本当なら今はその高校の三年生で、そろそろ大学も受験しているころなのに、出席日数のかけらもないから、現在、何年生の扱いになってるのかさえわかんないのだと言った。

中学受験でもう燃えつきちゃってさ、と他人事のノリで言う。

「いちばんやりたいこと以外は、何もやりたくなくなっちゃったんだ」

……それが音楽？

そう訊くまでもなかった。あたりまえすぎて訊くのがわずらわしいくらいだった。

「学校に行かない分の時間、ずっとひとりで多重録音して曲とか作ってて、テープのストックが山積みになったもんだからそれを片付けるつもりで何かのオーディションに送ったんだ。そ

したらそのテープがめぐりめぐって藤谷さんのとこに届いたらしくて、いきなり去年の夏だったかな、電話かかってきて一緒にバンドやろうとか言われたんだ。藤谷さんの名前なんかは前から知ってはいたけど、でも俺、全然、人と一緒に音楽やるってことがピンとこなくてそれで断ったんだけど……そしたらあの人、俺の曲をまるっきり一から作り直したテープを送りつけてきたんだ。ふざけるなって思ったけど気になって一回だけ聴いてみたけど、その晩、あんまりくやしくてテープずたずたにしちゃったから一回しか聴いてないんだけど……それでもくやしくておさまんなかったから明け方の五時くらいだったか、藤谷さんちまでダッシュしていって、あんたは俺の曲をぶち壊しただけだって怒鳴ったら、あの人、平気な顔して、『でも俺のほうが天才的だろ？』って訊き返してきやがってさあ」

　このボーッとした人がくやしさのあまりテープを切り刻んで、なおかつ明け方に怒鳴りこみに行くってのはいったいどんな曲を聴かされたからなのか、あたしには想像もつかない。

「藤谷さんってそういう人なんだ」

　半分、唸るような、どこか困ったような複雑な言い方を坂本はする。

　こんな言い方、たしか昨日の電話のときも聞いた気がする。

「あの人って、すごいいいかげんで、普段はなんにも任せらんない人なんだ。音楽のことで頭いっぱいになったら手もつけらんないんだ。昨日だって、大丈夫俺がリーダーだからリーダーらしく俺が交渉するって言ってあんたんちに電話して、でも一言めでもう慌てて切っちゃって

るんだ。曲のアイデアが浮かんだんだとか言い訳してたけど、あれは絶対あんたが見つかって興奮してわけわかんなくなっちゃってただけなんだ。あんな人、音楽やってなかったらただの公害だよ」

……じゃあ、あの、オチのない瞬間芸みたいな電話はやっぱり。

藤谷直季。

ロック界のアマデウス・モーツァルトとかいわれてる人だったのか。あれが。

「……変な人だねえ……」

「うん、変な人なんだ。……あ、すわれば？」

黒くすすけた地面を、喫茶店の席かなんかと同じ感じですすめてくれる坂本もほんとは充分、変な人だ。

でもそこであんた変だよって言うのも変だったから、あたしは制服のスカートに気をつけながら坂本の隣にしゃがみこんだ。

多少マイペースでも、話の内容がとびまくっても、まともな電話ができなくても、であいがしらに人を殴りつけるような奴より一千倍マシだ。変っていう言葉の意味からして別だ。

「でも本当、昨日は、みんな興奮してたんだ。あんたが見つかったから」

ぽつんと坂本がそう続けた。

「え？」

よく考えたら、その話題こそ、あたしがいちばん早く聞かせてほしいことだった。
いろんなことに呑みこまれて、すっかりどこかに置き去りだったけど。
「だって俺たち、ここんとこずっと二カ月以上、もう考えたくないくらい大量のデモテープ聴きまくって暮らしてたんだからさ……それでもうムリじゃないかって思ってたときに、去年かなんかのコンテストの事務局からまわしてもらった予選テープのずっと後ろの余白のところにまだ何か音が入ってるぜって藤谷さんが気がついて、ためしに三人で聴いてみたらそのドラムがまさにジャストミート!!　でさあ、藤谷さんなんか瞳孔ひらいちゃってたくらいなんだ。……それがあんたのドラムだったんだ」
「……は？」
それにしてもつくづく大マジメな顔でミョーな表現を使う人だなあと、頭のすみっこであたしは思っている。
「うん、あんたのドラムだったんだ」
坂本はくりかえした。
「それが俺の音とものすごく近い音だったんだ」
「近い？」
「うん、あ、俺の叩くドラムの音と」
……!?

「坂本ってドラマーなんだ!?」
「そうだよ」
坂本は、なんであたしが驚くのかわからないという顔をしてあっさりと頷いた。
そっそんな、それじゃ、あのピアノの腕前は宝のもちぐされになっちゃうわけ!? とあたしは一瞬パニクりかけたけど、でもじゃあなんで新しいドラマーが必要なんだ？ ということに思いあたった。
だいたい坂本は、あたしが電話でバンドの構成を訊いたとき、ドラマーがいるなんて一度も言わなかったはずだった。
「だってキーボードって坂本のことでしょ!?」
「キーボードもやるよ。どっちも好きだし、藤谷さんの曲は音数が多いから必要に迫られてってのもあるし」
坂本はとことんけろっとしている。
さすがは多重録音オタク。キーボーディストとかドラマーって枠で自分を考えてるんじゃないんだ。
それと、どっちにしても使いこなせるっていう自信があって……。
「だけど正式にはドラマーでやりたいんだ。ただ、俺の身体じゃ、いつもフルステージ叩けるって保証はないから……でも俺たち、だからってドラムを機械にする気はなかったから……俺

と交替でドラム叩いても違和感なくて、それからキーボードも兼任できるってタイプのミュージシャンを捜してたんだ」

「……兼任……？」

なんかそれってものすごく厳しい条件のような気が。

そんな話が、どうしてよりによってあたしのところに来たりするんだろう。

捜しに捜した末にたどりついたのが、たった十七歳の女だなんて。もうちょっとマシな候補が何人かいたってよさそうな。

たしか、メジャーデビューが決まっているって言ってたんじゃ……。

「でっ、でも、プロでやるほどのテクなんてあたしはまだ……」

あたしのドラムって軟弱でパワーがなくて。

「技術なんて本気んなって全力で練習すればいやでもつくだろ!?　問題はやりたいと思うか、心底やる気があるかどうかなんだよ!!」

いきなりぴしゃりと断言された。あたしは背中を平手で一発ひっぱたかれたような気分になった。

問題は本気になって全力でできるかどうか。

心の底から真剣になれるかどうか。

「――っていうのは、ギターの高岡さんの口癖なんだ」

坂本はそんなセリフをつけたした。高岡って名前ひとつであたしはよろっと目眩をおこした。

ああ。そうか。

あたしの目の前には今、はっきりした一本の線がある。

このラインのむこうがわには、憧れの世界と憧れのミュージシャンがスタンバイOK状態であたしを待ちかまえている。それって音楽やってる人間みんなの、夢だ。

だけど、もしも一回でもこのラインを踏みこえたら——。

「一至」

並んでしゃがんでいるあたしたちの前に足をとめた影があった。

呼んだ声は、さっき、道玄坂の人ごみのなかから叫んでユウイチを止めたのと同じ声だった。

寒そうに立ってる、痩せた女の人。

なんとなくわかった。

そこにいるのは坂本のお母さんだった。

5

その人はすごくすごくお母さんっぽい人で夜なべして手袋編んでくれちゃいそうな感じがした。町内会とかＰＴＡとか生協の組合とか、モモコが大の苦手にしているものが全然ムリなくぴたりとはまるような人だった。

「一至」

その人は坂本の名前を呼んだ（よく考えたらその人も坂本さんだった）。

「あのね……雄一のこと、怒らないでね……突然あなたを見かけてびっくりしたのよ。本当は心配してるのよ、お兄ちゃんも……」

坂本はぺたんと地面に脚を放りだして、特に何も答えないで座りつづけていた。

「今日はね、雄一がお世話になってる先生のお宅に、ごあいさつにうかがった帰りなのよ。別に、あなたのあとをつけたり、そういうことは、してないわ。あなたがそういうこと嫌いだってことはわかってるのよ。ね。偶然なのよ。だから怒らないでちょうだい。ね」

何を怖がっているんだろう。

その人はずっとびくびくしているみたいだった。だけどあたしはそれよりも自分の立場のほうが気になった。関係ないあたしがここにいて、そのお母さんの言葉を一緒に聞いていること

のほうが気になった。

あたしはここにいていいんだろうか。

「怒ってないけど」

ぼそっと坂本が言った。

「でも、俺、まだしばらく帰るつもりはないから。住む所とかだったら、藤谷さんが全部うまくやってくれるから」

「……」

お母さんは眉をひそめた。

「そんなこと言って……あなた、いつまでも子供でいられるわけないのに……行けるうちに学校に行っておかなきゃ、あとになって後悔しても仕方ないのよ。誰でもない、あなた自身のためなのよ。そういうことは一至だってちゃんとわかっているんでしょう？　ねえ？」

「知ってるよ」

坂本の態度は変わらない。

お母さんはつくり笑いをうかべた。お母さんのほうが坂本にいじめられてるみたいだった。

「だから、ねえ、あなたの先生もおっしゃったじゃないの。登校拒否はぜんぜん悪いことでもずるいことでもないのよ。病気の一種で、本人のせいじゃないのよ。気にすることはなんにもないのよ。だからまた、家族みんなで、一緒にがんばりましょうよ。ね。よそのお方にご迷惑

かけないで、そうしましょうよ」
「俺は怠けてずる休みしてるだけだよ」
「一至……」
「勉強なんかやりたくなくてサボってるんだよ。それだけだよ」
「ちがうわよっ!!　一至っ、あなたはねえっ、病気なのよ!!」
いきなりお母さんは大声で叫んだと思ったらぼろぼろと涙をこぼした。
「心の病気なのよ!!　だから治さなくちゃいけないのよ!!　どうしてそんな簡単なことがわかんないのっ!?」
あたしはびっくりした。なんだか心臓がドキドキした。
大人の女の人が、しゃくりあげながら道端で泣いてるなんて。
見てる子供のほうがつらい。
「なんで泣くの？」
坂本はそう尋ねた。普通の声だった。
「なんで泣くわけ？　俺ってそんなに恥ずかしい息子なの？　みっともなくて世間に顔向けできないの？」
「……ひどい……」
ひどいわ、ひどいわ、とお母さんは泣き声でくりかえした。

ひどいわ、どうしていつもそうなの。どうして素直に聞いてくれないの。
あたしたちみんな、あなたのことを心配しているのよ。
どうして帰ってきてくれないの。何がいけないっていうの。
このままじゃあなたの人生がだめになってしまうのよ。
「あんまり冷たいこと言わないでちょうだい……」
両手に顔を埋めてお母さんはまたもっと泣いた。
ごそっ、と身体をゆらして、坂本は立ちあがった。
「泣かなくていいよ。俺、有名になるよ」
ぶっきらぼうに、ぽつんとそんなことを言った。
「もう少し待っててよ。自慢できるようになるから」
「また、あなたはそうやって夢みたいなことばっかり……！」
あ。
お母さんは初めっから信じてなかった。坂本も何も説明なんかしなかった。
けど坂本は軽口をたたくような奴じゃない。
冗談でかわしたりしない。
だから今のは。
夢みたいなことなんかじゃなくて——。

「あ、あの！」
あたしは思わず立ちあがって、坂本のお母さんにむかって言っていた。
「この人、有名になりますから!!　ほんとにスターになりますから!!」
お母さんは真っ赤な目をして、きょとんとしてあたしを見た。坂本もおんなじ顔をしてあたしを見た。そっくりだった。
（泣かなくていい）
絶対に、日本中のみんながふりかえる。
どんな人にだって自慢できる、そんなスターになる。
女王陛下からの勲章だって、夢じゃない。
今は誰も知らなくても。なんにも夢なんかじゃない。
「本当に本当なんです!!　あたし、賭けてもいいです!!」
あたしなんかが力説したところで、どんな役にたったかわかったものじゃなかったけど。ちゃんと伝わるように言うことなんかできなかったけれど。
ただ、お母さんはハンカチをとりだして目頭をおさえながら、そうねえ、だといいのにねえ、と言った。
楽器屋の前で落としてきた眼鏡を坂本のお母さんはちゃんと拾ってくれていて、それをコー

トの裾でごしごし拭いてからかけなおした坂本は、やっぱりのび太くんだった。

野蛮人ユウイチを駅の改札口で待たせているというお母さんが切符売り場のむこうに消えたあとで、坂本がぽつんと言った。

「なんだか俺、家庭の恥ばっかりあんたに見せてるみたいだ」

「……」

あたしはやたら家庭の問題にわりこんで余計なことをたくさん喋った気がする。

今日が初対面の（くどいようだけど、意識的には初対面の）相手だっていうのに。そう、実は、会ったばっかりの人間だっていうのに。

「ごめん、あたし、お節介で」

「え!?」

坂本はすごくあせった感じでふりむいた。

「それは違うっ……！」

と言ったきり声を喉につまらせて困っている。

ああっ、なんかものすごく困っている。

真っ赤になってじりじり汗をかいてる姿はあんまり気の毒だった。この話題そのものが心臓によくないんじゃないかと思って、じゃっじゃあお互い帳消しってことで、と言いかけたら、坂本のセリフに先をこされた。

「つまり、ありがとうってことで……」
「あっ……どうも……」
何が、あ、どうも、なんだか自分でも謎だ。
「あんたって騎兵隊みたいだ」
坂本はそう呟いた。
「騎兵隊？」
「俺がピンチだと旗たててワーッと走ってくるっていう……」
「それってただやかましいって気が……」
まあ、たしかに、ちょっと、ケンカっぱやいとことか騒がしいとこはあるけどさあ……。
「つよいんだよ」
シンプルな言葉で坂本はあたしの表現を訂正する。
「西条って、変な人だよね」
「……はあ!?」
あたしはすっとんきょうな声をあげてしまった。
よりによってあんたに変人呼ばわりされるほど人生捨ててるつもりないんですけど、あたしは。
「変でおもしろい。俺が言えっこなさそうな言葉を、たくさん持ってる……」

あんただって。

あたしの中には絶対ないような音を、持ってる。

きっと、まだまだ、あたしの知らないものをたくさん隠してる。

「……坂本は、『グラスハート』みたいだ」

あたしはそう言った。

坂本は意外そうにあたしを見た。

「そんなマイナーな曲、知ってるんだ？」

「うん、けっこー苦労して捜した」

それは今日あたしがウォークマンでくりかえし何度も何度も聴いていた、三年くらい前に歌うことをやめて誰かの奥さんになってしまった女性ボーカリストのセカンドアルバムのすみっこに収録されている、有名でもなんでもない曲だった。

グラスハート——ガラスの心。

あたしがモモコの部屋からその古いアルバムをひっぱりだしてきてダビングした理由は、作詞作曲のクレジットにN・FUJITANIの名前が入っていたからだ。

どんな曲を書く人なんだろうと、興味があって。

嘘なんかつかない　色にも染まらない

決して濁らない　なにも怖くない
砕けても輝きは永遠だから
break the GLASS HEART
うつしだす心はひとつだけだから

甘ったるい声質の彼女のために曲調はかわいらしくアレンジされていたけど、基になるメロディーはなんだか不思議な響きをしていた。
ロックなのかポップスなのか歌謡曲なのか、さっぱり区別がつかない、だけど確実に耳にのこる音だった。
なにより透明だった。曲の全部が。まるでガラスそのものみたいに。
宇宙人が作曲してるのかと思った。
「俺は、全然……あの歌みたいに、純粋じゃないよ」
また例の複雑な、顔をしかめて眉をひそめてうんうん唸りだしそうな顔で、坂本は頭を振った。
「純粋……そうか、純粋って表現するんだ、あの歌。深いじゃん、さすが坂本くん聴きこみが違う」
ぽんと手を打つあたしを坂本はえらく怪訝そうに眺めた。

（純粋なんだ）

いろんなことに。

たったひとつのことに。

（純粋でいたいんだ）

そういう人なんだ。

「有名になりたいとか、誰かを見返してやろうとか……そんな動機を音楽に持ちこんだら、そういう時点で不純だと思うんだ。音楽を利用しようなんて、だめだと思うんだ」

坂本はまだ哲学者の顔でぼそぼそとケッペキなことを言っている。

「音楽ってのは、もっと……なんていうか……」

「それ言ったらあたしなんか不純の極致だよ。『音楽を利用して尚とお近づきになりたいわ♡』なんてマジで思ってるもん」

「え」

坂本の表情が目に見えてひきつった。

「高岡さんのファンなの⁉」

……何だよ、悪いかよー。いちばん最初に言わなかったあたしも何だけど。

「そうだよ。あたし去年のZ－アウトのツアー、尚めあてで追っかけやったもん」

「……そうなの⁉」

「そうだよ」
坂本の驚き方がけっこう新鮮だったもんだから、あたしはわざとそこで一拍おいた。
「でも藤谷ナオキの書く曲は好きだと思ったし、藤谷さんって話に聞いてるとなんだか変な人みたいで面白そうだし、坂本のピアノすごく好きだし、坂本っていう人もなんだか好きだよ」
「……」
「それからもちろん、音楽が好きだよ」
あたしはそうつけたした。
坂本はちょっとボーッとしているみたいだった。しばらくたってから、ああ、うん、とか呟いている。
どんなに好きでも、本気の世界は、ボーダーラインのむこうがわは、きっとひどく厳しくてつらいと思う。
今のあたしじゃ想像つかないくらいに怖くて、暗闇で、それでもってそのどろどろの暗闇とおんなじくらい、その世界はここにいるあたしからは眩しく光って見える。
「うちの母親がねえ」
またいきなり別のことをあたしが言いだしたもんで、坂本は我にかえったようにあたしを見た。
「え？」

「だから、昨日、うちの母親に言われたんだけど。贅沢になりなさいって言うんだ、母親が。音楽がたのしいのはあたりまえなんだって、だけどそこで満足しないで贅沢にならなくちゃって。あたし、その意味ってよくわかんなかったんだけど、だんだんわかってきた気がする。まだモヤモヤだけど、なんかわかってきた気がする」

「贅沢？」

「うん。——誰とやるかってことだよね」

やりたいこと。

ひとりきりで音楽はできない。

ひとりきりじゃ音楽にならない。

あたしは自分の場所を捜していた。だけどそれはただどこかにあるものじゃなくて、あたしが誰かと一緒につくりださなきゃならないもの。本当に必要な誰かと手をつないだときに初めて生まれるもの。

そうして、そこにはあたしたちの場所ができる。

そんな気がする。

あたしは、その新しい場所を見てみたい。自分のこの目で、確かめたい。

「それって……あ」

不意に声を切って、坂本が時計を見た。

「時間……六時……すぎてる」
「えええっ!?」
あたしはじたばたと足踏みをした。そんなっ、早すぎるっ、たった今じっくり覚悟を決めようとしていたのにっ。
「藤谷さんはまちがいなく遅刻するからおいといて……でも高岡さんって時間にうるさいから……きっと待ちくたびれて怒ってるだろうな……」
「うそぉぉっ、やだやだッ、ちょっと待ってよ、どーしよーあたしっ」
「嘘だよ」
しれっとして坂本は前言をひっくりかえした。
「あの人たち、ふたりとも遅刻魔だから大丈夫だよ。全然、余裕」
「――――」
こ、こいつはッ!!
「あのねえっ！　あんたね、人がこんなにマジメになってるときにどうしてそういう――」
坂本は小さく笑っただけでなんにも言わなかった。
……まあ、いいや。
今のショックで肝も据わってしまった。あたしは大きく深呼吸した。
わかった。会いに行ってやろうじゃん、憧れのスターたちに。

未来の大スターと一緒に。

「あ……」

近くに停まってる車のカーステレオから流れてきたイントロに気がついて、あたしと坂本は同時にげっという顔をした。それはあの、サイテーのつまんなくてスカスカでくだらない、とある人気バンドの新曲——だった。

だけどこれが大ヒットしてるってのは、本当なんだ。

これがライバルなんだ。

みんなが目指す世界に、一足先にたどりついてるライバルなんだ。

こんなところで負けてらんない。

あたしたちは、ちょっと苦笑いして、それから一斉にダッシュで走りだした。カーステの音から遠ざかるように。

身体の内側に、まだ知らない、新しい音楽を聴きながら。


グラスハートⅡ
the BAND
has
no name

1

聴く前に覚悟が必要なCD、というものは実在する。
誰もいないところで正座してヘッドホンかけて目え閉じて聴きたいCDってやつが。
うまく言えないけど多分、体温とか心拍数とか脳波とか、そういった感じのあたしの中にあるなにかと、チューニングが正面からぶつかってくるみたいな音が詰まってる。
殺人的に卑怯でゆるせない、人の足元をすくうみたいな音が入ってる。
気がついたらあたしはどろどろと泣きだしてしまっていたりする。
……それってのは嬉しいからなのかくやしいからなのかわからないけど。
新譜のパッケージを手にとった瞬間どきどきしたら、だから覚悟が要る。
一世一代の覚悟が、要る。

2

いきなりだけど、あたしは人がものを食ってる姿を見てるのが、けっこう好きである。
どうせならダイナミックに、健康的に、がばがば食ってもらえるとなおさら気分がよろし

い。……変かな？

「今さら思ったけど、西条って人見知りしないよね」

思いっきり粉チーズをぶちまけたナポリタンのスパゲティに勢いよくフォークをつっこみながら神妙な顔でのたもうたのは、見かけのわりにえらく大食らいな若き音楽家・坂本一至くんだった。

「嘘だよ、緊張するよ、あたしそんな図々しくないよ」

「してないよ、だって俺のこと全然平気じゃん。あのさ、俺って一応、年上なんだけどさ」

「すみませんねえっ、してるヒマなかったんですよねえっ」

人見知りなんつー言葉を坂本一至の口から聞くことのほうが驚きだ、あたしには。

「それ言ったら坂本先輩こそそうじゃん。あのですねえ、西条ってば、一応、女の子なんですけど」

「あ、俺、他人に頓着しないタイプだからあんまし関係ないと思う」

フォローになってねえよ、フォローに!!

「へえ、頓着しないって自覚あるんだ、それなりに」

「もとから他人に頓着なんかできてたら音楽やらなくたって生きていけるよ、当然」

……開き直ってるな。すでに。

「なんか西条ってもはや『西条』以外のなにものでもないんだけど、どうしても『西条さん』

とか『朱音さん』とかって扱いがよかったら俺も努力はするけど」
「いーえっ、いーです、努力しないでください」
「うん、俺も無駄な努力したくないや」
坂本くんはあっさり頷く。どうせそういう結論を出すにしても、もう少し言いようが……とか思ったけどやめた。
「要は立場じゃなくて音の中身だからさ、俺にとっては」
ついでみたいに言って、スパゲティの湯気でくもったぶあつい眼鏡をはずして服の袖でごしごし拭いて、またかけなおしたりする。
動きの全部がリズムにあわせてかたかたポーズを変える人形みたいで、面白い。
「もしかして西条って兄弟いる？」
またもや前触れもなく。
「へ？　なんで？」
「ああ、いや、そうか……。つまり……あんまり構えないのってそれかなと思って」
かつてやたら女の子に構えられた経験があるのかなあ、とか、いらないことをあたしは考える。
「うん、いるよ。兄貴ひとり。今は別居してっけど。うちは親、離婚してるから」
そういや坂本と同じ学年になるのかな。あれは。なるんだな、多分。

「でも兄貴がどうこうっていうより、今までもバンドの中、必ず年上の男性諸君だったからさ」

「……あ……。そ、か……」

坂本はちょっと困った感じで、薄汚れた天井をちらっと見上げて、なるほど、なんて、ぼそぼそと呟いた。

渋谷の駅前の地下にある、どっちかっていうと暗めの、そんなに派手でもない、でもけっこう有名な喫茶店のすみっこで、あたしたちはさっきからこの手の今いち発展のない会話をつづけている。

有線ではなぜか十年くらい前の洋楽がえんえん流れていて、思いがけない曲が現れるたびに我々はふたりしておおおっ、と唸ったりしている。……少しばかり変な客かもしんない。

でもあたしたちは別に、この場所において、なにも音楽鑑賞してるわけじゃなくて、お見合いしてるわけでも全然なくて、確か、ものすごく重大かつ急を要する待ち合わせをしているはずだった。

「どうしようか」

ぽつんと坂本が言った。何を言われたのかあたしにはさっぱりわからなかった。

「は？」

「これの次。何、オーダーしようか」

「……」

アメリカン飲んでケーキ食ってトースト食ってさらにたった今スパゲティ食った人の言う台詞とはちょっと思いたくなかったけど、時間の経過からいって、この場合、理解の余地もある、気がした。あたしには。

「えーと、ここまでの路線と違ったノリだと……コーヒーゼリー、とか……」

「わかった、その提案もらった」

すみません、と片手あげて坂本くんは本当にウェイターさんを呼んでいる。ひーっ。はいっなんでしょーか、なんて人のいいウェイターさんが寄ってきて、あたしは思わず慌てふためいて、じゃっじゃあああたしもミルクティー追加、などと口走ってしまった。

「別に俺にはりあわなくたっていいんだけど……」

うるさいなあっ、つられたんだよっ。その場のつきあいってもんがあるだろーがよっ。

やむをえず我々は、ほとんど使命感にかられつつ追加分のオーダーもきれいにかたづける。

そりゃもう、非常に和やかに。

「けど、さ……」

で。

いつになったら言い出すかなと思ってたら、それは約束の時間からちょうど二時間と三十一分後、だった。


けがは
うた

「遅いよね」

大真面目に坂本くんがおっしゃって、あたしはようやく自分の常識に対する信頼をとりもどすことができた。

そもそも異様な遅刻魔だというその人たちの何十分までが『あたりまえ』で何時間から先が『遅い』のか、あたしの頭ではさっぱり想像つかないものだから、ついついあたしもそれまで素直に待ちぼうけていたのだった。

しかしどう考えても二時間半は長い。長すぎる。あたりまえに輪をかけて長いっ。

「普通、これだけ時間あったら、どこからでも来れるよ、いくらなんでも」

「……あたし、何か間違えたかな？」

「絶対にそれはない!!　確率〇・〇二パーセントくらいしかない!!」

坂本は妙に力いっぱい断言して、狭い椅子から立ちあがる。

「こうなったら電話だ。……テレホンカードある？」

それでもってあたしの手持ちのテレカはモモコが仕事の関係でかっぱらってきたのが四枚あって、クジラの写真のと富士山かなんかのと栄光のローリングストーンズ！　のやつと（でもこれは永久秘蔵だから使うわけにはいかなかった）どっかのレコード会社のがあるからどれがいいのかって訊いたら坂本はすごく真剣に少し考えてから、

「俺の趣味だとやっぱり未使用のストーンズに一番乗りして穴あけてやりたいって欲求が先立

つけど……」

「だからっ!!　ストーンズは駄目だっつってるじゃんよっ!!」

しかし店の入り口付近の電話はよく見たらピンク電話だからテレカは使えないのだった。そうならそうと初めから言ってくれよ!!　ああびっくりした。

「多分どこかでひっかかって動けなくなってるんだろうから、とりあえず留守電にメッセージ入れて……あとは行きそうな場所をいくつかあたってみれば、どうせ行動半径ろくにない人たちだし」

ぶつぶつ言いながら坂本は、例の藤谷ナオキさんちの番号をダイヤルする。

あたしはあたしで、我々が、よし支払いは遅れたふたりにまかせるべし、と共謀してオーダーしまくったスパゲティその他の代金はいったいどうなるのだろうか、と実はかなり本気で心配していたりした。だって作詞作曲して印税をもらってるミュージシャンとギター一本で食えてる人とに比べたら、こっちの二人連れは経済的にどう考えてもつらいじゃんよー……。ただでさえ金がかかるんだからさ、音楽やってるだけでさ……。スタジオ代ひねりだすだけで大変なんだからさ……。

「身についた貧乏性が悲しい……」

「え、身についた健忘症？」

坂本くんが凄まじい聞き間違いをしてくれる。誰も言ってないでしょうが、そんなことは

……。

「坂本って難聴じゃないよね、よもやまさか」

「変だな、俺、耳には自信あるんだけど……。女の子の話し声に慣れてないのかな……」

それは単に生活環境に問題があるのではと言おうとしたら、いきなり坂本がぐらりと膝をよろめかせた。腰がぬけたみたいに。

「……信じられない……」

ボーゼンと呟いている。受話器にぎりしめて。

「えっ？　雲隠れ？」

あたしは脇から尋ねてみる。手掛かりなしってやつ？

「いる。それが信じられない」

「……」

坂本は非常に正しい。……二時間半、初めて顔をあわせましょうって人間を待たせておいて自宅にいるか藤谷直季？

「あのさあ……しかも後ろでギターの音まで聞こえるのは俺の勘違いじゃないような気がするんですけど……」

……おいおいおいおい。

本日のあたしの一大イベントといえば。

よく考えてみれば。

何はさておき藤谷ナオキさんちの新バンドの名物ギタリストとのご対面!!　だったんじゃなかったっけ!?　……忘れてたけど。

「何してんだよ、あんたたち……え、曲？　曲が何？」

顔をしかめて坂本はしばし黙る。

なんとはなし、あたしは息を殺しつつそれを見守ってしまう。

「……違うよ、それは違うでしょ!?　そこはどう考えたってタタタターン、タタタで行かなかったら嘘でしょ？　タタラタラ、だめ、違う、Cじゃなくて Fから。……え!?　なんでそこにそんなものかぶせんの？　冗談じゃなくて？　人間の音感じゃ理解できないよ、そんなの。……うん、そしたら今のタタタはわかる。……ええっまだそんな物も入ってくんの!?　何考えてんの!?」

あのー、何考えてんのか訊きたいのはあたしのほうだと思うんだけど。

いきなり話題は三光年くらいぶっとんだみたいだった。さっきの人のいいウェイターさんがぎょっとしてこっちを眺めて、いったい何が始まったんだって顔して通りすぎていった。……すみません、こいつはこーゆー奴なんです、あたりかまわず電話口で歌いだしても平気な奴なんですっ。

「待ってよ、ボリュームあげてよ。……ちょっと西条西条」

ものすごく難しい顔しながら、坂本がひょいひょい手招きする。坂本が耳からはずした受話器からは、がっしゃんがっしゃんぎゃぎゃぎゃーん、としか表現できんような、やたらめったらやかましいフレーズが出てきた。なんなんだこれ？

「だからつまりベースラインはターンターンタータン、だろ」

今の騒音の中身を坂本が説明する。……なんでそんなもの聴きとれるんだ、今のめちゃくちゃで。

「でもギターはギターでこう乗っかりたがって」

電話線を思いっきり引っ掻いたみたいなエレキの高音が、つづけて聞こえてきた。……あ!?

「……合わない……」

「だろ!?　練りすぎだよな!?」

「つーか、もったいないっ、せっかくのギターの音がっ」

「ぶつかってんだよ、結局これじゃメロディーがどうにもならないから、せいぜいタラララータラ、で降りてくるくらいしかないから」

「じゃ、メロディーだけタラララータラターラ、って曲げて、ギターは今のまんまで乗せるってのは？」

「つまらないっ!!　ありがちすぎるっ!!」

「つまんないかなあ……あたしの趣味だとこっちのほうが好きだけどなあ……」

「そうじゃないんだよ、どっちがいいかって比較でいったら西条のが正しいけど、これは元の元がつまらない以上メロディーをどういじくったって問題の根本が変わらないから無駄だってことだと俺は思う!!」

辛辣。容赦なし。

「もう一回アタマから流してよ」

坂本が電話のむこうに注文した。異様におさまりの悪い状態の音が、あらためて最初からくりかえす。うーん……。

そもそもあたしたち何やってるんだっけ、なんて全然言ってらんなくなってしまった。こんな音、このまま放っといたら気持ち悪すぎる。いったい、何をどーしたらこんなもん作れるんだかわからない……。

「だってこれ、今の時点でここまでガシャガシャってことは、すでにドラムが割りこむ余地がないってのからしてひどい」

眉間にシワ寄せて坂本くんが唸る。あたしは頭ん中でぐるぐるフレーズをまわしてみた。

「だからもう、ドラムだけは正気を保ってさ、フツーに割ってくしかないじゃん、これは?」

「それじゃ変に浮くだろ、ドラムとベースが絡んでないと俺は好きじゃない」

「だって他にどーしよーもないじゃん、こんなん、こっちまでいちいち合わせてたら前衛芸術になっちゃうよっ」

「でもこっちだけ安易なほうに逃げてたらシャクだろ!?」
「なんだよ、わっがままっ!!」
「正気を保ってって表現も凄いよ、西条の」
自分のいいぐさを棚にあげて坂本くんは呆れたマナザシをあたしに向ける。ちっくしょーっ、ひどいひどいって言いっぱなしじゃあんまりだから、せめて少しでもうまくいく方向を考えてるだけじゃないかよーっ。
「あのさあセンセイ、あっちでもなんだか仲間割れしてない？」
ぼそぼそっと、そこに、受話器の中から低い声がわりこんできた。
「ちょっとひどいんじゃない？　この一曲のせいでさ、すでに被害はここにいる俺だけじゃすまなくて、あっちにいるイタイケな青少年ふたりにも及んでるんじゃない？」
「……」
「責任、感じるよね？　かわいそうだよ、こんな得体の知れないもの聴かされて、ちゃんとまじめに考えてるんだよ？　みんなして、たいへんな忍耐の賜物でもって」
こういうセリフを嫌味ったらしくもなんともなく、大マジでフツーに、一本調子に、あたりまえっぽく言ってる低い声は、もしかしなくてもあたしの知ってる例のギタリストの声だ。
「だからさあ、余計に飾りつけんのやめて、なんっも考えないでセンセイの思うとおりに音、出してみなよ。そしたら俺だって納得するかもしれないんだし」

「……」

うーん、と凄く深刻に考えこんでる気配がした。

あたしも坂本も、なんとなく何も言えない感じになってしまって、どーしたもんかと電話口で立ち往生していた。

手持ちぶさたに待ってるところに公衆電話のブザーが鳴って、坂本が追加の十円玉を入れようとした。

その時だった。

「……それじゃあさ、ベースをこう動かした場合……譜割りがこーなって、するとメロディーはこうなるから……」

化学の実験かなにかを公開するみたいな、そんな話し方で、ゆるゆるっとあたしの耳ん中に、それは聞こえてきた。

いちばんアタマからもう一回、さっきのぐしゃぐしゃをちょっとだけ変えた音の集合体が流れてくるのを、あたしらはしばらくぼけっとして聴いていた。

それが三分間だったのか十秒間だったのか知らないけど。

ちょっとだけ変えた、それだけの音、の、破片。

「……いいよ、それ……」

突然、坂本の声がした。

「かっこいいよ、売れるよ、それ、シングル向きだよ」
うわ……。
びっくりした。
(別物だ)
ちょっと変わったなんてもんじゃない。
何をどうしたのかわかんない。
でもあたしが目茶苦茶どきどきしてんのは本当だった。
理屈はおいといても、そのことは本当だった。
なにしろ坂本くんの目の色が変わっている。
「音、揃えてみようよ、早く。こないだ作ったイントロと合うんじゃないかな……。あっ、ちょっとそれ取っといてよ、絶対ふたりだけで作らないでよ、今から行くから!」
がしゃん、と一方的に電話を切って坂本はすかさずポケットから財布をとりだして、それからこっちをふりむいておごそかにのたまった。
「ワリ勘でいいよね」
……いいかな、ならともかく、いいよねってのは何なんだよ、よねってのはよ。

3

ごく平凡な高校生であるところの西条朱音さんが、これまでの人生でいちばん『うやむや』とか、『なしくずし』とか、『その場のいきおい』とか、『後の祭り』なんて日本語の意味をしみじみかみしめてるのが現在、たった今、まさにこの時のような気がする。

「まあ……朱音ちゃんてば、なんておいしすぎる大ボケなの……」

あたしの話をひととおり聞いたのちに、わが同級生にして『同志』である小森瑛子ちゃんは、お得意の神様おねがいポーズ（いわゆる、両手の指全部くみあわせて、おおっマリア様っ、とやるやつ）でもって瞳をキラキラと輝かせてくれたりした。

何が『同志』かって、われわれは二人して日本のアイドル的ロックバンド《Z－アウト》の追っかけ女であったりするからで。

追っかけにも程度の差がいろいろあって、本当の本物の最上級の追っかけ女は、常識もなにもぶっとばしてメンバーの『結婚相手』になることをめざしてるお姉様方なんで、その手のイッちゃってる人たちには、年齢的にも経済的にもあたしたちは到底おいつかない。瑛子ちゃんは初級者の並の上、あたしはせいぜい並の並、って感じだった。しかも《Z－アウト》のボーカリストをこよなく熱愛している瑛子ちゃんと違って、あたしの場合、単なるサポートのギタ

リストに惚れてるだけだったってあたりが邪道な路線まっしぐらである。

しかしその、あたしが激しく尊敬するギタリスト高岡尚とのご対面、を……あたしはなぜか、一夜あけてみたら全然まったく憶えていないのだった。……そんなのありか!?

いや、要するに、渋谷の神宮前に立派な藤谷さんのお宅があって、ここのリビングがまんまスタジオとして使えるような防音完璧のお部屋になってて、がんがん積み上げた機材の中で藤谷先生が（そういや、どういうわけか藤谷ナオキ氏は高岡尚から藤谷センセイと呼ばれていた。……伝染った）今やまさに世紀の名曲をしあげようとしてたもんだから、とりあえずその場に居合わせてしまった人間としてはついついそっちに気をとられて、それでもって、ええと……。

「だって、行ったらいきなり、重ねる音が足りないからそっち弾いてくれとか言われて、仕方ないから適当に合わせて、それでまたみんなの意見が二転三転して、そしたらすごい時間かかって、もう終電がなくなるんじゃないかって誰かが気がついて、じゃあ西条は帰りなよって話になって、それであたし素直に帰ってきちゃったから……」

「朱音ちゃんって、そーゆーとこ、やっぱり、ぶちぬけて、妙おおーっ、な御方だったのねえ……」

そんっな、自分のこと棚上げした坂本一至みたいな言い方しなくても……。

「だからー、うやむやでなしくずしで後の祭りだったっつってるでしょお、初めっから」

「おお……アーティスティックであるということ、すなわちアバウトと紙一重。しょせん、プロの世界なんてそんなものだったのかしら。お母様、瑛子は、ひとつ大人になってしまった気がいたします……」

だあああーっ。すみませんねえーっ。

でも確かに本当に、あたしはよくわかってない。なんか今、いくら思い返してもあたし、あの人たちに紹介された記憶ないし。今後のことについて詳しいおハナシとかも伺ってないし。まあ、三指ついて、西条朱音と申します、未熟者ですが以後よろしくご指導ください、なんて言うのも不自然といえば不自然だけど、しかしこういう、いらっしゃいの一言もなくずるずるっと引きずりこまれた経験ってのも……ないなあ……。

「朱音ちゃん、ボーッとしてないで頑張るのよ。しっかりしなくちゃ駄目よ、ここでうまくやらなくちゃ、せっかくのラッキーもパアになってしまうのよ。あたしだって、それ、タカオカ様じゃなくて、もしも相手がレージ君だったら、全力でしがみついて一生はなさないものっ」

何を頑張るんだ、何を……。

「うーん……尚には悪いけど、なんかあたし、それどこじゃないや……」

一夜あけてみてはっきりわかったことっていったら、それだった。

憧れのギタリストどこじゃない。ミーハーしてる場合じゃない。あの人たち、みんなして、とにかくレベルが高すぎる。

今のあたしの実力じゃ全然おっつかない。

「かっこわるいよお。このまんまじゃ、なんで西条そこに要るんだろう？　ってことになっちゃうからさ……」

なんたって西条、代わりですから。自分で言うの悔しいけど、でも自分だから言う。ほんとに、単なるラッキーですから。たまたまドラムの叩き方が、坂本一至に似てるってだけですから。

「あら……朱音ちゃんてば、マジメ……。そんな朱音ちゃんを瑛子は応援いたしますわ」

今度は仏様おがみますポーズ（いわゆる合掌ってやつ）になって、瑛子ちゃんはそう言ってくれた。

「これがもしレージ君のいるバンドで朱音ちゃんがそんなことになってたら、毎日のように朱音ちゃんちにカミソリを送り、無言電話をくりかえし、机に落書きして、あることないこと噂を流し、上履きの中に画鋲を仕込んでしまいますけれど、でもタカオカ様くらいなら全然大丈夫♥」

あんたねえ……。

「だから、ぜひぜひタカオカ様とよしみを結び、その縁で、瑛子とレージ君の逢瀬を実現させていただきたいの♥」

「友情って、虚しい……」

「やあだ、これでも瑛子、本気で応援しているのよ。だって朱音ちゃんて、昔っから、芸能人になるのが夢だったじゃないの」

げげげ芸能人。……なんとなくあたしはよろよろ来るのをおぼえつつ、でも瑛子ちゃんがマジで言ってくれてるのは確かだったので、できるかぎり大真面目にありがとうと言ってみたりした。

帰りがけの昇降口で、三年の下駄箱のところにヒロマサがいたから、とりあえずこっちの現状を報告したら、ヒロマサはヒロマサで自分の音楽雑誌から藤谷ナオキ関係のインタビューやら紹介記事やらを切りぬいてきてくれていて、ひととおり調べたからこれおまえにやるよ、と言ってくれた。ヒロマサってこういうとこ、あたしなんか全然かなわないレベルで、すごくいい奴、だと思う（ちなみにモモコにこの手の作業を頼んでも、関係ありそうなバックナンバーを仕事部屋の奥にたまりまくった雑誌の山の中から掘り出してくるだけで二週間くらいかかる）。

「でもさあ……おまえ、気をつけたほうがいいかもしんない」

声をひそめてぼそぼそとヒロマサは言う。

「何が」

「何って……まあおまえの場合、母親がこっちのギョーカイだからまだ免疫ついてるわけだけ

どさあ……」

へ？

うちのモモコでつく免疫っつっても、ろくなものじゃなさそうだけど。

「でもまわりの人間は意外と、そうでもないからさあ」

「そうでもないって」

何それ？　って訊こうとしたら、そこに、ヒュッと口笛ふきながらあたしらの脇を通りすぎた人間がいた。

「よ。朱音ってば、どっかの天才児に見初められたんだって？」

そいつはヒロマサの同級生で、ついこの前あたしを追い出した《テディ・メリー》っていうバンドで二年生のとき四カ月くらいギター弾いてて受験があるからって脱けた奴で、悪いけどあたしは名前を忘れてる。

そっちだってあたしと学校で会ったって、いつもは声なんかかけてこない。

（見初められたって）

やな言い方する。

「うまくやったじゃん。ま、きっと、んな甘くはいかないだろうけどさ。頑張れば？」

はあ、とか、うん、とか、あたしは適当な答え方をした。ヒロマサは顔をしかめてばりばりと頭の横を掻いた。そいつが靴を履いて出ていったあとで、ちょっと複雑に、あたしに向かっ

て、悪いって顔をしてみせた。
「なんか、俺が情報あつめたくってあいつとかに相談したら、変な風に話が伝わってさあ」
「……ヒロマサのせいじゃないよ」
よくわかんないけど。
でもヒロマサが悪いわけじゃないのは本当だった。
わざわざこんなんありがとうって言おうとして、ヒロマサに貰ったスクラップ帳をなんとなくめくってみて、それでもってあたしはいきなり仰天した。
「……なにこれ」
「え？　どれが」
ヒロマサが訊きかえす。あたしはそこに載っかってた白黒写真に人差し指をぐりぐりと押しつけた。
「藤谷ナオキってこんなにかっこいいんだ!?」
「何だよ、こっちに訊くなよ、おまえ、実物みてきたんだろ？」
「ごめん、全然カオ憶えてなかった」
「おまえさあ……」
信じらんねえこいつ、とヒロマサが呆れた。だ……だってさああ……。
聴こえてきた音だけで充分だった。カオなんか見てるヒマなかった。

「だって、これじゃ、芸能人じゃん……」
言っちゃってから、なに言ってんだあたしって思った。
案の定、ヒロマサも、なに言ってんだおまえって顔をした。
「あたりまえじゃん、モノホンなんだから」
「そっかあ……そうだよねえ」
溜息が出た。
なんでここで溜息ついちゃうのか、うまくヒロマサには説明できない気がした。
「あとさあ、ほら、女優で、椎名香寿子っているじゃん。一時期、ウワサでさ、その隠し子じゃないかって話があったんだってさ。藤谷ナオキって」
「椎名香寿子って、んな年だっけ？」
「んな年じゃないからヤバいんだろ」
顔をしかめてヒロマサが意味深に言った。ふうん、とあたしは呟いた。
ウワサにはあんまり興味なかった。ただ、そういうウワサになってもおかしくない世界のヒトなんだなあ、という気がぼんやりしていた。
決してカラーページで派手にっていう扱いじゃなかったけど、でも写真が雑誌に載って、名前が大きな活字になって、日本全国の誰もかもに読まれたり切りぬかれたり捨てられたりする。

そういう人なんだ。

……なんて考えてたら、ヒロマサがすごく心配そうにあたしを見た。

「大丈夫かあ？」

「え、何が」

「なんかボーッとしてっからさ……」

「何だよ、それ……」

瑛子ちゃんのみならず、のんびり屋のヒロマサ君にまでそう言われるんだから、よっぽどあたしはボーッとしていたらしい。ちょっと傷ついたけどそれは置いといて、あたしははしっと音をたててスクラップ帳を閉じた。

「サンキュ。うち帰ってゆっくり見る」

「うち帰るのか」

ヒロマサは変になんか含んだみたいな言い方をした。

「うん、今日は何もないから帰る」

じゃあね、とあたしは手を振って、ヒロマサが鞄かえて学校を出ていくのを見て、そして、そこまでいってようやく気がついた。

（……違うじゃん）

これからヒロマサはバイト先の牛丼屋さんに行って、そのあと夜からバンドの練習でスタジ

オに入るんだった。

何もないからうちに帰る、なんて、あたしは馬鹿なことを言った。

そんなわけないじゃん。

何もないわけないじゃん。

あたしってば本当にぼけてる。なんだかずっと、いいかげんになってる。

どうしちゃったんだよ。

「……そっか、電話……」

今頃、いきなり思い出した。藤谷さんちの番号なら知ってんだから。

そうだよ、あの人がどういうつもりなのか、あたしにどうしろっていうのか、まずそこからきちんと訊いておかないから、ずっと、こんな変な感じのまんまで動きがとれないんだよ……。

「あっ、あの、あのー、朱音ちゃん、どこ行くのー？」

あたしが電話のある事務室のほうに方向転換したら、そのとき、背中がわで、ちょっと焦った、かなり心細い声がした。……え？

学校の入り口のドアのとこで、あんまり居心地よくなさそうに、こっちをのぞきこんでる男がひとり、いた。

大きい身体をちぢめて猫背になって、長いコートのポケットに両手をつっこんで、あたしを

見てる。
　昇降口には他に誰もいなかった。ということはやっぱりあたしに向かって言ったセリフが、さっきの声で。
　さっきの声なら、あたしは知ってる。
「あ、ええと、あたし、その……電話を」
　なんであたしまで慌てているのかといったら、あたしを見てるその相手がすごく慌てていたからだと思う。
「電話を、しに、行こうと思っ……て」
「俺のこと見て逃げだそうとしてるんじゃないんだ？」
　……なんであたしが逃げださなきゃならんのだろう。
　そう訊こうとしたけど、うまく言えなかった。
「ちがいますっ。だからあたし、ただ、電話の」
「それって急いでる？　とりあえずこの場合、そっちは放っといて俺と会おうよ」
　するするっと昇降口の奥まで入りこんできて、その人はあたしの隣にたどりついて、すごく深刻に問いかけた。
「今、心の中で、そんなの絶対やだ冗談じゃねーやとか思わなかった？」
「べっ、べつに何も思ってないです、それどこじゃなくて」

ほんとにそれどころじゃなかった。

ひ……人違いじゃないよね。あたしの間違いじゃないよね。

「あの、藤谷さんって、カオが三つくらいありませんか!?」

あたしが尋ねたら、藤谷ナオキ氏はちょっと考えて、それからうんと頷いた。

「そーいやー、あるよ。音楽用マスクと、撮影用マスクと、人間用マスク」

4

駅前の喫茶店まで歩く八分間のみちのりで、藤谷ナオキ先生は二回ばかり歩道にけつまずいてころびそうになって、それから何のはずみか右足の靴をぬいでしまって慌てて一歩戻ったりしていた。ぼーっとしてるっていうよりは、頭のなかでいろんなことを一度にぐるぐる考えすぎて足元まで神経がはたらいてないって感じだった。

「ごっ、ごめんねごめんね」

靴をはきなおして歩きだしながら、隣のあたしにむかって、すごく恐縮してあやまってくれたりする。

あたしはあたしで、すぐそこを歩いてる実物と、ついさっき写真で見たばっかりの『撮影用マスク』とのギャップに今いち頭がついていかなくて、さらに坂本一至くん方面から流れてき

た情報からみちびかれる『傲慢不遜な公害人間』のはずの彼のイメージがまたえらくはずれて、いろんな意味で呆気にとられていた。

「俺ねえ、だめなんだあ、今、頭んなかが作曲モードになっちゃってて、なにやってても音がふわふわ目の前とんでてねえ、いっくら気をつけててもうわーってあっちの世界にいっちゃうんだあ」

「……はあ……」

作曲モード、ねえ。

「いったんこうなっちゃうと、普通のこととか、あたりまえのこととか、そういうの全部苦手になっちゃって……。今、困ってるんだあ、すごく」

「……はあ……大変ですねえ」

大変って。こっちのフォローも今いち間がぬけてる。

「俺のこと、変な奴だとか思ってない？」

まじまじとあたしを見て、藤谷先生は大真面目に尋ねる。

「まだそんなに思ってないです」

あたしも大真面目にそう答えた。

「ってことはちょっとだけ思ってる？」

「ちょっとだけ思ってます」

「そうかあ……」
うーん、と先生は悲しそうに唸った。
「でも、迷惑じゃないよね？」
「今んとこ、べつに迷惑じゃないです」
「そうかあ……迷惑じゃないかあ……」
謎の会話だ。
「あ、昨日は、せっかくの待ち合わせ忘れててごめんね」
いきなり思いだしたみたいに藤谷ナオキはまた謝る。……なっ何だと!?
「忘れてたんですか!?」
「あっあのね……だ、だからごめんね、尚太君は忘れてなかったんだけど俺のほうが一瞬スカッと忘れてて、んで、そういえば坂本君がいないなあなんて思ったんだけど、なんでだかわかんなくて、でもとにかく絶対いい曲ができあがるって気がしたもんだから、尚ちゃん巻きこんでやってたらどんどん頭んなかがぐしゃぐしゃになってきちゃって、そしたらお互いムキになって譲らなくなるし曲は仕上がらないし、そこに坂本君から電話があってあれっとか言って……だから、ええと、ごめんね、わざとじゃなかったんだけど」
「……はあ……」
わざとだったらさらに許しがたいんじゃないかって気がしたけど。

「あっ、あの、それから、その前に変な電話かけちゃってごめんね。あれはね……」
「ちょっ……危な……」
もうひとつあたしに謝ろうとして、前方不注意の藤谷ナオキさんは思いっきり喫茶店の入り口に頭をぶつけた。も……申し訳ない、あたしの一言が遅かった。
「……俺のこと馬鹿だと思ってる？」
「あ、あ、あの……痛そうだなあって思ってます」
哀れっぽく訊かれてしまって、あたしとしてはそう答えるしかなかった。どうしよう、イメージが……ロック版アマデウス・モーツァルトのイメージが……。
甲斐さん、という女の人を藤谷先生はあたしに紹介してくれた。
いや、実は逆だったかもしれない。甲斐さんにあたしを、だったかもしれない。
「あのね、この子」
藤谷先生のセリフはそれだけだったんで、彼がその時どういうつもりだったのか、あたしにはわからない。
「はじめまして、西条さん？」
あたしを見るなり喫茶店の席から腰を浮かせてにっこり笑った甲斐さんは、感動的にきれいなひとだった。

カッコいい活字を使った名刺がテーブルの上にさしだされた。あたしにくれたんだ、と気がつくまでちょっと時間がかかった。

「あ、ありがとうございます」

とりあえず丁寧にお礼を言ったあとで、またその名刺をどこにしまったらいいんだろうって思って少し困った。

甲斐弥夜子。

ＢＥＡＴ、って四文字がロゴマークになって名刺の左上に浮き出すみたいに印刷されていた。すごく立派な感じがした。

株式会社ＢＥＡＴプランニング&プロデュース。

マネージメント担当。

（ギョーカイの人だ）

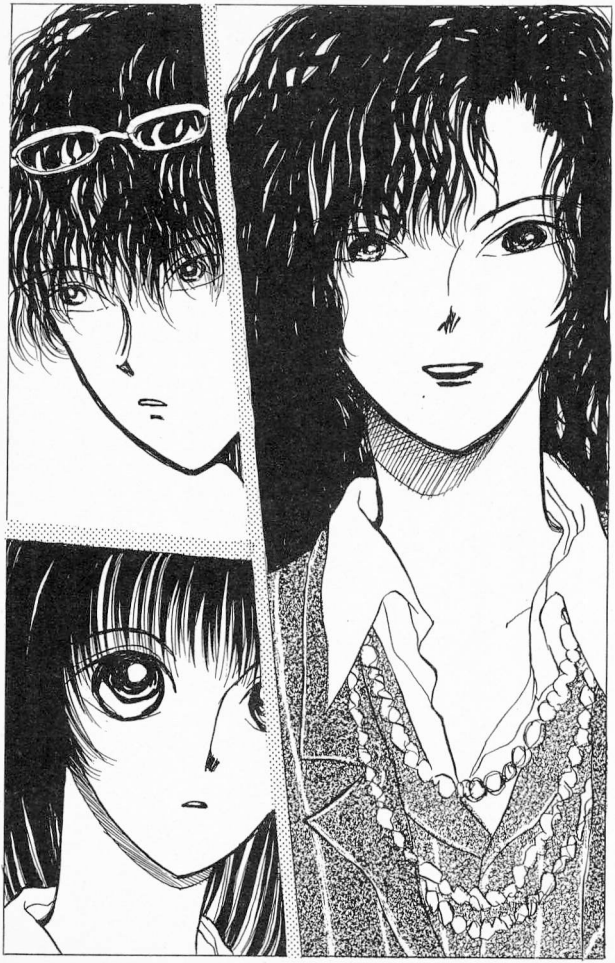
別にわざわざ、だからって緊張するつもりはなかったけど。しかしやはり。

「藤谷クンからお話は聞きました」

にこにこしながら甲斐さんはあたしを見て喋る。

「でもこの人の言うことだから、三回くらいお話をくりかえして聞かないと何が何だかわからなかったんだけど？」

この人、って指さされた藤谷先生はなんだかしょぼくれて小声で「ごめんなさい」なんて言



っている。

「あ、あのね、俺はブレンドコーヒー」

コートもぬがないで席にすわりこんで、藤谷先生は脈絡もなくそんなことを言う。話をそらしたんだろうか。

あなたは？　って目で甲斐さんがこっちを見た。一瞬、カフェオレとあたしは言いかけて、でもここじゃブレンドがいちばん安いってことに気がついた。

「あ、同じでいい……です」

四人がけのテーブルで甲斐さんと藤谷先生が向かい合わせに座ってしまったということは、やはりあたしは先生の隣に座るしかない……らしい。

非常に居心地よくないけど。

「さて、それでね……」

あたしがかしこまりながら椅子におさまったところで、甲斐さんがあらためて口をひらいた。

「ぶっちゃけた言い方しちゃえば、また藤谷がこっちの都合すっとばしてとんでもないことを言い出しやがったなってのがウチの事務所全体の見解なんだよ」

すごい美人の口から、いきなりすらっと男言葉がとびだしたんで、あたしは自分のことは棚に上げて驚きまくってしまった。

人は見かけによらない。

というか、こういうきれいな人は見かけを大事にしてほしい。

「とんでもない？」

一方で藤谷ナオキさんは、そんな意見は初めて聞いたって顔で、その言葉をくりかえした。

「だって俺、まちがってないだろ？」

だって地球はまるいんだろって言うのと同じノリだった。

「だーかーらー、事務所はもう藤谷がボーカルとって高岡がギターっていう、この組み合わせだけで充分に話題とれるし、今の流行からいってもバンド形態で売り出すより小人数ユニットのほうがファンがつきやすいからメイン二人組であとは打ち込みか、それがいやだったらサポートミュージシャンつけるって方針でいたのに、そこに藤谷がムリヤリ坂本君をわりこませてきたでしょ？　それで事務所が大騒ぎして、でもまあ坂本君なら『期待の新人』とかってアオリ文句つけて出せば、ドラム担当だからそんなに目立って二人を食うわけじゃないし、若いから中高生の女の子にアピールする材料にもなるし、男三人で最小形態のバンドユニットって売り方も決して悪くないって、そうやってレコード会社側もようやく納得させた矢先だっていうのに、今度はまた素人同然の女の子が入りますなんて言ってごらん、コンセプトも何も全部アタマっから組み直しになるんだよ？　事務所サイドだってねえ、一部の雑誌関係には、もうプロモーションにかかっちゃってるんだよ？　ここでそんなワガママ言い出したらどうなるか、

考えなくてもすぐわかるでしょ？」

流れるような弁舌、ってやつで、口をはさむスキもゆるさないで甲斐さんは一気に説明した。

すごく理路整然としてたから、問題の中身はあたしにもよくわかった。

（素人同然の）

（女の子）

それって、あたしだ。

「ふうん……。問題ってそれだけ？」

ひょいとテーブルに頬杖ついて、藤谷先生が言った。

甲斐さんはちょっと意表をつかれたみたいだった。

「藤谷クン、今の話、ちゃんと聞いた？」

「ちゃんと聞いてました。でも今の話のとおりの売り方だったら意味ないんじゃない？　だってその小人数ユニット礼賛主義って要するに《ＳＥＸＩＯＮ》と《ウィンディ・ウェンディ》が開拓した路線、コピーしてるだけだろ。アタマ固すぎるよ、流行ってるもの後追いしたって結局まっ先にやった連中より上に行けないじゃない。俺は今よりひとまわり進んだ流行を自分で演出できるし、どうせならそっちのほうが事務所にもメリットあるんじゃないの？」

……あれ？

なんか……ものすごく違和感があると思ったら……藤谷先生がまともに喋っているのだった。……失礼な発想をしてしまった。

「そりゃ藤谷の言いたいこともわかるけど、だけどやっぱり売れるための『公式』ってのはあるでしょ。どんなに上質な、進歩的な音楽つくったって、まず売れてくれなかったら誰の耳にも届かないんだよ、それじゃ困るでしょ？」

「あたりまえだよ、わざわざ金かけて売れないもの造るくらいならアマチュアバンドで遊んでたほうがマシだろ。俺はね、事務所が今の方針でやってくんだったら『そこそこに』しか売れないんじゃないのって言ってるんだよ。でも俺はもっと『爆発的に』売れたいから、俺のやりかたで準備してるし、それは絶対に間違ってない。……つまるところ、非常に誠実に、事務所に貢献してるだろ？」

「あのねえ……」

甲斐さんはがっくり疲れた感じで、両肩を落としてしまう。

あたしも、ここまで平然と大胆不敵なセリフを吐く人には、はじめて出会った気がする。威張ってんでもなくて、ムキになってるんでもなくて、虚勢でもなんでもなくて、とにかくこんなこと誰だって百も承知だろって口調で言うから、なおさら怖い。

「……だから、ねえ……。今度のバンドに藤谷が自信もってんのはわかるんだよ、それを信じたい気分はうちの事務所にもあるんだけど……やっぱり企業のお偉方に、『自信あるから大丈

夫』だけじゃ納得してもらえないでしょ、言うだけなら誰でも言うからさ……それじゃお仕事は成り立たないでしょ？」

「要するに実績があればいいんだ？」

指先でとんとんリズムとりながら、さらっと藤谷先生が言った。

「口でどーこー説明する前に、通知表に5をとってくればいいんだ？　じゃあ、それやっちゃおうよ。どうせだからデビュー前のプロモーションも兼ねてさ」

5

「ほえ？」

ギタリスト高岡尚が火をつけようとしてくわえかけてたセーラムライトを見事にすっとばして床にころがした模様を、間近で、ナマで、リアルタイムで見てしまった西条朱音さんは、時と場所をかえりみなければ大ラッキーだったかもしれない。……仮定形。

「あのね、センセイ、ちょっと待ってほしいんだけど……」

「何が？」

「今、俺の耳がなぜか現実を拒否したんだけど……」

「何で？」

「俺に訊かないでほしいんだけど……」

のばしっぱなしの茶色い髪をばっさり顔の前にたらして、うらめしげに尚がぼそぼそ言う。なにやら幽霊みたいだった。その髪形からして。

あたしはあたしで、よかった常識の通じる人がちゃんといた、とぼんやり思ってるくらいが関の山で、実際、尚の二十倍くらいは頭の中ががんがん鳴ってたはずだった。

ああそうだ、そもそも言い遅れたけど、ここは例の神宮前の藤谷さんのお宅の、もはやスタジオとしか呼びようのないリビングルームで、あたしはついさっき先生に（甲斐さんとの顔合わせが終わるやいなや）強引にここまでひっぱってこられて、それでやっとこの一軒家に実は高岡尚と坂本一至くんがふたりとも間借りしているんだってことを知らされて、なんだよ合宿生活してるんだったら真っ先に教えといてくれよとか思いつつ、でもそんな文句言ってるどころの騒ぎじゃなくて、とにかく……だから、ええと、誰かこの藤谷ナオキをなんとかしてくれ!!　と心の中で唱えつづけていたのだった。

幸か不幸か、ここの二階に間借りしてるはずの坂本くんは留守だった。……また例によって、どっかの楽器屋さんで遊んでいるのだろうか。

（なぁんでいないんだよ、こんな時に、ばあああかっ!!）

大いなるやつあたりなんだけどさー……坂本くんに罪はないんだけどさー……。

「……わがっだ」

苦虫をかみつぶしまくった発音で、わかった、と尚が言った。

もしかしなくても、一般的に、こういうノリはいわゆる、めちゃくちゃ不機嫌、ってやつじゃないんだろうか……。

（やだやだやだ……）

なんとかしてくれよ……。

生身のホンモノの高岡尚がすぐそこにいるってだけで大変なんだから。なにもわざわざ、よりによって怒ってる尚じゃなくたって。

この人、実は怒りっぽい人だったりするんじゃないのかなあ……だったらすっごくやだなあ……怖いんだけどなああっ……。

わかった、っつったきり、ぽかっと沈黙が入って、それがまたさらに怖かった。

藤谷先生みたいにがしがし喋ってくれたら、内容はともかくとして、聞いてるほうは楽なんだってことがよくわかった。

だいたいこの人、現在のところ、あたしとは一言も口きいてない気がする。

なんだか、あんまり、あたしがここにいる意味ってないんじゃないかって気がする。

でも、責任上、ここでいなくなるわけにもいかないから、おとなしく置物みたいにしてるしかなくて。……そういうのって困る。

すごく困る。

「……わかったけど、よくわからんから、ここまでのハナシ、総合的にまとめるけど……。あ、先生、ライター貸してよ」

わしゃっと茶色の前髪おしのけて、さっきすっころがした煙草に尚はあらためて火をつける。たまたまこれがこっちから見たら、さりげに絶妙の角度で、あたしは怖がってたのも忘れてくらくらきてしまった。……どっひゃー、ちくしょー、やっぱしかっこいーじゃん、なんなんだよ、やだなあっ、と思ってたら、

「これ、前髪さあ、たまに、いつの間にか焦げてることあるんだよ。怖いと思わない？」

やたら真顔で尚はこっちを見て、いきなり謎のセリフを口にした。何を言い出してるんだ、この人は……。

「一度、思いっきりカチカチ山状態になったことがあってさあ……あのときは生命の危機すら感じたね、俺は……」

「か、かちかちやま……」

「髪が燃える匂いってアヤシイんだ、いわゆるタンパク質の燃焼する匂いだから。怖い話でしょ」

なんなんだ、この怪しすぎる話題は……。

「すっげえ怖い、ですね」

「うん、そうなんだよ、怖いんだよ」

まさにそのとおりなんだよ、と、うんうん自分で頷いてから、結局またもや、尚は深刻なカオのまんまで黙りこんでいる。あのー、高岡さん、今の発言にはいったいどういう意図があったんでしょうか……？

……それなりに気を遣ってくれたのかな。

「で、つまり先生さあ……当初の予定の話と違わない？　事務所を説得するどころか、実はかなりヤバいほうに追いこまれてない？」

「……当初の予定って何だっけ？」

大まじめに先生が訊きかえす。がくっ、と尚はアクションつきで口走っていた。すばらしく的確な感情表現だとあたしは思う。

「だってショウタくん、事務所との交渉カンケイは俺に全部まかせるって言ってただろ？」

「それはあんたが『だーいじょーぶ俺がリーダーだからきちんとハナシつけてくるから』つったからじゃなかったっけ？」

「だから、その通りにしただろ？　簡単じゃない、たかが三千人かそこらの客をノセればいいんだから、頭カラッポのレコード会社のおっさん連中ノセるよりそっちのほうがてっとりばやいだろ？」

要するに、そういうことなのだった。

言葉でどーこー言うより先に、音楽で黙らしちゃえばいいんだ、どこかで一回ライブコンサ

ートやっちゃおうよ、それでステージの成果を見て判断してもらおうよ、どうせ客がつけば商売人なんてコロッと態度ひっくりかえしてくるんだからさ……と、藤谷先生がおっしゃったときは、ああそうか正論だなあとあたしも思ったのだった。

しかし。

なんでそれでいきなり、その初ライブが、三千人収容の野外ステージになっちゃうんだよおおおっ!?

「そのアイデア、キャパ百五十人くらいの小屋なら俺の常識の範囲内のおハナシだったんだけど……」

「だって、この場合、ライブハウスくらいの盛り上がりじゃハッタリが足りないだろ？　どうせならドームとかアリーナとかスタジアムくらいがよかったんだよ、ほんとは」

よくないっ。全然よくないっ。

「たまたま、大急ぎでブッキングできそうなステージが野音にあったから、ちょうど目の前に」

「そのブッキングからして凶悪じゃない？」

煙草の灰こぼしながら、上目づかいに先生を見て、尚がぼそっと言った。

先生はなんだか、そこで、あいまいな黙り方をしたみたいだった。

「……凶悪かなあ」

「きょおおお……っあくっ、だと思うよ、俺は」
「……そうかなあ」
あんまり納得してない感じで、藤谷先生はぶつぶつひとりごちている。
凶悪と言うほどのことかどうかあたしにはわかんないけど、藤谷先生が、めちゃくちゃ大変なステージに割りこんだのは確かだった。
いくらなんでも三千人クラスのステージが、使いたいからってすぐに使わせてもらえるはずがなくて、じゃあどうやってそんなライブやるのかっていったら、どこかの大きなコンサートの『前座』として、ついでに出してもらうことになるのだった。
で、二十日後に野外音楽堂をキープしてるのは、こともあろうに、おなじみの。
Z－アウト、じゃないかああっ!!
「あのね、もうひとつ言うけど、先生、もしかして困ったこと忘れてない？」
煙草もってないほうの片手で頭をかかえつつ、尚がなんか言おうとした。
電話が鳴ったのは、ちょうどその時だった。
ここの電話は呼び出し音がふつうのベルじゃなくて、かわりにいきなりメンデルスゾーンが流れだしたもんだから、藤谷先生がすぐ近くの受話器をとりあげるまで、まさか電話がかかってきたんだとはわからなかった。……変な家だなー、つくづく。
「ほい。……あれ？」

意外な人からかかってきた電話らしくて、藤谷先生は目をまるくしている。
「そう、俺。……ほお。今から？」
それだけで、がちゃんっとあっけなく電話を切って、先生はいきなり手元のコートとりあげて、何をどうするんだろうと思って見てたら、なんも言わずにすたすたと部屋から出て行ってしまった。
むこうで、玄関のドアが閉まったらしい音が聞こえた。……は!?
あのっ、せっ先生っ、話の続きはっ……。
「……あれはね、今、頭の中身、倍速ダビングモード状態」
慣れてるのか何なんだか、尚が小声で解説してくださった。
「放っとけば、そのうちリバースするから、多分」
人間ラジカセですか、あの人は……。
どっかんばたがしゃん、という騒音が玄関に戻ってきたのはそれから三秒後だった。
廊下のあちこちにぶつかりながら駆け戻ってきた先生は、口をひらくなり、
「あっ朱音ちゃんっ!!　置いてっちゃってごめんね、ちょっと今、一緒においで!!」
はあっ？
なんかすごく必死に言われてしまって、それも一刻を争う雰囲気で、しかも藤谷先生のめちゃくちゃボリュームのある声で追い立てられて、この人ってばラジカセどころかラウドスピー

カーシステムじゃないかっと思いつつ、よくわかんないうちにあたしはそこから連れ出されていたりした。……先生、先生っ、尚はいったいどーなったんですかっ。

6

サイレンみたいに凄まじい高音が、ど正面から、頭の真上をつきぬけていった。
甲高く打ちならしたサンプリングの金属音が、まわりじゅうにしつこく響いて止まらない。
規則的な、心臓の鼓動より早めのスピードで、分厚い重低音がガツガツ足元から攻めてくる。
「桐哉ッ」
「ト――ヤアッ」
すぐ隣で女の子たちが金切り声しぼりだして、ステージに立ってるボーカリストの名前を呼んでた。
お洒落なライブハウスのフロア一杯に、黒ずくめに染まった女ばっかりの客がスタンディングで詰めこまれて、みんながみんなして好き勝手に踊り狂っている。
身体全部、リズムとらずにいられない。麻薬みたいに強引にひきずられて動かずにいられない。

人間が叩いてるんじゃない、機械で打ち込んだスネアドラムが、暴力的に、人形みたいに踊らせる。圧倒的な轟音で神経ぶっこわして、何がなんだかわかんなくさせる。

お城みたいに積み上げたシンセサイザーの山の中で、全部の演奏を一手にひきうけて、黙々とキーをはじく無表情なメンバーが、ひとり。

真っ黒のレザーでかためた衣装で、バリトンっぽい声でシャウトしてるボーカルが、ひとり。

この大騒ぎの中、ステージに乗ってるのは、そのふたりだけだった。

藤谷先生は関係者招待口から、ふらりと顔パスでフロアのいちばんうしろにもぐりこんで、すでにたけなわって感じのステージを、特にリズムにノるわけでもなくてすごく普通のものを見る雰囲気で、なんにも言わないで立っていた。

なんで先生が大急ぎでこんな場所までかっとんできたのか、あたしには全然わからなかった。おまけに、なんでそこにあたしを連れてきたのかは、ますますもってまるっきりわからなかった。

《オーヴァーサイト・サイバナイデッド・クローマティック・ブレイドフォース》、むりやり略して《オーヴァークローム》という、その二人組のことなら、一年くらい前、デビューした頃からあたしも知っていた。新時代のテクノ・ロックを担ってるとか言われて、かなり人気のあるグループのはずだった。

もうホールクラスの動員なら軽いんじゃないかっていう、赤丸つき成長株の人たちが、わざわざライブハウスでやってくれてるわけだから、そりゃーお客さんも燃えるんだろうと納得したけど……こういうノリってもちろん好きなことは好きだけど……なんとなく、あたしの気分だと、生のドラムもベースもギターもいない、どれもこれも機械だけで代用した演奏ってのはちょっと寂しいって気もした。……ないものねだりかもしれない。慣れの問題かもしれない。

コンピュータで分厚く造りこんだオケは、たしかにすごく上質にまとまっていて、それをやかましいSE音でうまく飾って、有無をいわさない絶妙のテンポで、さあどうぞと客をお盆にのせて踊らせてる感じがする。

文句のつけようなんてどこにもない。

「バッカ野郎ッ!!　てめえら、ハンパに乗ってんじゃねえよ、足りねえんだよ!!」

いきなり、その豪華絢爛なコンピュータ・ミュージックの世界をぶっこわして聞こえてきたのは、思いっきり喧嘩腰の大声だった。あたしはびっくりした。

それは例の黒ずくめのボーカル——たしか名前が真崎桐哉、だった——が、客にむかって吐き出したセリフだったんだけど。

「やる気あんのかよ!!　根性あんのかよ、それで!!　てめえら揃いも揃って、元からカラッポのアタマ並べやがって、んなんで今夜、無事に帰れると思ってんのか!?　次がラストだ、カッコつけんなよ、ギリギリまでイッちまえよ!!」

黄色い喚声が、フロアいっぱいから嵐みたいにわきおこった。まわりじゅう、跳びはねてよろこんでる客ばっかりだった。

びっちり黒服でかためたお洒落な女の子たちが、ほんとに全員、桐哉の一声で、まるっきり正気をなくした。

「そうだろ!?　はじめっからろくなモノじゃねえんだろ!!　腐りきってんだろ!!　本性出しちまえ、せいぜいここから見下ろして笑ってやるからよ!!　――よぉぉし、ラスト一曲行くぜ!!　出てくる曲の名前くらい知ってんだろ、言ってみろ!!」

オーヴァーサイト、サイバナイデッド、クローマティック、ブレイドフォース、と桐哉の声にあわせて客がいっせいに合唱して、レザーの影が風を切るみたいに動いたとたんに。

がつん、とそれが来た。

シンセサイザーで丹念に織りあげたはずの音が、全部、バリトンヴォイスのボーカルで吹き飛ばされてめちゃくちゃになって、すごい勢いで突っこんできた。

（痛っ）

一瞬、耳をふさごうかと思った。

刃物かと思った。

……こいつ、ケンカ売ってる。

それは音楽なんてもんじゃなかった。いろんな音がひとつになって世界をつくるなんてもん

じゃなかった。

黒いレザー抱きしめてステージで踊りながら、目がくらむフラッシュライト浴びて歌いながら、ほんとは何か別のものとケンカしてる。

自分のまわりの音全部と、まわりの客全部と、それからまわりじゅうのもの全部、自分ひとりで切り裂いていこうとしてるみたいだった。

だけどバックでシンセ鳴らしてる人間のほうは、そんなノリ自分には関係ないって感じで、もりあがってんなら勝手にすればって感じで、最初っから最後までずっと無表情のまんまで、それは曲が終わって桐哉がさっさとステージから消えてフロアの客が大騒ぎでアンコールを叫びはじめても、ぜんぜん変わらなかった。

「じゃあ、行こうか」

突然、耳元で藤谷さんの声がした。

「え!?」

はっきりいって、あたしはすっかりわけわかんなくなってた。前後の流れ、ぶっとばされていた。

……そういえばそうだった。藤谷先生と一緒に来てたんだった。

「大丈夫、オーヴァークロームは絶対、アンコールやらない主義だから」

あたしがびっくりしたのを違う意味で解釈したらしくて、そんなふうに説明して、藤谷先生

はさっさと歩きだした。
出口に、じゃなくて。

「ラスト二曲で来る客ってサイテーじゃん？」
開口一番、あたしの目の前で、そんなセリフを吐いたのは、ついさっきまでステージに立ってた人だった。
あのー先生っ、なんであたしたちはオーヴァークロームの楽屋に来てたりするんでしょーか!?
「俺ねえ、たしか、今日がライブだなんて聞いてなかったと思うんだけど……」
ぼそぼそと藤谷さんが弁解する。
「別に、ほんとは、最初っから呼ぶつもりなかったから。今回はシークレットっぽく、雑誌なんかにもろくに告知出さねえで、ファンクラブだけでチケットさばいたやつだったしさあ……どうせ御招待すんなら武道館だろ、やっぱり？」
まだ汗だくの真崎桐哉氏が、スポーツタオルひっかぶった状態で答えた。
……お友達カンケイなら、そうならそうで、先に言っておいてほしかったな、という気が少し、する。
「でもいきなり、ステージの最中だってのに、うちまで電話してきたんだ？」

なにか確かめるみたいに、藤谷さんが訊いた。
「そりゃ、あれだろ、ステージ直前に変なハナシが聞こえてきたからだろ」
あっさりと真崎桐哉が言った。
（え？）
……何だろう、今の。
普通の言い方してる裏側で、どこかが、すぱっと切られた。
刃物で。
見えないどこかで。
……何だろう。
「変なハナシって？」
「知らないの？　バッカだなあ。俺、Z－アウトのレージさんと仲がいいんだよ。今度の野音のステージ、オーヴァークロームをゲストに呼んでもいいって言われてるくらいにさ」
「それなら俺も前から知ってるけど」
「へえ、知ってるんだ!?　知ってて前座にねじこんだわけ？　勇気あるよね。ってことは、事務所の力関係からしてZ－アウトがそのハナシ蹴っちまうわけにいかないってのもわかってたんだろ。どうせ高岡尚をダシにしてZ－アウトの客もらっていこうって魂胆だって、レージさんたち凄く警戒してるぜ」

警戒って。

「そんな話なら何も変じゃないだろ、せっかく高岡君に前からの固定ファンがいるなら狙わなきゃ馬鹿だろ？　お互いに仕事でやってるんだからそれくらいのことはいつだって考えるし、客なんて勝手につきたいほうにつくんだから、むやみやたらに警戒したって意味ないだろ？」

藤谷さんの態度はずっと、例の、あくまでも自分が言うとおりに地球はまわるって感じからはずれない。

ぜんぶ自分が承知したとおりってところから、変わらない。

「ふうん、じゃあ逆にオーヴァークロームがおまえらの客を潰しにかかっても、文句はないっていうわけだ？」

「いいんじゃない？　そもそもZ－アウトの野音って、オーヴァークロームが出るから、前から『極秘ゲスト有り』って宣伝になってるんだし、そういう扱いだからこっちも割りこみやすかったってのはあるし」

ちっ、と真崎桐哉はすごく苛立ったみたいに舌打ちした。

「結局、おまえにかかったら、俺のオーヴァークロームまで都合よく使われちまうわけかよ!?」

「結果的に、いちばん都合がいいものを選んでいったらそうなったってだけじゃない？」

……驚いた。

あたしは本当に驚いていた。
こんなぐちゃぐちゃな、こんな面倒なところに、藤谷さんてば強引にねじこんでたんだ。
いちばん都合がいいからって。
なんにも考えてませんって顔してたのに。
（事務所の力関係からして、向こうは断れない）
（サポートだった高岡尚をダシにして、ファンをもらっていこうって）
（だからZ－アウトが警戒して）
（オーヴァークロームが潰しにかかっても）
全然、あたしはそこまで気がつかなかった。頭がまわらなかった。
凶悪なブッキングって尚が言ってたのは、きっとそれで。
そんなこと無理矢理やって、もし失敗なんかしたら。
もし大失敗なんかしちゃったら？
「ったく……やってらんねえなあ……!!」
ばさっ、とタオルはねのけて、真崎桐哉が唸った。
この人がどういうつもりでこんなこと言ってるのかも、今ひとつわかんなかった。
どうしてこの人、藤谷さんをわざわざ電話で呼び出して、しかも自分のライブの直後なんかに、こんなこと話してるんだろう。

オーヴァークロームが本気で藤谷さんを潰しにかかってくるつもりだったら、そんなこと親切に教えたりしないほうがいいんじゃないかって気もする。

でもこれは、藤谷さんのことを心配して忠告してるっていうんでも絶対になかった。なんかすごく、本当に、心底、このハナシが嫌なんだってのはビリビリ伝わってきた。

（……あれ……？）

でも、じゃあ、なんで藤谷さんも、電話一本でここまでかっとんできたんだろう。

なんなんだろう、この人たちって。

「だから、はじめっから、桐哉とやりあおうとか俺は思ってないよ。今回、たまたま、そういう流れになったけど……俺はただ、ちゃんとしたいんだ」

ちょっと低めの声で、藤谷さんがぽつんと言った。

「……俺の音楽をちゃんとやりたいだけなんだ」

「そんなもん軽々できちまうだろ!?　おまえひとりで、充分、なんだってできちまうだろ!?　そこに他人巻きこんだって藤谷直季のクォリティ落として、まわりの奴らダメにするだけだろ!?　いいかげん諦めて、つまらねえバンド遊びなんかやめちまえよ!!」

「嫌だ」

間髪をいれずに。

藤谷さんがきっぱり答えた。

「それは嫌だ」
「……」
真崎桐哉はもう一度舌打ちした。
それから。
え？　……目が合った。こっちを見た。
それまで全然関係ないって感じだったあたしに向かって、突然、言った。
「……あんたさあ……そう、あんただろ、こいつが引きずりこもうとしてんのってさ……自信、あんのかよ？　こいつはマジで天才なんだぜ、まともな人間じゃついていけない相手なんだぜ？　あんたのせいでこいつの音楽がぶちこわれないって保証、できるのかよ!?　それだけの覚悟あんのかよ、え!?」
「……」
ちょっ……と、待っ……。
喉でなにかが詰まってしまった。
今、そんな、自信とか、保証とか覚悟とか、そういう次元で訊かれたら。
だって、今はまだ。
そんなのって。
（朱音ってば、どっかの天才児に見初められて）

（うまくやったじゃん、頑張れば？）
（素人同然の女の子が入りますなんてワガママ言ったら）
あ、やだ。
いろんな言葉が聞こえてきて頭ん中ぐるぐるまわりだした。
いやだ。
こういうの。
なんか答えろよ、馬鹿。
早く言えよ。なんだっていいよ、日本語ならなんだっていいから。
ちゃんと答えないと負ける。
（だから、あたしいないほうが全部まるくおさまってて）
（坂本と尚にまかせといて逃げれば）
だって。西条、代わりだから。
（捜してたドラムの音そのものだったって）
坂本くんの叩く音と。
――そんなもの機械でいくらでも造れるじゃないかっ!!
「あ、あたし……」
そもそも話がでかすぎる。代わりなんだから代わりってことで、放っといてくれればよかっ

たのに。なにもこんなに急に凄まじいセッティングしなくてもよかったのに。あたしはただ高岡尚のファンだったから、それでもってちょっとラッキーな状況じゃないかなんて、軽く考えて。

軽く考えてたら。

「あたしは、別に」

……ああ、でも、あのできかけの名曲、誰が弾くんだろう。ドラムのことはまだよく自分でわかってないけど、むしろ坂本くんがどう叩くんだろうっていうほうに興味あるけど、でも鍵盤だったら、あんな弾き方にしたいとかこんな音色にしてみたいとか、実はいろいろ言いたいことあったんだけどな……やってみたいことも、いくつかあったんだけどな……前のバンドじゃシーケンサーなんて使えなかったから、こっちには機材マニアの坂本くんもいることだし、がんがん遊んでみたかったんだけどな……。

それで、それで、今んとこ保留状態になってるギターソロを尚がどう仕上げてくるんだろうとか、藤谷先生がどんな歌詞のっけてくるんだろうとか、それをどんな感じに歌ってみせるんだろうとか……。

そこに、現場にいなかったらわからない。

売り物のCD聴いてるだけじゃ何もできない。

もしも自分が、あの人たちと同じくらいのところに行けたら、それは本当に凄くて、もしも

自分がそんな風に……。
「即答できないってことは、つまりそういうことなんだろ」
いきなり真崎桐哉が一言で決めつけた。なっ……なんだよそれ!!
「違うっ!!　違うよっ!!　――今、自信はないけど、でも野望があるから!!」
口からするっと出た台詞に、自分で驚いた。
やっ、野望というのは……。
「だ、だって、音楽なんてっ、結局、その場で鳴ってる音しかないんだから……だから保証とか覚悟とか、言葉なんかじゃなんにも言えないし……」
やばい。
こんなこと言ったら、ほんとに後にひけなくなって。
「だっ、だいたい、簡単にまわりにぶちこわされるくらいだったら、それって天才って呼べないんじゃないですか？」
あああっ、やばいっ!!
よりによってこんな危なっかしい相手にケンカ売り返してどうするんだよ、ばかばかばかっ!!
欲に目がくらんで人生ふみはずしたのか、くやしさに目がくらんで泥沼にはまったのか、どっちなんだかよくわからないけど、多分両方なんだろうけど、そこであたしが逃げそこなった

のはたしかだった。

へーえ面白いじゃん、と真崎桐哉はつまんなさそうな答え方をしていた。……こ……怖かった。

殴られるんじゃないかと思った。

「朱音ちゃんに賛成。その、言葉じゃなんにも言えないってやつ」

ぼそっと先生が横から言った。

「桐哉だって知ってて言ってんじゃない？　あれこれ口で説明したって、実際、ステージ出るまでわかんないんじゃない？　保証なんかないんじゃない？」

あ……。

（こっちのほうが怖い）

ぼそぼそ言ってるだけで。

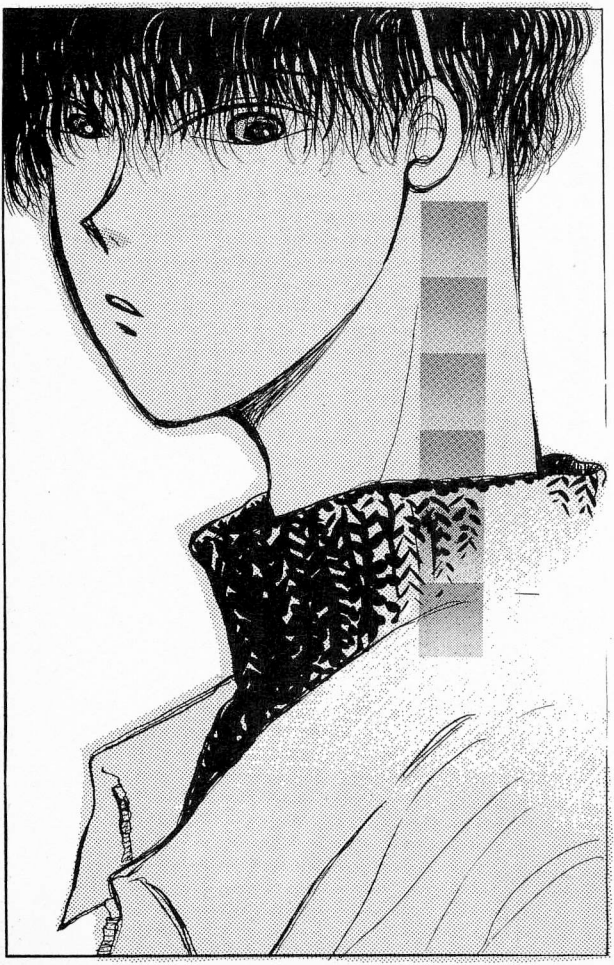
なんでか先生のほうがもっと怖い感じ、した。

「音楽だからね」

言ったきり、それっきり藤谷先生はさっさとコートの背中むけて楽屋から出ていってしまった。

ふりかえりもしないで。

……どうしよう。



あたしは目の前の真崎桐哉に突っ込まれてガタガタしてたはずなのに、今、あたしたちはまとめて一気に先生に置いていかれたみたいだった。全然、そんな次元じゃお話にならないって言われた気がした。がつんとくらった気がした。

わからないけど。

でも、背中に。

「行けば？　あんな奴、ひとりで街なか歩かせてたら迷惑の権化だぜ」

ぐてっと椅子にもたれかかった真崎桐哉が、あたしにむかってそう言った。

坂本と同じようなこと言ってる。

あんな人、ただの公害だって。

（音楽やってなかったら）

「……真崎さんは、どうして、藤谷さんのことを心配してるんですか？」

あ……変な訊き方をしたかもしれない。

「心配？」

案の定、目をまんまるくされて、それからけたけたと大声で笑われてしまった。

「……心配？　誰が？　言っとくけど、俺は、あいつのこと、世界でサイコーに大っキライ!!なんだぜ」

だったらなんであんなこと言うんだよ。

藤谷さんの才能なんてどーでもよかったらあんなこと言わないよ。
「キライなのにZ－アウトのこととか、教えてあげるんだ？」
「バッカだなあ、だから言うんだろ、宣戦布告ってことだろ。教えてやらないと一生わからねえ奴だからさ。――じゃあ、次は野音で会おうぜ、お嬢さん」
馬鹿だなあなんて言われても。
だってそんなの嘘じゃん。
でもとにかく桐哉のセリフからして、さっさと帰れと言われてんのは確かだった。あたしも長居なんかしないでさっさとこんな居心地悪い所から消えたかった。
「……あたし、オーヴァークロームって、かなり好きかもしれない、です」
最後にあたしが、それまでの話とは別にずっと思ってたことを、やっぱりなんだか本人に言いたくて、そう言ったら、
「おお、ありがとよ」
呟いて桐哉はにたりと笑っていた。……ちょっと意外な笑顔だった。

7

楽屋の周辺に、藤谷さんはやっぱり待ってなかった。慌てて外に出たけど、藤谷さんの姿は

どこにもなかった。
新宿の、がんがん車が走ってく大通りの脇で、ライブの興奮さめやらず帰ってく女の子たちの流れにまざって、あたしは茫然とせざるをえなかった。……これからどうすりゃいいのかわかんなかった。
もう、このまんま家に帰っちゃうって手もあるんだけど。
いいかげん夜中だってのに、制服のまんまでいつまでも突っ立っていたくないって気もするんだけど。
(だけど先生が)
なんであたしがこんな焦ってるのか自分でも知らない。
なんで先生が勝手にふらっといなくなったのを心臓がくがくいわせて追っかけてんのか知らない。
凄く怖い感じで。
「――西条!?」
う……わっ!?
びびびっくりした。ななにかと思った。
どっ、どうしてこんな場所で坂本一至くんと遭遇するんだろう。
「なにやってんの!?」

分厚い眼鏡のむこうで、坂本くんもやっぱり驚いた顔をしていた。そ……そりゃこっちが訊きたいよっ。

「あ、もしかして、西条もオーヴァークローム見にきてた？　俺、ついさっきまでこん中にいたんだけど……」

坂本は親指ですぐそこのライブスペースをさしてみせた。なっ、なんだそれは……。

「い、いたけど……いちばん後ろのほう」

ラスト二曲だけだったけど。

「ああ、そうか、俺、二階から見てたから」

だから見つけらんなかったんだな、なんて、坂本はひとりで呟いている。

「けっこうオーヴァークロームの音って面白い造り方してるから一度ナマで聴いてみたかったんだ、いつもチケットとるの大変だったんだけどさ、今日のやつはたまたま楽器屋で譲ってもらえたから」

聴いてみたかったって、あんた、黒服系の女の子だらけの客にまざったら浮きまくるだろーが、こんなぬぼーっとしたカッコの男がひとりでさー……。そういうこと全っ然、気にしないんだもんなー……。

「音造りしてるのってほとんど有栖川さんひとりだけど、あの人の知識とか理論とかってやっぱりタダモノじゃないだろ、あんな音ライブでどう再現するのかと思ったら、凄いセッティン

グもちだしてきてたから……あ、あの人の左手の上から四段目にセットされてたキーボード、何だったか憶えてない？　俺の場所からだと、ちょうどそこだけ死角にはいってたからわからなくてさ」

そんなもん見てないよ、悪いけど!!

……違うんだよ、違うってば、こんなとこで和んでる場合じゃなくって。

だから。

困ってたんだって言おうとして、何がどうなってんのかどうやったら説明できんのか、あたしの頭の中は真っ白になってしまった。

何から話してたらいいのか、あんまりいろいろありすぎて。

「だから……！」

気がついたら坂本の服の袖つかんでた。もう、ほんとにすがってる感じだった。

「あ、あたし藤谷先生おこらしちゃったかもしんないっ……なんか、どうしたらいいのかわかんないっ……！」

「ええ？」

坂本が顔しかめて聞き返した。

「だ、だっていないんだよ、いきなり置いてかれちゃったんだもんっ……」

こんなこと言われて何があったのかすぐわかったら坂本は人間じゃない。神様だって、こん

な混乱して慌てふためいた言い方されたらわかんない。
「藤谷さんがいたんだ？」
「いたけど、一緒に来たけど、ちょっといろいろあってそれで」
ちょっといろいろあってじゃ意味不明じゃないか、ばかばかっ。
「だから、なんか……真崎桐哉にケンカ売られたのに、やっぱり、あたしほんとに自信なかったから……あ、あたしがちゃんとしてないからさあっ……」
「真崎さんに会ったんだ？」
「あ、電話きて、先生が呼ばれてて……それで」
だめだ、ぐちゃぐちゃになってきたっ。
あんましこれ以上しゃべったら泣きそうだった。ちょっとでも口ひらいたら泣きそうになってんのバレそうだった。
なんだかもう。
「大丈夫だよ、藤谷さんって、そんなに面倒な人じゃないよ。絶対そのあたりでフラフラしてるだけなんだから、少したてばすぐに見つかるよ」
なだめるみたいに坂本が言った。
「ここで西条だけ気にしてたって、どうせ、あの人そこまで頭まわらないよ。とにかく捜してみればいいんだよ、そしたら全然心配なかったってわかるからさ……」

「俺は、今のところ、真崎さんって人と会ったことはないんだけど……」

暗がりの車道沿いに歩きながら、坂本から少し話を聞いた。

「真崎さんと藤谷さんって、名前違うけど実は半分だけ兄弟だっていうんだ。俺もあんまりよく知らないけど、藤谷さんって今、あんな大きい家にいるのに、誰も家族が一緒に住んでないから、けっこう複雑な感じはしてるんだ。そういうのって俺には関係ないから、詮索とかするのは嫌だし、藤谷さん本人からは何も聞かないけど、事務所の人たちとかはけっこう意識してるみたいで……俺がオーヴァークロームの音が好きだってこと言ったら、かなり深刻に、あそこにだけは近づくなって言われて……それでそんなハナシされたことがあって」

あそこにだけは近づくなって。

でも藤谷先生は、別に、オーヴァークロームのことも、真崎桐哉のことも、嫌ってなんかいないし敵視もしてないし。

ライブやってるって聞いたとたんダッシュしていくぐらいに。

あたしは藤谷先生本人じゃないから、そういうの……ギリギリに本当のことっていったら、わからないけど。

「だから、藤谷さんも、なにかそういう関係で考えることがあったのかもしれないし、だったらなおさら西条があれこれ気にすることじゃないよ。あんまりそこで踏みこみすぎるのって、

かえって余計なところ侵害してるんじゃないかって俺は思うし」
「……そうなのかな」
「たとえば、もしも俺とか西条とか……」
言いかけて、坂本はくだらないって感じで頭振って、途中で話をやめてしまった。
「そうじゃなくて、ほんとにあの人って、なんにも考えてないから、こっちで気にするだけ無駄なんだよ！　藤谷さんってそういう人なんだから！」
「……それって……」
なんで藤谷さんにかかわる人たちって、みんなして、こういう身も蓋もない言い方するんだろう……。
「あたし、あの人って、実はすごく頭いい人だと思うんだけど……」
「どこが？」
……ほんとに身も蓋もない。
だからさ、と説明しようとしたら、坂本が隣でぴたりと足を止めてしまった。
何かと思ったら、声ひそめて、いきなり。
「あのさあ、いやーな予感がするって言っていい？」
「は？」
「俺の勘違いじゃなかったら、あれって……」

と、坂本が指さしたものっていったら、十メートルくらい先の、排気ガスで思いきり汚れたガードレールに、ベッタリよりかかって座りこんでる人間の影で、それで、その道端にひきずってるコートにはあたしも見覚えがあったかもしれない……。

「せっ……」

ちょっと何やってんの、どうしたのこの人、なんでこんな変なとこに。

なんか、まさか、もしかして具合悪いんじゃないの!?

「――先生っ、先生、どうしたの!?　大丈夫なの!?」

よくわかんないけど焦りまくって、あたしはばたばた走って、藤谷先生とおぼしき物体の前までいってしゃがみこんで、とにかく出てきた言葉をそのまんま喋ってた。

けど。

え、何これ。

……返事がないよおおっ!!

「先生!!　先生ってば!!」

あたしはもう本気で泣きそうになってて、それ聞いて何か変だと思ったらしくて坂本の足音がちょっとスピードアップして追っかけてきて、どうしようって必死の思いで坂本に訊こうとしたら、その時だった。

「あっ!!　できたっ!!」

耳元で、あたしは鼓膜がおかしくなるくらい大音量の声を聞いてしまった。はっきりいって度肝ぬかれた。

ええ？

「完成した!!　これだよ、これ!!」

地面に両手の指いくつか動かしながら、藤谷先生がそうおっしゃっていた。……あのー……先生？

「あれっ朱音ちゃんだ、どうしたの？」

ふいと目を上げて、それからびっくりして先生が訊いてきた。……ど、どうしたと言われてもっ。

「あっ、そうだ聞いて聞いて、今日さあ、お昼ごろからずっと頭のまわり、このへん、ふわふわしてた曲があったんだけど、たった今それ全部、アレンジまで仕上げちゃったんだよ、これすごい傑作なんだよ、もう俺これ遺作にして死ぬんじゃないかと思っちゃったし」

「……はあ……」

今日の昼からって……ずっとそんなことやってたのか、この人は!?

「もう、完璧!!　絶対、これ聴いたら感動する!!　あっ、まずいよね、忘れないうちに早く本物の音にしとかなきゃ……あれ？　坂本くんまでいるんだ？　なんで？　ふたりともずっと一緒だったっけ？」

だったっけって、ねえ……。

「あのさあ……」

めちゃくちゃフクザツな表情で、坂本くんが先生にむかって口をひらいた。

「もしかして、藤谷さん、またしても前後の記憶が飛んでない？」

「あ……うん、そういや飛んでるかもしんない。いや……そうだよね、俺、朱音ちゃんの学校に行ったんだよね？」

そんなっ……真顔で同意を求められても。

「……そうですけど」

「うん……そうか、あ、甲斐とミーティングしてる途中ぐらいまではちゃんとしてたんだけど、ちょっとそれくらいから変になってるかもしんない……俺、変じゃなかった？」

変って。

それ言われたら、そりゃー変だったよおっ、ずううううっと変だったよおおっ!!

こ、こ、この人はいったい自分がどーゆー事態を招いてんのか自覚してんのかっ!?

だから言ったじゃん、というマナザシで坂本があたしを見てんのがわかった。

よ……よくわかったよっ。非常によくわかりましたよ、骨身にしみてっ。

「坂本くんさあ、うち電話してショウタくんに車もってきてもらえないかなあ、俺、はっきりいってここから一歩も動きたくないから」

これで今カラダ動かしたらせっかくできあがった音が外側にこぼれるから、という謎の理屈で藤谷先生は迎えの車を要求して、はいはいわかりましたと呟きながら坂本くんは近くの公衆電話をさがしに歩いていって、あたしは目の前くらくらする状態で先生といっしょに地面にしゃがみこんでいた。

「どうしたの、朱音ちゃん、大丈夫？」

「ち……力がぬけました」

他にどう答えろというんですかっ。だーもーっ。

「あの……ごめんね」

たいへん心許ない様子で、先生はふかぶかと謝ってくださった。はあ。

「なんかねえ……甲斐が、ってのは事務所がってことだけど、いろいろ朱音ちゃんのこと、ないがしろに言ってたから……それで俺もかなり腹が立ったんだよね。すごく嫌だったんだ、ああいう、公式とか戦略とか、出来合いのコトバだけで俺の音楽を邪魔されるのって」

……あれ？

「だってさ、甲斐も、それから桐哉もだけど、まだ朱音ちゃんの出す音なんてぜんぜん知りもしないで外側だけで話をするじゃない？　立場とか、年齢とか、キャリアとか、そういうものって、実際に鳴ってる音の前では無力なものじゃない？　俺はそういう偏見とかに邪魔されるくらいなら、そいつらよりもっとでかいハッタリで、出来合いのものなんかひっくりかえして

やりたくなるんだよね」

……ちょっと待って。

この人、実は、ちゃんとぜんぶ憶えてるんじゃないの？

前後の記憶すっとばしたとか言って。

「だからどうしようかなって、そこで怒るのと、作曲モードに走って理性捨てるのと、どっちのほうがいいかなって考えたんだけど、俺の場合怒るのってあんまり得意じゃないし発展性もなさそうだったから、まあいいや理性かっとばしとけばなんとかなるだろうって、それで一気に作曲モード全開状態にして」

わ……わかんないっ……。

するとこの人の場合、理性かっとばしてる状態のほうが理性的なんだろうか？　……なんなんだよそれ……。

か、考えるだけ無駄ってやつかもしれない。ほんとに。

「……俺のこと呆れてる？」

こわごわと先生は訊いてくる。あのねえ……。

「呆れるっていうか、そういうことはないです、けど……」

「そうかあ……」

先生は地面のうえを鍵盤に見立てて両手の指をがちゃがちゃ動かして、それからまたぽつん

と言った。

「朱音ちゃんが野望もってよかったなあ、俺、これで朱音ちゃんがあっさりやめますなんて言う子だったら大声で泣いてたよ、慟哭してるよ、本気で」

げっ……。

やっぱり憶えてるよ、この人……。

「今はそれでいいから、そのうち自信あるって言ってよ。だって朱音ちゃんの音は、俺が見つけたんだよ、俺が自信もって見つけたんだよ、それでだめだって言われたら俺の自信が粉々だよ、そんなの絶対だめだよ」

「……」

「なんでみんな、こんなこと、コトバで説明しないと伝わんないのかなあ……。コトバなんかなしで、全部まるわかりだったらいいのになあ……」

足元の地面まっすぐ見つめながら、藤谷先生はひとりごとみたいに言った。

「だってさ……だって、俺の、俺の頭の中には、もう『音』がぜんぶ見えてるんだ。ぜんぶ、すぐそこに見えてるんだ。あとはそいつを出すだけなんだ。それだけのことじゃないか……」

それから先生は目をあげて、あたしを見て、もう一回くりかえした。

「あとはそいつを出してやるだけなんだ。どういう意味かわかる!? 俺の! 俺の中には! もうあるんだ、ショウタくんがいて、坂本くんがいて、朱音ちゃんがいて、それでできてくる

音ってやつが！　そうじゃなくちゃできない、俺ひとりじゃできない音ってやつが！　すぐ近くにあるんだ……！　あとは、ホントにするだけなんだ！」

「……」

なんだか、言葉が出なかった。

こんなに真剣な人、見たことないって気がした。

そこから言葉が湧きだすみたいに。

自分の胸元、にぎりしめた拳でおさえて。

泣くんじゃないかって思った。

それぐらい真正面から。

「桐哉はあんなふうに俺のこと天才だなんて言うけど、でもそんなのカンチガイだよ。俺のこと、魔法みたいにどんな音でもつくれるって思ってるけど、そんなの嘘だよ……。俺は俺の音しかつくれない。そんなのじゃ俺は嫌なんだ」

そんなのじゃつまらないよ、と呟いて、藤谷さんはまた地面のうえの、架空の鍵盤を弾きはじめた。しばらく喋らないまんまで。

あたしも、そのまま、なんにも言えなかった。

自分が考えてることも、なんだかちゃんとまとまらなかった。

ただ、頭の隅のほうで、先生が弾いてるメロディーが、ほんとに聴こえてくればいいのにと

思っていた。

「だからまず、やってみようよ、やる前からあきらめちゃだめだよ、でなきゃ朱音ちゃんの音楽がかわいそうだよ。……多分、俺の言うこととか、かなり厳しいけど、それでも負けない根性ふりかざしておいでよ。絶対、俺たち、凄いことできるから」

「……」

こんな、悪魔の誘惑みたいなセリフ聞いて、こんな今にも泣きだしそうな人を前にして、それでやっぱりだめですなんて、絶対言えないよ。

こんなの凶悪だよ。

すでに犯罪だよ。一流の詐欺師より、ずっと悪質の。

「あっ、坂本くん、どうだった、ショウタくん家にいた？」

戻ってきた坂本に気がついて、先生はそっちに声かける。

「いたけど……これから来るけど……」

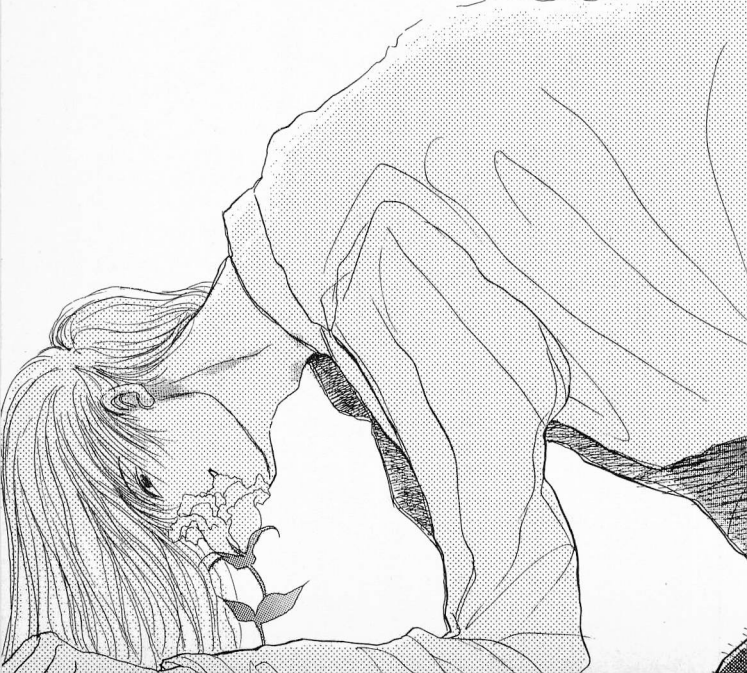
えらくしらじらと坂本が言うから、なんなんだろうと思ったけど……そういえばつまり、ようやく坂本くんにも尚から野音ブッキングの一件が伝わったということで、ええと……。

「けどさあ、高岡さんが、もしかして藤谷さん大切なこと忘れてないかって気にしてたから、訊くけど……」

「え？　何だっけ？」

きょとんとして先生が尋ねかえした。
坂本はすごーく嫌な顔をしつつ、
「高岡さん、明後日から二週間、ニューヨークに飛んじゃうんだけど、それで二十日後のステージなんかリハーサルできると思ってるのかって」
「……俺、そんなの聞いてないよ？」
「一カ月くらい前から何っ回も聞いたんだけど、俺は。藤谷さんもいる所で、高岡さんから、何っ回も」
「……ニューヨークって、何？」
「だから、前から《メデイア》のレコーディングにギターで呼ばれてるんだけど。たしかそれ、藤谷さんがメデイアの大森さんから頼まれて紹介した話だったはずなんだけど」
「……ごめん、忘れてた」
こっちが気抜けするくらいあっさり藤谷先生は敗北を認めて、それからあらためて、おもむろに愕然と呟いた。
「ええっ!?　やばいよ、それ……」
せっ、先生っ、ちょっとそれってひどいんじゃないんですか、あんまりじゃないんですか、どうするんですかっ、先生ーっ!!

グラスハートⅢ
——break the GLASS HEART
(前編)



1

……なんっか……すごおおく不吉な感じってのは、たしかに、その朝からずーっとしていたのだった。

そもそもといえば、そうだ、夢見が凄まじかったんだ……。なんか知らないけど場所がいきなり行ったことも見たこともないレコーディングスタジオで、ぽんと坂本一至くんが派手なギターを（どういうわけか、しかもフライングVだった）あたりまえみたいにあたしによこしてくださって、は？　何それ？　あたしが弾くんですかこれ？　と愕然としてたら、目の前で藤谷ナオキ先生がやっぱりびっくりして、

「ええっ？　そんなの当然だよ。だって朱音ちゃんがギター弾かなかったらうちのバンドの音にならないじゃない？」

などと超絶バカなことを（あああっ、ちがうっ藤谷先生がバカなんじゃなくてっ、だから夢の話だって!!）おっしゃるもんだから、あたしはますますボーゼンとして、なんだそれえっ、ものすごいカンチガイしてるよ、何とち狂ってんのこの人、って（だから夢だって……。でもあたしってば潜在意識で藤谷さんを何だと思ってんだろう……）頭ぐらぐらさせてるうちに、モモコが隣の部屋のステレオでガーンと鳴らしたボン・ジョヴィの声に起こされた。なんつー

か、もお……。

いつもだったらそこで、こらモモコおっ、娘の安眠を何だと思ってんだあっ、くらい怒鳴ってんだけど、今日にかぎっては事情が違って、目覚ましの針を見た瞬間あたしはマジで死んだと思った。

「モモコおおおっ!!　目覚まし鳴ってんじゃんかあっ、なんでそれで起きないのほっとくんだよ、ばかばかあっ!!」

「だってあんた起きないんだもん、つーことは寝てていいのかなと思って……」

「そーゆー問題じゃないっしょお!?　あーもう信じらんないよなあっ、普通ちょっとでも思いやりのココロあったら起こすじゃんよ、絶対っ!!」

「だから今、ちゃんと起こしたのにィ……超大変なしめきり前だってのに、わざわざ起こしてあげたのにィ……」

感謝のココロがあるのはどこ？　なんて、ざーとらしくモモコは泣いている。あたしはもう一回死にかけた。わかりましたよ、あたしが悪いんだよ……。

しかし！　緊急の問題はとにかく、約束の時間に間に合わねば!!　ということだったんで、しめきりがーしめきりがーとガタガタ言ってるモモコはほっといて、あたしはダッシュで待ち合わせの新宿駅までかっとんでいったのだった。ちなみにうちの最寄り駅は新宿御苑だから、新宿なんてめちゃくちゃ近くて、たどりつくまでは全然大変じゃなかったんだけど。

新宿についてからも、特にどうってことはなかったんだけど。

……すーごく不吉な感じがしてきたのは、そのあたりからで。

改札前に時間ギリギリですべりこんで、あわててまわり見回したころになって、しーまーったーっ!!　とあたしはその場に倒れふしたくなったのだった。

（まともに来てるわけないじゃんよ、藤谷センセイがーっ!!）

あああああーっ、そうだよ!!　そうだったんだよ!!　だから藤谷先生が昨日、

「へえ、それだったら朱音ちゃんも一緒においでよ、どうせ俺、ついでがあるから、十一時に新宿駅で会えばいいから」

などとおっしゃったとき、もう絶対にこれは、藤谷さんちに朝八時頃から三十分おきくらいにがんがん電話かけとかないと先生の約束なんかどうしたってあてにならないっ、とあたしはかたく決意していたのに……っ。がーっ。

なんで藤谷さんが一緒においでって言ってくれたかっていうと、つい昨日になって先生は、あたしが前から某ギタリストの熱烈なファンであることを知ったらしくて（とっくの昔に坂本くんが喋ってたと思ったら、全然そんなことはなかったのだった。別に言ったっていいのにさー……変なヒト……）、それでもって今日の朝の便で、その某ギタリスト氏がニューヨークから超特急で帰ってくるからそれを出迎えにいこうよっていうのが、親切心からだか面白がってんだか、とにかく先生の提案で。

そりゃーあたしも、先生にそう言ってもらって素直にラッキーだと思いましたよ……。でもさあっ、藤谷さんのおまけであたしがいるのと、あたしがひとりで待ってんのとは、ちょっと全然ニュアンスが違うんですってば、先生ーっ!!　ここであたしにひとりで一体どーしろとゆーんですかっ!!

……なんかあたし、これってただの追っかけ女の状態なのでは、と改札の前で突っ立ってあたしは少々悲しくなった。そういやZ－アウトの追っかけ友達、みんなして、メンバーの誰がどの時間のどの車両に乗ってる、なんて情報ばりばり流しあって、駅でも空港でも待ち伏せやってたよなー……。さすがにあたしはそこまでついてく気力なかったけど。

でも本当、一瞬でも一目でも会いたいっ、てぞくぞく思っておとなしくしてらんないって気分なら、わかる。

音を聴いたときに、その「音」の先に、なんかすごく凄い人間（変な日本語だけど、そうとしか言えない）の、カタチが見えて。

この音すごいっ、じゃなくて、このヒトすごいっ、と思っちゃったら。

そしたらその人の、顔とか髪の毛とか声とか性格とか血液型とか全部があって、それでその音があるんだっていうふうに……やってる音と本人は別物なんていってらんない感じに、なるから。

だから、わかる……って昔、瑛子ちゃんに言ったら、

「そんな専門的なこと考えるの朱音ちゃんだけよ。要はレージ君の色っぽいマナザシと腰つきだけだもの、みんながシアワセになれるのは♥」

と、あっさり却下されてしまったんだった、そういえば……。腰なのよ、腰っ、なんて強調されちまったよなー、あの時……。別にいいけど、そーゆーのも……。

(あ!?)

目の前がいきなし真っ暗になったのはその時だった。

誰かがなんも言わずにでかいサングラスをあたしの鼻先にぽんとひっかけたんだって、やっとわかったのが五秒くらい後だった。

で、あたしの鼻先から十五センチくらい上から、

「もしかして、俺の顔、まだ憶えてない?」

ちょっとだけ心配そうに、まじまじあたしを眺めながら、あんまし表情のないカオで、茶色い髪のお兄さんが——ギタリスト高岡ショウタさんが、おっしゃっていた。うっ——うにゃあああああんっ。

2

「ああ、俺のこと憶えててよかった……。知らないオトコが女の子にサングラスかぶせたら、

ただのセクハラだからね」

本気なのか冗談なのか、いまいちわからない大真面目な感じで、尚は低い声でそんなこと呟いて、あたしから暗いグラサンをとりもどした。憶えてるかどうかもわからんのだったら最っ初からやらんでくれえっ!!　そういう、ファンの心臓をぶっこわしそうな真似はっ!!

(こ、この人、誰にでもやるんだろうかこれ……)

やっぱし奥底が読めない人だ……。

ニューヨークに一週間いたってのに、信じらんないくらい尚の荷物は少ない。これじゃ荷物持ちに来ましたとも言えなくて、とにかく先生がここに来るはずだってことだけを、あたしはおたおたと伝えた。

「えっ、来るって言ったの、あの人?」

とたんに尚は難しく顔をしかめている。

「だってもうアレンジに入ってるんだろう、あれ?　それで来るか?　いい度胸じゃん、余裕かましてるなあ……」

「……やってるって言ってましたけど」

そうか、藤谷さんを『あれ』呼ばわりするか、高岡尚は……。

「なんか、ついでがあるからって」

「ついで?　ふうーん……じゃあその『ついで』もチャラなんだな、この場合……どんどん困

ったちゃんになっていくなあ……」

尚があんまりしみじみ言うんで、あたしもつい一緒になってため息をついてしまった。なにしろ藤谷先生の大ボケのおかげで、レコーディング二週間の予定を半分に縮めて大忙しで仕事すませたあげくにとんぼ帰りしてきたギタリストさんのおっしゃることだったんで、なおさら。

「え、あれっ!?」

突然、尚が仰天してあたしを見た。は、はいっ!?

「西条がなんでここにいるんだ!? 学校どうしたんだ、おまえ!?」

うきゃああっ、『西条』だって……。『おまえ』だって……。

「き、期末試験終わったんで、休みなんですっ」

嘘じゃないぞ、サボリじゃないぞ、本当だ!! 成績のことは訊かないでほしいが、でもっ!!

「期末試験っ……！」

なんかとてつもないショック受けた感じで、尚がその場でよろめいた。

「すげえ懐かしい、その響き……。ああ、すっごい懐かしい……。いいよなあ、現役の学生やってて……」

……あの、もしもーし?

「あ、行こうか」

我にかえるなり尚はまた例のわけのわからない真顔になって、たいへん紳士的に尋ねてくださったのだった。……どうもこの人、発言のたんびに性格が変化してる気がしてならないんですけど……。

「あっ、あのさあ、あのさあっ、朱音ちゃん、俺のバカ知らない!?　俺のバカどこにやったか見てなかった!?」

神宮前のお宅で、案の定というか家から出てもいなかった藤谷さんは、あたしたちが到着したらいきなりパニックに陥っていた。ばかって何それ？

「解説しよう」

ぼそっと耳元で尚が言った。

「リッケンバッカーの略」

がくっ。楽器の名前なら素直にそう言ってくれれば……。

「ちなみにあのバカは、あんたがPU変えたいっつって自分で楽器屋に預けたまんま取りにいってないんじゃなかったっけ？」

「……ああっ!!　本当だ!!」

「もしかして今日の『ついで』って、その楽器屋だった？」

「……うわあっ!!　そうか、それだったんだ、それ!!」

「海外で働いてきた俺におかえりなさいは？」
「あああ、そうかあーっ、バカもプレベも預けたまんまなんだ、だから今バニーちゃんしかないんだ、変だと思った……しまったあ……」
「おかえりなさいは？」
「やっぱり取りに行ってこようっ」
もう何っも眼中にありませんって状態の藤谷さんはとっととコートとりあげて、そのへんにばらまいたまんまの楽譜を蹴りとばして出ていこうとした……ら、なんと尚が襟首ひっつかんで引き戻すという暴挙に出た。
「あのねえセンセイ、挨拶は人生の基本、正しい心は礼儀の実践からっつーありがたい言葉、知ってる？」
「ええっ？　俺が心の中で今、何度もおかえりって言ったの聞こえてなかったんだ？」
「……アレンジ終わったんだっけ？」
「……ギターのリフ全部できてるんだっけ？」
「あっこれ土産。免税の酒」
「ええとね、一曲分はあがってるから、そこの楽譜拾って見てていいから」
……この人たちのセリフって、なんかまともな順番たどってないように思えるのは気のせいだろうか。そ……それともしかしてこの状態を称して、絶妙にかみあったお話し合いだと思


Love love &
love & Peace.

っちゃっていいんだろうか？

「何さわいでんの？」

二階の間借りしてる部屋から、徹夜明けでぬぼーっとしまくった坂本くんがおりてきたのはその時だった。やはり尚に挨拶の一言もなく。

「えっ、藤谷さん、まさか出掛けたりするつもりなんだ？　この期に及んで？」

「あ、あのね、だから、楽器屋に……。つまり、なんかどうも今のベースライン気に入らないからバッカーちゃんで弾いてみたら違うイメージ出るかと思って、それで」

「おとという俺がスティックと一緒にとりにいこうかって言ったら、藤谷さん、どうせアレンジは鍵盤だけでやってるから家に置いとくのはアイバニーズで充分だって言わなかったっけ、きっぱりと？」

「ご、ごめんなさい、忘れてました」

「まさかその気に入らないベースラインって、俺がゆうべ一晩かかってシンセの音源、打ち込んだ曲のほうじゃないよね!?」

「……あ……怒る？」

「……」

「……」

がきっと凍りついてしまった坂本と先生の間に、

「ねえ……キミたち、せっかく待望のギターマンが帰ってきたんだから、肝心のミーティングくらいしたら？」

白けたマナザシで、後ろから尚が問いかけた。……寒い。

だからつまり。

全部の元凶っていったら、今から十日前に、藤谷さんがまわりに一言の相談もしないでもぎとってきたZ－アウトの『前座』ってやつで。

それが決まってからというもの、尚はとにかくろくな話し合いもできないうちにニューヨークとんじゃうし、西条はまず寝る間も惜しんでドラム叩くのが先決だろって坂本くんがおっしゃってあたしもそのとおりだと思ったんで本腰いれてドラムの練習やってて、藤谷さんはもう頭の中とっちらかってる感じで連日シンセサイザーの前に座ったっきり楽譜にらんで唸ってるし、その藤谷さんの作業を手伝わされてる坂本はもう三日もたたないうちからギリギリ殺気立ってきてて、はっきしいって……どうするんだ、こんなんで？　と先生以外の三人は考えてるはずだった。

それでもやるしかないってのは、そうなんだけどさ……。

（ケンカ売っちゃったし……）

オーヴァークロームの真崎桐哉くんに今のとこ見せたら、絶対、ほーら言わんこっちゃねえ

だろとか鼻で笑われそうだ。ちくしょー、だから笑われてる場合じゃないんだってば……。

「おおい、誰だ、燃えるゴミと燃えないゴミをいっしょくたにしてんのは!?」

台所に踏みこむなり尚はごみ箱にぐしゃっと積まれた一週間ぶんの山に目をつけて怒鳴っている。

「あっ畜生、賞味期限きれた弁当をレンジにしまっとくなよなあ……。生ゴミは三角コーナーに入れろって言ってんだろうが、いつも……。それで最後に誰が迷惑するかわかってないんだよな、全然……」

思いのほか、というか、この家で唯一というか、高岡尚という人はその手のことにうるさいヒトだったらしい。そうか……そうだったのか……。

あたしがいちいちそんなとこまで目をまんまるくして見てたら、ばさりと横から坂本くんに楽譜の束で殴られた。なにすんだばかっ。

「欲しくないんだ、西条の譜面？」

「……いただきます」

不純な動機もいいけどさあ、なんて坂本はすっかりトゲトゲ野郎と化している。

（悪かったなああっ、ただのファンでっ）

しかし反論の余地がなかったんで、あたしはぶーたれつつもおとなしく、問題の、完成したばっかりの楽譜を眺めることにした。

藤谷さんという人は、実は信じらんないくらいきっちりと本格的にスコアを書きおろす人で、それがなんか意外だった。

だいたい、今まであたしが手伝ってきたアマチュアバンドだと、曲のアレンジってのはバンド全員でいっせいに音を出してみて少しずつ作っていくとか、決まったアレンジャーがいるときはその人が大まかなデモテープ録ってくるとかだったし。耳だけで全部コピーできるから楽譜なんか読めないって奴もたくさんいたし。

それはプロの世界でも、あんまし変わらないって聞いたことがあったから……やっぱり今回の藤谷さんのやりかたのほうが特殊なんだと思う。

台所からようやく、洗い物の山にうまってた灰皿を発見して、尚があたしたちのいるリビングまで戻ってくる。少し藤谷さんから離れたところの床に座って、煙草の箱とりだしながら、広げた楽譜にかがみこんで、黙々と……見てる。

結局、楽器屋にもどこにも行けなかった藤谷先生は、リビングの真ん中に据えた電子ピアノの前で、なんか居心地が悪そうに、椅子の上であぐらをかいていた。

坂本は坂本で、一回ぜんぶ読みおわったスコアを、だけどなぜかすさまじくイヤそうな顔しながら、もう一度最初に戻って読み直している。

で、あたしは。

最後まで見終わったのが、坂本とほとんど同じころだったんだけど、とてももう一回

見直すなんて気になれなかった。
誰かなにか言わないのかよと思ってまわり見回したけど、他の人たちはそんな感じで。
こんなもの読まされて何も言わなくていいんだ？　ほんとに？　じゃああたしが言っちゃっていいのか、ここで？
……なんて、心臓びくびくさせてたら、どさっと尚が横倒しに床にぶったおれたのがその時だった。ええええっ!?
「やられた……」
火のついてない煙草もそのまんまで。
床にはりついたっきり、大真面目に尚が言った。
「これはセンセイの勝ち」
「……よくできましたの二重丸？」
「どっちかっつーと、たいへんよくがんばりましたの花丸」
「……まあいっか、そのくらいだったら……」
特に嬉しそうに笑ったりするわけでもなくて、藤谷先生は真顔でそんなことを呟いている。
尚に先をこされちゃったなあ……。
あたしだったら『たいへんよくできました』の花丸三つくらいつけちゃうよ、これ……。
でも藤谷さんは別にそれ以上の意見は欲しがってないみたいで、

「じゃあ打ち合わせ始めていい？」

なんて、さっさと話題を変えてしまったのだった。

坂本は何か言いたいことがあるんじゃないかと思ったけど、いいのかよってあたしが見たら、すっげえ余計なお世話ってカオされちゃったんで、もう二度と気にしてやらないことにした!!　こいつはもおおおっ。

「ええと、当日の野音なんだけど、やっぱり三曲が限度ってのはこないだ話したとこから変わってないんだよね。それで今、これで、一曲目のやつは完成してるだろ？　もう一曲のは、あとショウタくんがギターのリフ乗せてくれればいいってとこまで進めてるから……」

「じゃあベースライン変更しないんだ？」

「うん、それはあきらめた。当日、変えたくなったら勝手にそう弾くから、俺が」

変更なしってので一瞬ほっとした坂本と尚が、先生の最後の一言で、あああ、と同時に唸った。

「あのね、センセイ、それって当日まで結論がわからないってことになるんじゃ……」

「ライブってそういうものだろ？」

先生がきょとんとして聞き返す。いいからハナシ進めよう先に、と尚が諦めきって手を振った。

「それで……あともう一曲、何やろうかって、相談なんだけど……」

椅子のうえで、左膝に頬杖つきながら、藤谷さんがそう言った。

あたしたちはそれぞれに、なんともいえない感じで、頭かかえて考えこみまくってしまった……。

尚がニューヨークにとんじゃう前に、ばたばたっと、じゃあ演奏する三曲のうち一曲はこれでいいよねって四人で納得して決めたのが、例の、藤谷先生があたしとの顔合わせすっぽかして作ってて、それでなしくずしにみんなしてずるずる参加して作りかけになってた『大傑作』ってやつだった。

それからもう一曲のは、藤谷さんが作りためたストックのなかから出してきたやつで、今アレンジができあがってるのはこっちの曲だった。これってば一週間前、はじめてメロディーだけ聴かされたときに、すごい視聴率高いニュース番組のオープニングテーマとそっくりだったんで、いいんですかって先生に言ったら、

「ええと、そっくりなんじゃなくて同じ曲なんだけど……。あのオープニングって俺の曲だから」

などとあっさり答えられてしまったんだった……。もーやだ、こういう知らん顔でおいしい仕事やってる人って……。

「やっぱり観客って自分が知ってる曲だと安心してもりあがるものだから、一曲目にはそうい

うツカミがないと駄目だよ、じゃないとなんか知らない奴らが出てきておしまいって感じになっちゃうじゃない？　それでこの前半分くらいできあがってたあの曲、一応シングル候補にしてるから、二曲目にもってくればこれが名刺がわりってことになるから」

それで、ほんとは四人全員でアレンジしたいところだけどギターが留守してるし、じゃあこの二曲は俺が責任もってアレンジするってことでいい？　と先生がおっしゃって、現在、あたしたちはこういうことになってるんだった。

「別に、どうしても無理に三曲やる必要はないと俺は思うんだけど」

——真っ先に、坂本がそう言った。

「絶対三曲やってくれってZ－アウトに頼まれてるわけじゃないんだし……クォリティの高い演奏を聴かせようと思ってるんだったら、できあがってる二曲のリハーサルに時間とったほうがいいんじゃないの、今は？」

「ありがちな洋楽のコピーとかやるんだったら、俺も、今の二曲でやったほうが潔いって気がするけど……」

ずっと火がついてなかった煙草に、ようやくライター近づけて、尚もそんな風に言う。

「コピーなんかしないし二曲だけってのもやだな。つまんなくない？　客のアタマに残らないよ、それっぽっちじゃ」

こっちがびっくりするくらい頑として、藤谷先生はそう言い張った。

「だってさ、Z－アウトのステージに、せっかく高岡尚が出ていくのに、ほんの二曲で帰っちゃうんだ？　何だそれってファンは思わない？」

「あっ本当だっ……！」

思わずあたしは先生のお言葉に力いっぱい同意してしまった。やっぱりそれは、あたしがステージ見てたらとか思って。

ウラギリモノって六文字、顔に書いて、坂本くんがこっちを睨んだ。ううう、だってさ……。

「Z－アウトねえ……」

なんか疲れた感じで尚はそれだけ呟いて、セーラムライトの煙を吐き出している。

……結構、気になった。

けど、どうしたんですかってあたしが言う場面じゃないし。

「あ、あの……藤谷さん、この前、アレンジまで完璧にしあげたって言ってた曲は？」

「うん、あれはねえ、まだここでは使いたくないから駄目」

せっかく解決策がみつかるかと期待して訊いてみたのに、先生はすっぱりと使いたくないの一言で終わらせる。だーっ。

「つまり何？　もう一曲、藤谷さんのストックから出してきて、それを三日くらいでアレンジ終わらせてくれるってこと？　それやったってリハがギリギリ一週間しかとれないんだけど、でも本当、これ以上時間ゆずれないから訊くけど」

坂本が見かねて、実際的なことに話題きりかえてくる。
「うん、っていうか……坂本くんはもうライブの準備のほうに入っちゃっていいよ、それで俺が三日でアレンジやって、大急ぎでリハに合流するから」
「……その言葉が信用できないんだけど、藤谷さんの場合……」
いいよって言われて素直によろこべない坂本くんの気持ちは、あたしにもよくわかる……さすがに。
「ああ、そうだ、センセイ……今までのストック、どの曲でもいいんだったら、あれやらない？　例の……」
ゆっくり、尚がそうやって提案したときには、あたしも坂本も、まさか尚の口からその曲名が出てくるなんてひとっかけらも思っていなかった。
……グラスハート、って。

3

「西条、もしかして高岡さんに何か言ったりしたんだ？」
あたしが叩いてたドラムセットの、シンバルの位置を神経質に直しながら、坂本くんがそんなことを言った。

「してないよ、別に」
「……ほんとにそうなんだ？」
「あーのーねーえ……じゃあ訊くけど、あたしがここで嘘ついてどんな得があるんでしょーか、先輩っ!?」
「いや、ファン心理ってそんなもんかと思って……」
「……坂本くんなんか大誤解してるんですけど……」
はやく悔いあらためていただきたいっ。そういう奇妙キテレツな偏見はっ。
「だったら本当に、何考えてあんな曲やるんだか、あの人たち……」
バスドラムの前にしゃがみこんで、坂本がひとりごとみたいに呟いた。
尚がグラスハートって曲名を出してきて、坂本もあたしもそこで反対する理由ってのは全然なくて、というか、ほんとのところあんまり意表つかれてて何も言えなかったんだけど、それで藤谷先生がちょっと複雑なカオしながら、うんわかったって言って、問題のミーティングはおしまいになった。
で、そのあとで、徹夜明けのくせに、これでやっと演奏のこと考えられるって言って、坂本はあたしと一緒に、先生が借りておいてくれたリハーサル用のちっちゃいスタジオに移動してきたんだけど。
「グラスハートやるのって、なんか坂本には困ることあるんだ？」

どっちかっていうと、坂本くんがなんで今にも唸りだしそうにしてんのか、あたしにはわからない。

尚がやっぱりあの曲のこと好きなんだったら、それってすごい偶然だっていう風に、驚くならよくわかるんだよ……。

「別に困らないけど！」

頭ごなしに怒鳴られてしまった。……困ってるんじゃんかあっ、しっかり!!

「そしたら坂本先輩、あたしのドラミングが気に入らないんだ」

両手のスティックがつがつ鳴らしながら、あたしはそっぽ向いて拗ねてみた。

「こんな奴に叩かせるんじゃなかったとか思ってんだよ、きっと……。だから遠回しにいじめられてるんだ、あたし……。言いたいことあったら素直に言ってもらったほうが、西条、ありがたいんですけど……」

「……何言ってんの？」

坂本は、おそろしく不可解って感じで顔しかめて、

「それはもちろん、西条と俺とでどっちが正確に叩くかっていったら俺のほうだけど……」

あのなあー……っ！

身も蓋もないセリフにかけては坂本くんの右に出るものなしと見た。いいよ、知ってますよ、坂本くんがメトロノームのよーに正しく叩けるってのは……。ああ……。

「でも西条、俺が、いまだかつて、ステージで演奏したことなんか一回もないってわかって言ってる？　それ……」

「……」

は。

あたしは口をあけて一瞬沈黙してしまった。そうだっけ？　坂本ってライブ経験ないんだっけ？

「あっでもっ……坂本くん、他人の目には頓着しないし……」

「たしかに俺、他人の目は気にならないけど、楽器のコンディションはすごく気になるんだけど」

そ、そうか、『生』だもんな……。どんなトラブルあるかわかんないもんな……。

「その上で他人の音に合わせるなんて、俺の場合、ほとんど信頼がおけないし」

自分の性格のことはよく知ってるんだよね、坂本くんって……。

「おまけにステージが野外で。あのさあ、今って何月か知ってる？　真冬の二月なんだけど……冷たい空気とか寒いところって、俺、いちばん発作が出やすいんだけど……」

ああっ、そうだ、この人って病人だったんだ!!　すっかり記憶から消えてたけど!!

「正気の沙汰じゃないんだよ」

ほんとに冗談じゃすまないっていう悲愴な雰囲気で、坂本は黙りこんでしまう。

そうか、だからずっと普通以上にピリピリ神経とがらせてたんだ、この人！　坂本くらいテクがあったら絶対なんの問題もないって、あたしぜんぜん心配してなかったのに。

（不覚……）

一方的に悪者扱いしちゃってたんで、なんか責任を感じる……。ああ、そうかー……。

「ええと、あの……ごめんなさいでした」

「なんで西条があやまってんの？　はっきりいって俺が恨んでんのって藤谷さんひとりだから、西条にあやまられてもなんにも嬉しくないんだけど」

「だ、だって、それはその、原因をただしてみたら、やっぱりあたしが……」

「原因の原因をただしたら藤谷さんじゃないの？　他になにがあんの？」

すさまじく簡潔に言い切られてしまって、そういやそうかもなんて思ってるあたり、あたしも反省が足りないよーな気が……。

「ドラムは今回、とにかく西条に三曲叩いてもらうしかないよ、鍵盤のほうは全部こっちでやるから」

「……いいのかなあ、それでほんとに」

とりあえず今は、無我夢中で叩いてはいるけど。

自分のドラムのどこがいいのか、いまだにあたしにはまるっきりわからない。

なまじ坂本くんのドラミングってのが、そりゃあ上手いだろうなって初めから想像はしてた

けど、それがマジで目の前真っ暗になるくらいの上手さだったから、もお……。
あたしじゃなくたってグレると思う。ドラム叩く奴だったら、ほとんど。
「俺の叩き方、高岡さんになんて呼ばれたか教えようか？」
なぜかすごくむくれた表情で、坂本はそう言いかけて、やっぱやめた、とかいって口をつぐんでしまった。なんだよーっ、教えればいいじゃんよおおっ。
「高岡さんに訊けば？　仮にもファンなんだし」
……そういう言い方って、なんか腹立つなあっ。よくわかんないけど。
なんでもっと和やかにいかないんだろ、みんなして。
（無理か、この状況で……）
あたしが溜息ついてたら、坂本がぽつんと言った。
「グラスハートって、藤谷さんが十七歳のときに作った歌なんだ、たしか……」
十七歳って。
今のあたしと同じじゃん。
「ちょっと待って、藤谷さんって今いくつだっけ？」
「高岡さんのひとつ下」
「……ってら、二十三くらい……」
業界の天才児とかいわれてるくせに若いじゃんとか思ったけど、そういやあの人、十四のこ

ろから音楽活動してたんだ。
それで十七歳で、もう、あんな曲書いちゃうんだ。
坂本くんが、この前、異様にぴったりの二文字で表現したけど。
――あんな『純粋』な曲、って。
「なにもわざわざ、そんなんで俺の背中に重たいもの載せてこなくていいと思うんだ。そんな、いちいち、あんな曲、俺と同じ歳のころに作らなくていいと思うんだ……」
「え？」
床にしゃがみこんでる坂本が、言ってることの中身ってのが、最初、よくわかんなかった。
最初はわかんなくて。
「なんであの人、あんないいかげんで、それであんな、誰もが頷くしかないって音、仕上げてくるんだかって、本当に……」
力ぬけたみたいに前のめりになって、坂本が言う。
「本当……たたきのめしてやりたいって、何度も思うんだけど」
「……」
それで、その一念だけで藤谷先生の家に怒鳴りこんだ前科があるんだった、この人は。
（全然、そんなこと考えなかったな、あたし……そういえば）
それこそ坂本くんの才能にだったら、まさに今だって、がんがん嫉妬してるけど。

もう、藤谷さんって、一種の宇宙人みたいなとこがあるから。
同じ人間だと思うから腹が立つんじゃないかなあって気がした。……あたしには、少なくとも、そのときは。

その晩、あたしが持って帰った藤谷ナオキ作のバンドスコアをひとしきり睨んで、音楽ライターであるうちのモモコさんもやっぱり、かなり愕然としていた。
ちょっと本格的に音楽やった人なら、誰にでもわかるんだと思う。
技巧がどうこうっていうより先に。
譜面からにじみでてくる凄まじい気合い、みたいなやつが。
「そうかあ、あたしも尚ちゃんに賛成だなー、これって『よくできました』よりは『よくがんばりました』のほうがハマってるよ」
あたしの部屋のこたつにひじついて、プロの評論家の西条モモコさんが大まじめに言うから、あたしもなんか正座しなきゃいけない気分でそれを聞いていた。
「ほんっとに藤谷直季、このバンドに賭けてるんだねえ……」
そ……そうだったのか。
あの人がすごい真剣だってのは、それは知ってたけど。
(このバンドに賭けてる)

なにしろ現場があんなごちゃごちゃしてっから、そんな表現まで頭に浮かばなかった。
「若くして天才って呼ばれちゃうと、たいてい藤谷くんくらいの歳でもう潰れちゃうからねえ。本人、ここが勝負どころだってのは意識してるんじゃないかな、なんとなく」
「別に……あの人、とにかく今の音楽やることでアタマ一杯で、そんなめんどくさいこと考えてないと思うけどな……」
「ずっと音楽のことばっかし考えてたらなおさらじゃないの？　才能って一度涸れたら、そのまんま『音』に出るんだよ。ごまかしきかないんだよ、そこだけは」
モモコの言い方ってのは、実際に音楽やってる人間にとっては、あんまし嬉しくない。めちゃくちゃシビアなこと平気で言うから。
「だから藤谷直季が、ひらきなおって自分のスタイル固めて、計算だけで商売できる職人になってるんだったらまだ楽かなって思うけど、このスコア見るかぎり、どう考えてもこの人、生粋の芸術家だから……絶対、これからも苦労するよ、こういう繊細な魂もってるクリエイターで、そのうえでボーカルとって、フロントマンやって、リーダーとしてバンドのこと考えなきゃなんないんだから……」
「……他人事だと思ってさ……」
「だぁって他人だもーん」
モモコはあっさり言っておせんべなんか食べてる。ちょっと待てよおっ!!　あたしには他人

じゃないんだよ、ばかばかーっ!!

「だって、こと音楽に関するかぎり、本人以外にはどうしようもないんじゃないの？」

「そりゃそうだけどっ！　言い方が優しくないっ！」

「あたしは厳正中立だもん、あんたたちのバンドについては。こっちはプロだし、あんたもプロになるんだし」

ううう……。

反論できないのがくやしい。こ、こんなスーダラした評論家に……。

「でもまあ、あんたと、それから坂本くんだっけ？　若い連中はこの際、藤谷ナオキから吸収できるものはがんがんもらえばいいし、藤谷くんのほうでも、あんたたちってちょうど購買客としてターゲットにしてる年齢層なんだろうからフィードバックされてくものはあるよね。うんうん、遺伝子からして、あんたってプロになれる人間だし」

「自分の遺伝子でいばるなよなー……」

「藤谷ナオキだって、実はサラブレッドじゃなかったっけ？　違ったっけ？」

知らないけど。あの人のお家の事情とかは、まったく。

「だけど謎なのは尚ちゃんなのよねえ。なんであんな面倒な相手と組む気になったんだろうね。どう見たって、尚ちゃんがいちばんの貧乏くじひいてるもん」

モモコがいきなりそんなことを言い出したんで、あたしはびっくりした。

貧乏くじって。

何それ？　そ……そりゃあ、藤谷さんのせいで尚がたいへんな迷惑こうむってんのは確かだけど。

でもモモコが言ってんのはあくまで音楽的なことだから。

「だからさ、Z－アウトの中じゃ尚ちゃんが自由に演奏できないってのは、あたしら、さんざん言ってたじゃない？　でも藤谷くんとやるってことは、尚ちゃん、Z－アウト以上に不自由になるんだよ。尚ちゃんのギターって、前に出て目立って、がんがんがーんって一直線に攻めてく感じなのに、藤谷くんの曲ってメロディアスで鍵盤メインで、うるさいギターなんか必要じゃないんだもん。あのふたりの音楽性ってまるっきり合ってないんじゃないの？」

……ええええっ!?

そんなことないよ、なんて、こたつの板ばしばし叩きながら言いたかったけど、あたしはなんにも言い返せなかった。

だって、本当にそうなんだ。

あらためて藤谷さんのスコア見直したら、ギターって、イントロとラスト間近でちょっと派手に鳴るだけで、あとはずっと裏にまわってるんだ。

なんでこれが、わざわざ尚のギターじゃなくちゃいけないんだろう？　って感じだった。

（なんでこれが）

藤谷さんがこんな基本的なこと置き忘れてるのも、尚がこのスコア読まされて平気で褒めてるのもわかんなかった。

何考えてるんだろう……。

4

……それは、次の夜、楽譜に書いてあるフィルの入りかたがよくわかんなくて、坂本に見てもらってもやっぱり解釈できなくて、アレンジャー本人に訊くしかないやって言いあって、スタジオからの帰りに藤谷さんちに寄ったときのことだった。

リビングの隅に置いたオールインワン・シンセ一台にヘッドホンつないで、藤谷さんが黙々と鍵盤いじってるのは、このところずっと同じ、いつもの光景で。

そのわきでギターの調整してた尚のほうが坂本とあたしの姿に気がついて、藤谷さんの背中をとんとんと叩いてくれた。……一切、反応なし。

「……だめだこれは……」

いくら待っても藤谷さんからの返事がないんで、降参ってノリで両手あげながら尚が呟いた。

「西条、まだ時間ある？　このヒト待ってられる？」

「あ、はい、大丈夫です!!」
何度いわれても尚の『西条』って呼び方が心臓に悪いのは変わらない……。
「仕方ないから茶でもいれたろーか、キミたちのために……」
そんなこと言って尚は立ちあがる。
「……どうなの？　アレンジ進んでるんだ、一応？」
難しい顔したまんま坂本が訊いてる。ひらりと尚は片手振っただけだった。
……全然、ってことで。
「そうなの？」
坂本の深刻度が五割くらい、それで増してしまう。
「だって昔からある曲なんだから、バンド用にアレンジ直すくらい簡単じゃないの？」
「それはそれ、これはこれだろ？」
イライラのあまり歯軋りしそうな坂本に、尚はあくまでも悠然と答えている。
だけど確かに前の二曲は、インストを歌ものに作りかえたのが一曲で、メロディーも何も全部まるっきりゼロから作ったのが一曲で……それにくらべたらグラスハートを少し作り直すくらいずっと楽だろうって、あたしもあたりまえみたいに思っていたんだった。
よく見たら本当に、藤谷さんのまわりに、前回みたいに楽譜がちらばってない。
冗談じゃなくて、完璧に全然。

仕事に入ってから二十四時間以上たってるのに。

（……真剣、やばいかもしれない）

こんなところにドラムのことで相談もちかけるなんてちょっと嫌だって、気がしてきた。別に今夜中じゃなきゃ絶対駄目って相談でもないんだし。

急いでる作業の邪魔になるよりはって。

「あのさ、やっぱり……」

坂本にむかってこっそり、質問のことは先送りにしようかって言いかけたら、その時だった。

ぎしっ、と何か不吉な音がした。

ふりむいてる間もないうちにもう一回鳴って、それで決定的に、がしゃんがたん、って凄く重い、硬い、精密機械が落ちた。——すぐそこで。

何やったのか音だけでわかった。

精神衛生上、壮絶によくない——あたしが死んでも聞きたくない音。

（藤谷さんが）

——シンセサイザー一台、床に叩き落としたんだ。

間違いなんかで下に落ちるはずない。簡単に落とせたりするものじゃない。あんな重い楽器。

あんな大事な。
何十万円もするエンソニック。
わざとじゃなかったら。
「ちょっと、何……！」
坂本が目を向けて、声荒げる感じで、なんか言いかけた。
なのに、もうそれ以上が出てこない。
あたしも何も言えなくなっていた。
どういうつもりなのか、どうなってるのかって、自分の目で見た瞬間に全身がすくんでいた。
足元に叩きつけたシンセの白い鍵盤、それでも未だに藤谷さんが弾きつづけていたから。
両膝、床について、キーボードに身体、のめりこます感じで。
ヘッドホンも外さないまんまで。
あんな酷い落とし方して、それでまともな音が聴こえてるはずないのに。
なのに右手の指の骨、わざと壊そうとしてるくらい、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も鍵盤にぶつけたきり止まらない。
（背中しか）
こっちから背中しか見えないから、どんなつもりかなんて全然わかんない。わかんないけ

ど。

誰か止めさせなきゃだめだ、なんて考えてる余裕もなかった。

鬼気、迫りすぎてて。

途中で手を出したりしたらそのまま藤谷さん本人が壊れて死んじゃうんじゃないかってくらい、ものすごくギリギリのところにいってるから。

——まるで、別の世界とのギリギリのところ。

「……！」

唯一、その場で、大股で藤谷さんまで近づいていってその頭からヘッドホンかなぐり取ったのが、尚だった。ものすごい勢いで、片腕一本で藤谷さんの襟元つかんで鍵盤からひきはがすみたいに、床に放りだして。がつん、なんて本気で痛そうな強さで。

「坂本、バケツに水」

そのまんま、尚があっさり言う。

（ばけつっ……）

あたしは自分がそれまで、坂本の腕、思わず、力一杯つかまえてたのに、そこで気がついた。

水、って言われた坂本のほうも、尚がやりたいことの中身はわかってるけどそれでもっていうみたいな、動くに動けない感じでいた。

「ああ、いいや、それじゃ……」
それ見て尚はすぐに考えを変えて、台所からミネラルウォーターのボトルとりだしてきて——本当に、ひとっかけらも躊躇しないで一・五リットル分全部、藤谷さんの頭にぶちまけてしまった。
「……あ、あれ……？」
すっかりずぶ濡れになって、そこまでされてやっと、藤谷さんがまともな調子に戻って呟いた。
雫払いながら、仰向けに尚のこと見上げてる。
「……またどっか行っちゃってたんだ？　俺……」
「まあ、火星よりは手前あたりでとどめたんじゃない？」
にこりともしないで尚は、そんな答え方をしてみせていた……。

「だからやっぱり、もうやめたほうがいいんだよ、よくないよ、こういうの……!!」
自分のこと以上に血の気がひいた顔色で、坂本がそう言った。
もしも坂本も誰もそれ言わなかったら、あたしが同じように言ってたんじゃないかって思う。
今の藤谷さんの惨状、目の前で見せつけられて、思い知ったら。

たった、曲ひとつのために、あそこまで精神ギリギリにすりへらしてのめりこむ人だなんて、知らなかった。……っていうか、知ってたけど、そりゃあギリギリ本気でやってんのは知ってたけど、それがいい方向に行けば大傑作ができあがるのも知ってたけど、少し調子狂わせただけであんなになることもある、なんてことまで、考えらんなかった。

ずっとそんなことやってたら、アレンジなんかできあがる前に本人の中身が壊れちゃうよ……。

「どうしても三曲やりたいんだったら別の、もっと楽な曲やればいいんだし、どうしてもグラスハートやりたいんだったら、あの昔のバージョンでそのまま歌ったって、このメンバーで演奏すれば自然に違った音になるんじゃないの!?　それ以上直しようのないものをムリに直そうとしてるから感覚おかしくなるんだよ、なんでそんな簡単なことわかってないの!?」

「……嫌だ」

バスタオル一枚、濡れた頭にかぶせたままで、藤谷先生はぽつんと言い返す。

「それのどっちも嫌だ」

「――何、今更、駄々こねてんの!?　そりゃあ藤谷さんのコンディションがベストなんだったら俺も黙って待てるけど！　でも今になってまでそんな無茶やってたら、ボーカルや演奏の調子まで崩れて全部だめになりかねないんじゃないの!?」

「だってあれじゃ歌いたくないんだ、俺は!!」



……藤谷さんの、本気で怒鳴るとこなんて初めて見た。

「あんなんじゃ、今の俺が歌ったって、全然意味がないっ……!!」

切れそうに唇を噛んで、それきり藤谷さんは背中まるくしてうつむいてしまった。

「じゃあそれで実際、何ができるのかって話……！」

ムキになった感じで坂本も声はりあげかけて、そこでふと肺のあたり片手でおさえて、何も言い終わらずに黙りこんだ。

ひとつだけ、小さい咳をして。

「つまり、センセイは、そしたら……」

煙草一本、箱からとりだしかけてた尚が、隣にいる先生と坂本とを見くらべて、結局元の箱に戻しながら口をひらく。

「再編曲が思いどおりきちんと完成したら、そしたら絶対、何があっても歌うって、我々に約束できる？　それがまず第一条件なんじゃないの、この場合？」

「……」

「だいたいが、あんたが自分の判断でとってきた仕事の話なんだよ？　で、この若い連中ふたりして、大舞台の経験なんかないのに文句ひとつ言わないで頑張ってるじゃない？　それ全部ほうりだしといても、今のアレンジの作業ひきのばして完成させる価値があるって、センセイが本気で思うんだったら、それはプライドにかけてやりとげればいいし、じゃあここでグラス

ハートは諦めるってあんたが言っても誰も責めはしないんだよ、確実に……。それで自分の良心がどっちをとるかってのは、あんた以外の人間には決められないんじゃない？」

「……」

思いきり追いつめてる風にしかとれない台詞。

だけど尚はただ、ずっと、きまじめな低い声で言ってるだけで。

押し黙って先生はしばらく、身動きもしなかった。

坂本も胸に片手あてたまんまで、怒ってるのか何だかわかんない黙り方をしていた。

……すごく、苦しかった。

その、同じ場所にいるだけで、凄く。

「……い、から……」

喉かすれさせた、聞こえにくい声で、やっと藤谷さんが口をひらいたのは、耳鳴りがしそうに長い時間、たってからのことだった。

「俺、ちゃんと歌いたいから……絶対、歌える曲にするから……時間ください……ごめんなさい」

「……」

そこで尚の目がこっちと坂本を見たから、それってあたしたちに言われてるんだってわかって、あたしはうまく動かない首を無理やり動かして頷いた。

おろおろしてるとか、うろたえてるって、きっと今のあたしみたいなのをいうんだと思った。

こんな、泣くに泣けないような藤谷さん目の前にしているのは嫌だと思った。

――こんな風なのは嫌だ。

「あの、あたしは、坂本とかにいろいろ教えてもらえてるから……それで、大丈夫だから」

「俺はひとつもそれで大丈夫なものなんかないと思うけど、藤谷さんが責任もって自分の仕事やってくれさえすればいいよ、別に」

ものすごくひどいことを坂本が平気で言って――そうじゃないんだ、全然平気じゃないからひどいこと言うんだ――もう藤谷さんの返事も聞かないで、ひとりで立ちあがってリビングの外に出ていく。

尚がそこで、あらためてセーラムライトに火を点けながら、やっぱり椅子から立ってふらっと台所のほうに消えた。

「……ごめんね」

そのときあたしにむかって、わざわざ顔上げて、少しだけ視線合わせて、もう一度藤谷さんが短く謝ってくれた。

あたしのほうが、あんまり申し訳ないって、すごく、背中とか胸とか、痛くなるくらいに。

仕方なくて、立場代わるわけにもいかなくて、あたしももう一回頷くしかなかった。

こういう場面で、こんな人、どうやったらなぐさめられるのかなんて知らない。
何言ったって、問題は藤谷さんの中にある音楽だけだから。
「ああ、西条、遅くなりすぎたみたいだから……家まで車で送ってやるから少し待っててくれる？」
台所から尚がそんなこと言ってくれるの聞こえてるのに、ラッキーって喜ぶ気分にもなれないくらいだった。
濡れた服が冷えるのも気がつかないで、頭にかけたタオル、目の高さまで引きおろして、そのまま造り物の彫刻みたいに藤谷さんは座りつづけていた。
何か、今、その頭の中がどんなことになってんのか、外からまるっきりわからない感じがした。
「西条、もう出られる？」
いきなり尚の声がして、あたしは慌てて立ちあがった。
そのあたしの鼻先かすめる距離で、尚が片腕のばして、先生のすぐ前のリフティングテーブルの上にことんって音たてて置いた物があった。
——熱い湯気あげてるマグカップひとつ。
いつの間にそんなもの用意してって、思う、タイミングだった。芯からあったためた、本物のホットミルクだった。

それからバスタオルかぶったままの先生の頭、子供相手にするみたいに、掌で軽く叩いてから、

「お待たせ」

何もなかった顔して尚はあたしより先に玄関に向かっていた。あたしはなんだか、今の瞬間だけで、一本どころか二本も三本もとられた気分で、とにかく大急ぎでその背中を追いかけていた。

5

タウンエースのエンジンかけると同時に、尚はFMラジオのスイッチをいれている。今夜は最新ジャパニーズポップスの特集を、なんてDJの声が、抑えめのボリュームで聞こえてくる。

「女の子が助手席に乗ってるのに、ワゴン車ってところがバンドっぽいよね」

冗談みたいに尚が呟く。そりゃ、フェラーリとかじゃ楽器は運べないけどね……。

しかし高岡尚がわざわざ自らクルマで楽器運びしなくたって、なんてすぐにあたしは考えてしまうのだった。あんま派手なやつじゃなくても、例えば白いシルビアなんかだったらかなり似合いそうなんだけどな……。あああ、ファンの邪念がいろいろと……。

「バンドがあるからってタウンエース乗ってるんですか？」
「っていうか、ひとりだと単車のほう使っちゃうからなあ、俺……どうも四輪には執着がもてないのよ。だからまあ、どうせ乗るなら便利なやつがいいやって」
夜の大通りに、ごとごと揺れながらタウンエースはゆっくり出ていく。普通より車高があるから、街灯の光とか建物のライトアップとかが、なんだかすぐそこに迫ってくるみたいに見える。
実は尚がバイク野郎だってことは、追っかけ女であるあたしは前から知っているのだった。Z－アウトがツアーやってるときに、都内だけじゃなくて地方のコンサートでも、たいていバイク一台で会場入りしてるんだってウワサ聞いてて、そりゃ確かにかっこいいけど！　でもそんなんで事故って怪我なんかされたらめちゃくちゃ困るんだけど！　ってジレンマに陥りまくった過去が……あるんだな、これが……。
「センセイがねえ……」
尚が低い声で、いきなり言った。
「あれが、クルマがないと駄目な人だから。なんでもいいから移動用に、一台は必要だったんだよね」
……あ……話が続いてたのか、さっきのと。
「藤谷さんの機材が多いから？」

「じゃなくて、足が良くないじゃない？　あの人」

え？

全然聞いてない、そんな話。

なんにも知らない。

「……なんだ、西条は知らなかった？」

尚もあたしの顔を見て、ちょっとびっくりしたみたいだった。

「ああそうか……。うん、あんまり目立たないけど……右足うまく動かないんだよ、あの人。実は」

実は、って。

本当にそんなの目立たなくて知らなかったけど、気がつかなかったけど、でもそんなふうに言われたら、言われてみたら、そしたら藤谷さんって実際、あたしは一緒に歩いてるとき、右足のほうだけ歩きにくそうにしてなかったっけ？

……あたしの隣で、何度か、つまずいたり、とか、して。

そういうこと、事実、なかったっけ？

作曲モードで頭一杯にしてたりとか、そういう別のことがあったから、この人ただボーッとしてるだけなんだってあたし勝手に思ってたけど。

でもなんか、そしたら、相手のことなんにも知らないで、すごい失礼な決めつけかたして、

全然違うほうに解釈してた気がする。
——なんにも、心配してあげなかった気がする。
（すごい優しくない）
こんなのって、後からわかるとなおさらショックだ。その場に戻れるなら別なのに。
「あんまり大袈裟に考えちゃだめだよ」
タウンエースが信号で止まって、そこであたしのほう見ながら、尚が言った。
「かえって失礼じゃない？」
「……」
この人が言うことも、いつも、普通っぽいのに、けっこうシビアだと思う。
モモコと違うのは、真剣に相手のこと考えたうえで言ってるって感じがするところ。
他人の評論してんじゃなくて、他人じゃない人間のことだからシビアに言うんだって感じがする。
評論じゃなくて……どういうんだろう、こういうのって……。
「だから俺、坂本の叩くドラムって気に入らないのかなあ……。あいつ鍵盤やらせれば素直な音が出てくるくせに、ドラムセットの前に座らせるとすごいイヤな奴にならない？」
「ええっ……!?」
よ、よくわからない。

今の話で、何が『だから』坂本のドラムの話題になるのかってのも、その叩き方がイヤな奴だってのも、両方。

「意識してんのがやたらわかりすぎるのかなあ……」

尚は少し口ごもる感じで、眉しかめて信号を睨んでいる。

青信号のライトがついたところで、ハンドブレーキはずして、アクセル踏みこんで。

「打倒藤谷で音楽やってるのは大いに結構なんだけどさ、藤谷が自分の足じゃ絶対ドラムセットは叩けないって前提があって、それ意識してドラム叩くんだったら俺はゆるさないよね」

「……」

「それであいつも藤谷のこと意識しないように叩こうって意識を、またさらにするから、もう泥沼だよね。結局、自分に嘘ついて叩くから、あいつのドラムって人間が叩いてる気がしないの。たいていのリズム、注文どおりに叩けるテクニックはあるけど……速さが正確なだけだったら、最初っからドラムマシン使ったほうがましじゃない？」

「……」

……ものすごく、厳しい。

こうまでズバッと本当のこと、簡単に見抜かれて、言いきられちゃったら、いくらそれが本当のことだって、坂本も凄く可哀相じゃないかって思う。

「ちなみに俺は、坂本の音楽性は貶すつもりないのよ。あいつの本音って、ちょっとでもキー

ボード弾かせたら一発じゃない？　本性が鍵盤屋さんなんだよね、結局……」
「鍵盤屋さん……」
「そう。藤谷もコンビニエンスストアに見せかけといて、しょせんは鍵盤屋。それで俺がギター屋さん」
最後の一言分だけ、尚はちょっと笑ってたみたいだった。
じゃあ、この人から見て、そしたらあたしの音楽はどんな風に呼ばれるんだろうって、あたしが頭の裏側でぼんやり考えたときだった。
突然、尚の手がＦＭラジオのスイッチにのびて、別の局に切り替えた。ちょうど流れはじめてたイントロをぶちきって。
（あ）
今のイントロ、一瞬、あたしは何だかわかってなかった。よく考えたら、つい最近やたらあちこちで流れてるやつだったのに。
Ｚ－アウトの新曲、だ……。
「嫌いなんですか!?」
あたしはなんだか焦った訊き方をしてたと思う。
「西条はＺ－アウト好きなんだっけ？」
ハンドル大きくまわしながら尚が言う。違うよ、そこであんたが弾いてたから好きだったん

だよ!!　と言いたかったけど今ひとつ勇気が足りなかった。

「別に、そういうんじゃなくて……」

そうじゃなくて、やっぱり、尚がZ－アウトの音を嫌いなのに一緒にステージに出てたんだとしたら、そしたらそれ客席から見てたあたしは、悲しくなると思ったんだ。

それでもそのステージにいるあんたのことが、あたしは好きだったんだから。

あの音の中に、他でもない、高岡尚のギターがあることが嬉しかったんだから。

「キライなのに一緒にやってたんじゃ、ファンがかわいそうじゃないのかって……思ったから……」

あたしがやっとのことでそれだけ言ったら、尚はちょっと溜息ついて、

「厳しいなあ……。でもそれは西条が絶対正しいよね……。同じステージに立つ相手のこと信頼できない状態で、お客に演奏聴かせちゃいけないんだよ、それはお互いにプロなんだからさ……」

「……信頼できなくなっちゃったんだ？」

「いや……つまり、Z－アウトと俺との間に、そんな深刻な不信があったわけじゃないって話をしてるんだけど……。俺はあの人たちの確立してきた個性は、やっぱすごいものだろうって評価するし、Z－アウトの音から得られるものとか、刺激とか、まだまだゼロになってたわけじゃないんだから……だから俺がそれなりに、こいつは俺の修行なのねって割りきって、つづ

けることはできてたと思うよ。もし、藤谷が自分でバンドやりたいって言ってこなかったら」

そうか、藤谷さんが言ってきたからなんだ……。

Z－アウトが嫌で我慢できなくて、だからやめたっていうより。

「逆にねえ、いっそ、俺がZ－アウトの音を大キライになったとか、むこうから『てめえの音はもういらない』って言われたとか、一緒にやってても新しく挑戦できることがなくなったとか……これで終わりだ、って区切りがあったんだったら、よっぽど楽だったよね……。その区切りより前に、俺がサヨナラしちゃったんで、それで今でも良心が痛むわけだよね……」

要するに疚しいだけなのよ俺、って尚がつけたした。

「だから、ちょっと、まだ冷静にはZさんの音が、聴けないかなっていう……。今いち、あちらに申し訳なくて」

「なんで藤谷さんのほうがいいって思ったんですか？」

「あのね……あからさまにそういうこと訊く？」

それこそZ－アウトの皆さんに申し訳ないんじゃない？　なんて、尚は困ったみたいに顔をしかめている。でも現実にこっちがわ選んでるんだから今さら申し訳ないも何もないんじゃ……とかあたしは思っている。

「ひとつだけ、ものすごくわかりやすいことを言おうか？」

答え方に悩んだ挙句っていう感じで、ぼそぼそっと尚が言った。

「Z－アウトのメンバーって、楽器の練習を、まったくやらない人たちだったの。俺は、その姿勢がたいへん気に入らなかったの」

「……練習っ……！」

期末試験の四文字を尚が聞いたときと同じくらいのレベルで、あたしは愕然としていた。

リハーサルとかゲネプロとか、そういう、ステージの準備ってイミじゃなくて、楽器の練習っていう言い方を尚がしてたから、なおさら。

（ギターの練習、やってる人なんだ、この人!!）

当然といえば、当然なんだけど。

そんなの、尚にとってはあたりまえなんだろうけど。

ただ、単純に、もう高岡尚くらいのプロフェッショナルになったら、ギターなんかいくらでもかるがると弾けちゃって基本の練習なんかする必要もないんじゃないかって、あたしが勝手に思いこんでただけのことで。

どっちかっていったら、練習してないっていう、そのZ－アウトのメンバーのほうが、あたしの偏見のなかでは正しいプロの姿みたいになってて。

「ああ、別にZ－アウトだけじゃないよ、多いよ、そういう人。レコーディングだけはきっちりまじめに録って、でも生で、ぶっつけ本番やれるほど上手くないからってライブじゃ口パクとかテープ使ったり。……そんなもん頼るなら、できるようになるまで死ぬほど練習し

ろ!!　とか思わない？」

……なんか、すごい。

れっきとしたプロの、この人が、アマチュアである坂本とかあたしなんかと同じ内容の怒り方してるってところが。

「俺、この音楽業界に入って、何がいちばんショックだったかって、楽器のこと愛してない奴がゴマンといることだったの。金儲けとか、目立ちたいとか、女の子に騒がれたいとか、チャートの何位に入りたいとか、みんなボロボロとそっちに流れていくんだよね……最初はどんなにマジメでもね……。で、俺もそれにいちいち腹を立てるヒトなんだよね、他人のことなんだから放っときゃいいのにさあ……めちゃくちゃケンカ売りたくなるの、本性がケンカっぱやいヒトだから。もう、あらゆる不正に対して、大声でケンカ売るタイプなの。ゆるせないの、でっかい裏切りから些細な手抜きにいたるまで」

「……」

「でも、道の真ん中とかで、大声でがーがー怒鳴ってるだけの奴って、ただの公衆の迷惑じゃない？　だから滅多なことじゃケンカ売らないように性格改造したんだけどね……」

そ……そうだったのか……。

つまり普段、この人ってのはすごくムリして冷静を装っているってことらしい。

しかし言われてみたら尚のギターの音って、そのケンカっぱやい本性バレまくりじゃないだ

ろうか……。あああ、なんて納得しちゃったよ、ひとりで……。

ギリギリまで尖った音で、ざくっ、と正面から攻めてくるみたいな、誰の嘘もゆるさない、冷たいくらいの、でも沸騰しそうに本気のカタマリの、そんな弾き方をする。

ただクールで大人ってだけの奴だったら、あんな音、出さない。

「じゃあ、がーがー怒鳴るかわりに、ギターのほうに性格全開にしてるんだ……」

ぼんやり言ったあたしに、

「しまった、バレたか……」

尚は横目でちらっとこっち見ながら、やられたって感じで、苦笑いしてくれた。……す、すっごい嬉しかった。今の笑い方。

今の一秒分のために、どんな凄い苦労したってぜんぜんつらくないって思った。

「で……藤谷センセイって奴は、あのとおり何やらせても危なっかしいヒトだけど、俺はあいつのとんでもなく音楽バカなとこが大事なの、凄く。……俺もかなりの音楽バカだって自負してたけど、それでもあれにはかなわないと素直に思っちゃったから」

音楽バカ……。至言だ。

「一度あいつにハマっちゃったらだめじゃない、やっぱり？　西条もそうなんじゃない？　でなかったら今ごろ、こんな面倒な状況に陥ってないじゃない、どう考えても」

「……げっ……そうか、ハマッてるんだ、あたし……」

「やっぱり、もはや手の施しようがありません、ご愁傷さまでした……ってとこかな」
な、なんてお茶目な奴なんだ、高岡尚……。
「御苑の、どのへんになるの？　西条の家」
「あっ、あの、一方通行とかで、道順めんどくさい場所だから、そこの歩道橋のとこで充分だから」
気がついたらタウンエースはもう、目一杯うちの近くまでたどりついてて、あたしは慌てて敬語の使い方もわかんなくなってしまった。
「こんな大通りのところでいいんだ？　クルマが入らないんだったら徒歩でも送るよ、俺」
「大丈夫!!　もうほんと、すぐ近くだから!!」
これ以上幸せな目にあったらマジで寿命が縮む。
「ええと、今、藤谷さんのほうが心配だしっ……」
「……さすがに反論できないなあ、それ……」
しょうがないって感じで、尚はこっちの希望どおりの場所でタウンエース停車させてくれた。
ありがとうございましたって死ぬほど本気で頭下げて、それでドアあけて降りようとしたら、
「そうだ、西条のドラムはね……」

いきなり、尚がそんなことを、ぽんと言った。
なんの前置きもなしで。
「本能で叩いてるじゃない？　だから俺は面白いと思うよ」
「……本能……!?」
「方向性それでいいから、あとはがんばって邁進するようにしてください。じゃあ、おやすみ」
ほけっとしてるうちに、足元は地面で、ドアはしまってて、あたしをおろしたタウンエースはエンジン鳴らして走りだしていた。
わ、わからないぞ高岡。どんな意味なのか、今ひとつ。
（知性のカケラもないってことだったら、どうしよう……）
どういう方向性なんだろうか、それは……。

その晩は、布団にもぐって、いつまでたっても、どんなに時間たっても、どうしても眠れなかった。
神経が昂ってるんだろうってのはわかったけど、その原因が藤谷さんの問題なのか、高岡尚が運転してる車の助手席なんかに座っちゃったからなのか、尚に凄まじい酷評されてた坂本のドラムのことだったり、それよりもっと先行き不安なあたしのドラミングの仕上がりだったり

するのか、刻々とせまってくるステージ本番のプレッシャーなのか、さっぱり分析できなかった……。

（全部だ、全部……）

だけどここで寝不足なんかで体調くずすのがいちばん怖いから、たのむから早く眠らせてくれって自分の頭に頼みながら、あたしは布団の中でうーうー唸っていた。

……電話が鳴ったのは、午前四時をまわったくらいで、なんとその時間になってもあたしは起きていた。

こんな変な時間に鳴る電話なんか、普段は絶対、仮になんかの間違いで起きてたってとらないんだけど、これはなぜか絶対あたしが出なきゃって気がした。

絶対に、あたしだ。

「もしもし……」

『……あ、西条？』

ほぉら、やっぱし坂本くんじゃないかっ。

絶対にこいつも、まだ眠れてるはずないって思ってたから。

『なんか、すごい早く出なかった？　今……』

何びっくりしてるんだろう、この人。誰が相手だかわかってたからに決まってるじゃんよ。

……まあいいや、今は説明してやらないことにした。自分で考えろっ。

「坂本先輩もこんな時間まで起きてて、病気のほう、大丈夫なんだ？」
『うん、まあ……我慢できないことない程度だから……』
ちょっと待った……。発作おこしてるってことじゃないか、しっかり……。
「あ、あのね、それって薬、使ってないってこと？　薬使っても我慢しなきゃなんないってこと？」
『両方……。あの、吸入の薬って強すぎるから、一日に二回は使えないから、そしたら二回目の発作からは我慢するしかないから』
なんか、この人の状況も、思った以上によくないんじゃないかって気が、すごくする。
『そんなことはいいんだ』
あっさり坂本はその話題を終わらせてしまった。
『藤谷さんのことなんだけど……』
「あ、うん……」
少し、心臓がぎくっとした。
坂本が何か、ものすごく厳しい台詞、吐いてくるんじゃないかと思って。
『あの後、もう一台、壊してた。今度はヤマハのやつ』
「……」
あたしの予想は外れたけど、胸にずしりとくる感じってのは変わらなかった。

『西条、驚いてる？』
「……そりゃ、やっぱり……」
『そっか……。俺は、かえって、あの人はもう最後まで好きにさせておくしかないんだって思ったけど……』
どうしようもないよ、と坂本くんは呟いた。
……本当に、あたしたちにはどうしようもない。
『それで、西条に電話したのは、もしかしたら藤谷さんが西条の家のほうに行くかもしれないから、気をつけてほしくて』
「……え？」
何、その、話の流れって。
「ちょっと……藤谷さんがどうするって……」
『だから、今、どこにいるのかわからないんだ、あの人』
「――こ、こんな時間にっ……何言ってんだよ、いきなり!!」
『だって本当にそうなんだから仕方ないよ』
そこで、あたしは目覚ましの針を思わずもう一回、見直してしまった。午前四時十五分ってのは、いくら見直したって、なんにも違わなかった。
藤谷さんはそのまま、朝になっても、あたしたちの前から姿をくらましたきり、どこにも戻

ってこなかった……。


グラスハートⅢ
——break the
GLASS HEART
(後編)

6

その次の日は、午前中から、みぞれまじりの冷たい雨が降りはじめていた。

一番乗りは絶対あたしだと思いこんでたんだけど、例のリハーサル用にキープしてもらってる小スタジオのドアをあけたら、もう、坂本一至ご推奨ローランド製ワークステーションその他（要するにシンセサイザーってことなんですけど……）の音が、とっくの昔にそこに居座っていた。

重いドアしめるまでの三小節くらいでもう誰が弾いてんのかすぐわかる。

それってのはほんとに坂本一至っていう鍵盤屋さんの凄まじい個性と才能で、こんなはっきりしたもの前にして言い訳なんかきかない。

クサビ形文字みたいにぎくしゃく折れ曲がった音の流れとか、化学変化おこして別物になりかけてるリズムとか、いくら他人が真似しようったってできない。どうやったらそんな弾き方して、それでまともにぴたりと音符にハマるのか、そこんとこの理屈からしてまったくわからない。

(——break)

(break the GLASS HEART)

あたしが来たことになんかおかまいなしで坂本くんが何を弾いてるかっていったら、たしかに聞き覚えのありすぎる一曲の、それもサビのいちばん大事なメロディーのとこだったんで、あたしも邪魔はしなかった。

「弾いてみる？」

両手で鍵盤たたいてるまんまで、いきなり坂本が言った。……やだってば、こんなキョーレツな人の音と並べて弾くの……。

「……やめとく、別に」

「西条、メロディー乗っけてみなよ。俺がこっちでその下側、鳴らしてみるから。あ、そのエレピさっき音量かなり落としたから適当なとこまで戻していいから」

だからあたしはやめとくって言ってんでしょーが、人の話を聞けえっ!!

「えっ、まさか、まだメロディーわかってなかったりする？」

「坂本くんそこまで西条バカにしてるんだあっ!?」

「してないよ。だったら他に何も問題ないんじゃないの？」

そーゆーことじゃなくてえええっ……。いいよ、もお……負けた。

実際、このところドラムの練習ばっかりでキーボードいじってないから、坂本くんに言われるまでもなく、白と黒の鍵盤が妙になつかしかったりもしたのだった。

やっぱし鍵盤を押さえて出す音が、あたしにはいちばん楽で気持ちいいんだと思う。なにし

ろ子供のころからしみついてるし。三つ子の魂っていうくらいだし。

（あれ？）

そこで初めて、あたしはとてもびっくりしていた。

無手勝流で弾きたおす坂本くんのやりかたは知ってたから、ちょっとでも乗り遅れたら最後！　みたいなカクゴで、ひとつめの白鍵押さえたところで。

（普通だ）

意外と、どうっていうズレもなくて、たいした苦労もなしで、あたしの電子ピアノは坂本の演奏を追っかけることができてた。まともな音、だった。

……合ってるんだ、ちゃんと。

当の坂本くんはまた例によって哲学的なカオして、背中かがめてぎしぎし弾いてるだけなんだけど、でもあたしにはびっくりだった。

なんかすごい嬉しい。

（合わせてくれてるんじゃん）

つまりはそういうことだから。

「もしもし坂本先輩、あのー、西条ここで飾りのフレーズびしばし入れていいですかー？」

「あっ！　そこで音数いきなり増やすのってちょっと反則……！」

「だからいいかって訊いてる……けどもう弾いちゃったよ……。坂本先輩、ちなみにこれ、コ

ード進行このままで別の曲いってみたりしないかなー？」
「だめ!!　そういうのはまだ俺の専門外だから!!　……って言ってるのにこれだ……」
　専門外と言いはったわりに、やりすぎかなってくらい逆方向にメロディー動かしても、律儀に坂本くんの音がひとつひとつ対応してくるから、もうどんな無茶やってもＯＫって感じで、それがまたあざやかな腕前で、あたしはふさがってる両手のかわりに思わず足ばたばた鳴らして拍手してしまった。……『拍足』になるんだろーか、この場合。
「じゃあ西条に逆襲しよう！」
　意を決して呟いた坂本が何やんのかと思ったら、
「うぎゃああっ、死ぬかと思ったあっ」
　予告なしでいきなり変拍子に落とすか、貴様ーっ!!
　四拍子で弾いてた曲、突然七拍子なんかにひっくりかえされたら慌てるに決まってる。心の準備くらいさせろ、少しは!!
「……あ、まだついてくる、しつこいな……」
　目がマジだよ、この人……。やだやだっ。
「本気で振り落とさなくたっていーじゃん、薄情者ーっ!!　あたし何もそこまでやってないじゃんかあっ!!」
「と言ってる隙に足をすくって……連続二転調」

「卑劣！　坂本くん真っ剣に卑劣!!」

大騒ぎしながら、メロディーやら曲調やらをその場の思いつき勝負でがらがら変えていったあげくに、重々しいトッカータとフーガの主旋律をなぜかファンファーレ調にぶちかまして、そこで我々はやっとふたりして鍵盤から手を離した。

スタジオはずっと底冷えしてんのに、こっちはすっかり汗だくだった。

「なんだ、やればできるんだ……」

ずれた眼鏡のフレーム押しあげながら、坂本くんがぽつんと言った。

「え、あたし？」

「じゃなくて俺が」

坂本は大真面目に自分のこと指さして、それから背中向けてポケットの小銭さがしながらスタジオの外に出ていって、自販機の缶コーヒー二本さげて戻ってきた。

「西条ビターとブレンドどっちがいいかわかんないから両方買ってきたけど……」

「ブレンド欲しいです、西条」

「俺もそっち狙ってたんだけど……」

「人に訊いといてそーゆーこと言うかね……」

いーよ別にどっちでも。おごってもらえんだったら。

「でも俺コーヒーなら中身どうでも気にしないから、いいよ、西条それで」



「半分あげよーか？」

あたしが提案したら坂本くんは少しムズカしい顔して黙って、

「混ぜたら面白いかもしんない……」

「……あたしそれ賛成したくない……」

昨日の今日で、しかもライブ本番が目前に迫ってるとこで、なんでこんな超平和なことやってんのかって考えると力ぬけそうになるけど、でもそこで自分たちが考えてたって仕方ないっていう坂本くんのほうがきっと正しいんだとあたしも思う。

「西条の弾き方って、ほんとに俺と対極だよね」

缶のふち、服の袖でごしごしふいてから、坂本はプルタブ起こしてあたしにそんなことを言う。

「サラッとしてて。過不足ないし、ハミ出さないし、伴奏向きっていうか……予想外に女の子っぽいっていうか」

予想外って何だそれは。

「いちばん俺に足りない部分じゃないのかな、その『人の裏にまわる』って感じ」

「だって坂本くんの音、裏にまわしちゃったりしたら勿体ないんですけど……」

「うん、俺は最初っから傍若無人にシンセ弾きとばしてんのが、まわりの音のためにもベストだって……藤谷さんが。それで褒めてるつもりだからひどいよね、あの人」

「……ううう……ん」

藤谷さんに褒められてんだからいーじゃん……と言いたいような、坂本くんの気持ちもわかるよーな……。

「どうせなら今の演奏、藤谷さんに聴かせておきたかったな」

ちょっと自慢できた気がする、と坂本くんは小さく呟いた。

ミーティングするから来なさいって、ギタリスト高岡尚からの電話がスタジオに入って、神宮前の藤谷さんちまで坂本くんと一緒に移動したら、そこには美人マネージャー甲斐さんが待ちかまえていた。

そうだ、事務所ってもんが存在してるんだった。この一件には、あたしたちの他にも。

「別に、ねえ……」

めちゃくちゃ面倒くさいって感じでため息ついて甲斐さんは、

「こっちは藤谷クン雲隠れしちゃってさあどうしましょうなんておハナシしにきたんじゃなくて、もっと建設的で現実的な問題を片付けたかったんですけどねえ……！」

「序の口、序の口」

新しい煙草くわえなおしながら、尚がぼそぼそと唱えている。昨日と服装が変わってないってことは、徹夜したまんま寝てないってことだと思う。……それにしても、こんなハナシして

る時でもなぜかこの人は必ずギターを抱えている。

「高岡クンの管理が甘いからいけないんだよ？」

ばりっとしたスーツの腰に手をあてて、甲斐さんは恨めしく尚のことを睨みつける。

「この際、もう頼れるのは高岡だけなんだからさあ、も少しこっちの身になってくんないと困るんだよ、まーじーで」

「こっちもこの際、頼れんのは甲斐だけなんだから、も少し藤谷の身になってやれない？」

「だめっ。その手には乗らないっ。ここまできて、これ以上Z－アウトさんの顰蹙かってキラワレ者になんのはイヤだからねっ」

「なんで甲斐そこで素直にならないの？　状況の認識あやまってない？　どっちみち一蓮托生なんだよ、我々」

「お気の毒ですけども、金にまみれた商売人にそーゆーこと言ってもムダ。だっていちばん困るのって藤谷本人なんだよ、万一ここでステージに穴なんかあけてごらん、もうどこのプロモーターもあんたらのこと扱ってくんないよ、いいのそれで？」

すごい、どっちも譲ってない……と圧倒されながら見てたら、甲斐さんの最後の一言で、尚がちょっと眉ひそめたみたいだった。

「この程度でステージに穴あけるなんて言ったら、まず俺が怒るよ？」

「……」

尚が誰を怒るのか今いちはっきりしなかったけど、この人がマジで怒るのはちょっと勘弁してもらいたかった。

甲斐さんもなんとなく、答えにつまって、システム手帳の予定表をひらいている。……やっぱり怖かったのかもしんない。

「……とにかく衣装のことくらいは進めさせてもらうからね。あとねえ、いちばん重要なのって、これ。――バンドの名前」

げげっ。バンドの名前っ。

そういやそんな話し合い全然してないんじゃ……と坂本くんを見たら、むこうもこっちとまったく同じ調子だった。つまり何にも決まっていないわけだね……。

「バンド名ねえ……」

煙草くわえたまんまで尚が呟く。

「今はしょーがないから藤谷の名前で通してるけど、それじゃ、あんたがた不本意でしょ？バンド単位で宣伝するならするで早くそれ決めないと、もっのすごくカッコつかないんだよねえ」

「いいよ、当日までは謎の藤谷バンドで。当日には必ずなんとかするから。それより衣装のほう、西条かわいくしてやりたいんだけど。目玉商品扱いで」

は!?

よりによって尚のセリフからいきなりお鉢がこっちにまわってきた。なんでこの話の流れでそうなるんだ高岡尚!!　さらに輪をかけてショックだったのが、それ言われて甲斐さんが大マジにうんうんと頷いていたことだった。

（あっ……!!）

そうか、やられたあっ！　うまく話題そらすネタに使われたんだ、ちくしょー高岡……。

「だよねえ、この場合、ハンパに女の子がいるって感じに見えちゃうのがいちばんマイナスだから、それだったら思いきって飾らないとだよねえ……。じゃあ早速サイズ教えてもらうってことで、あっそれから念のため写真も撮りたいし、スタイリストさんにも連絡とれたら顔合わせしといたほうがいーし、ねえ西条さん今から連れてっていい？」

ううう……。しかし甲斐さんのむこうがわでこっそり、尚が顔の前に片手あげて非常に申し訳ないってブロックサインを送ってくださったので、あたしとしては、そこで恨むに恨めなくなってしまったのだった。もしかしなくてもあたしって……尚に何されてもこんな調子でうやむやにされてく気がする……。

7

夜になってやっと『ＢＥＡＴ』の事務所を出た時にも、雨はまだやんでなかった。

すごく寒くて、雪にならないのが不思議なくらいだった。
（藤谷先生カサなんか持ってない……んだろうな、やっぱし……）
書類つくるからって甲斐さんにいろんなこと訊かれて、他の社員の人に紹介されたりして（行き場のない名刺がまた増えた……）、慣れてないことばっかでとにかく疲れて、もろもろの用事が全部終わった時点であたしはすっかりくじけかけていた。
これはもうよっぽどそのまんま家に帰って寝てしまえって感じで。
にもかかわらず気がついたら神宮前を歩いてるあたり、結局あたしは少しでも長く藤谷さんちにいたかったんだと思う。……ハマってるんだなあ、ほんとに。
もはや手の施しようなし、ご愁傷さまでした状態。
でも尚が言ってんのとはちょっと違う気がする。尚はセンセイの音楽バカにハマったら最後って言ってたけど、あたしのはそれだけじゃない気がする。
それもあるけど、もっと別のも。何か。
（？）
藤谷さんちの玄関先に立って、傘をたたもうとしたときだった。
家の前の狭い道をむりやり突っこんできた車が一台、アスファルトの雨水はねかえしながら、ちょうどすぐ近くに止まった。ばたんとドアしめる音がして、誰かが運転席から降りてくるのが街灯の下で見えた。

一瞬、まさか藤谷さん本人って思ったけど、そんなわけなかった。免許持ってないはずだった、あの人。

ただ背の高さとか肩の線の感じとかが、影だけでも藤谷先生となんだか似てたから、それで。

(桐哉だ)

……なんでこんなとこ来るんだろう。

ボーカリスト真崎桐哉だった。《オーヴァーサイト・サイバナイデッド・クローマティック・ブレイドフォース》、略してオーヴァークロームの。

印象強くて、忘れてなかった。ステージ一回見たきりだけど、充分だった。

怖い、人だ。

触ったらケガしそうな……。

「あれっ……?」

雨に濡れるまんまで、道路から玄関先までの段差をとびこしてあたしのいる場所まで来て、そこで桐哉も少し意表つかれたみたいだった。

ステージでも楽屋でもないとこで、こんな普通の場所で間近に見ると、よくわかんない迫力におされる感じがした。

(芸能人してる……)

先生とか尚とかと、別で。四六時中、『撮影用マスク』とっぱらってないんじゃないかっていう、そんな雰囲気で。

「なんだよ、おまえ野望娘か……どこのグルーピーかと思ったら……」

野望娘……。なんか全然嬉しくない、その呼ばれ方……。

しかし、えーと……ど、どうしよう。こんばんはって言えばいいのか、この場合？

「藤谷戻ってきた？」

こっちが何も言わないうちに、先をこされてしまった。

「あ、あたしも今、ここ着いたばっかしで、わかんないです、けど」

……ええっ？　なんで藤谷さんが行方不明状態だってこと知ってるんだ、この人？　よく考えたら。

いくらなんでも情報が早すぎる。

「ああ、そう……『わかんないですけど』、で、何？」

「え？」

正直に聞き返したあたしが馬鹿だった。

いきなり桐哉の腕がのびて、掌で殴るみたいな勢いでインターホンのベルを叩いた。あんまり強引に鳴らしたせいで、ピンポンって単音が連続した不協和音になってドアのむこうから響いて聞こえた。

殺気立った鳴り方、だった。

「なあ……『わからない』んだったら真っ先にこれくらいやんのが礼儀じゃないの？　わからないって言われて俺がそうですかって帰らなきゃならないの？　誰かが自分のかわりに動いてくれるだろうって思ってんのか、それとも？」

「……」

「学校の授業中ならワカリマセンですむんだろーけどさ……お仕事の世界で、そんな態度が通用すると思ってんの？」

「……」

すごくやなことを言われてるってのは、気持ちのどこかで、わかった。

この人があたしに真面目なイミで助言とか忠告とかしてくれてるんだったら、こんな気分、絶対ならないはずだと思う。もっとずっと腹が立つ感じの、言われ方だった。

（悪意、がある……）

けど答えらんなかった。

プロの人に仕事の世界云々って話、されたら、反論できない。

反論できない、のが、くやしい。

胸の奥が、ギリギリするくらい、くやしかった。

「っ！」

突然、どかっ、と背中にドアがぶちあたってきた。ショックで涙出そうになった。痛いっていうよりびっくりのほうが強かった。こらえてたから余計に。

「あ……悪いっ……！」

インターホンの返事もなしでドアあけた犯人がしかもギタリスト高岡尚で、真剣に申し訳ないって顔して反射的に（だと思う）左手のばして頭なでてくれたりしたんで、あたしの涙腺は崩壊寸前まで行きかけた。どう反応していいかわかんない。

（先生まだいないんだ）

尚が今みたいなドアの開け方したってことは、きっと相変わらず藤谷さんは戻ってない。

それだけは確かだと思った。

「ああ……オーヴァークロームの……」

ドアの脇にいる桐哉のこと目にとめて、尚はあんまし驚いてない声を出していた。

「真崎だけど……」

桐哉も尚に対してはとりあえず名乗るとこから始めてて、あたしと喋ってた間よりずっと穏便だった。一応尚のほうが先輩だからだろうか、なんて考えてたら、

「高岡さん、あんたさ、自分に才能ない分、藤谷けしかけるのやめてもらえない？」

桐哉の第二声が、それだった。

不意打ち、で。

隣にいたあたしのほうが、死角から、ざくっと切りかかられた気になるみたいな。
「Z－アウトでさんざんおいしいとこ貰っておいて、次が藤谷ナオキじゃ、業界の顰蹙かっても当然じゃないの？　あんたに藤谷とわたりあえる力量あるとは、悪いけど俺は思ってないよ。そんなこと俺が言わなくてもあんたが自分で一番知ってんだろうけど」
な……なんで、藪から棒にそんな、目茶苦茶。
ケンカ売るにしたって。言っていいことと悪いことが。
怒るのさえできなかった。呆れてるっていうのが、あたしの気持ちにいちばん近い。呆れ果ててもまだ足りない。ただ、唖然としてるばっかりで。
だってこんな無茶なこと言いだす奴がいるなんて信じらんない。
ここに立ってるこいつが、異星人だとかいうならともかく。
「……それで？」
自分とぜんぜん関係ない話題みたいに、尚が言った。
もしかしたら尚もやっぱし呆れてたのかもしれない。あたしと同じで。
「俺が藤谷をけしかけたら誰が困るって話？」
「常識的に、今回のステージの一件だけでも、どれくらいの人間が迷惑こうむることになんのかはわかるんじゃないの、あんたにも」
「それ言ったらいちばん迷惑してんのって俺じゃない？」

思いきり真顔で尚が答えて、桐哉とあたしはふたりして絶句してしまった。
「その上で、それでもやるって藤谷本人が言ってんだから仕方ないんじゃない？」
「……だからっ……だからそいつが違うんだろうがよ、ばっくれやがってんじゃねえよ!!」
初めて、桐哉がそこで声をはりあげた。
「やりかたが汚ねえんだよ、Z－アウトのステージで、高岡尚を前面に出して、騒ぎたいガキどもに媚びて威勢のいい曲やれば、客がもりあがんのはもう当然なんだよ!!　結局、実力だけで勝負する土台がてめえらにないってことだぜ、あんたいいのかよそれで!?」
「逆じゃない？　土台がなかったら藤谷は相手にしないと思うよ。あざとい手段だって何だって、音に自信があれば使えるものだろ」
「自信？」
あっさり言った尚のこと見返して、桐哉がちょっと笑った。笑った、みたいだった。
「当の本人が、煮詰まって、逃げだして姿くらましてるってとこで、今さら『自信』のおハナシかよ……!!」
あっ……。
一瞬、尚が口をつぐんだ。でもそれは黙ったんじゃなかった。何かの前触れだった。ざわっと足元から冷えてくる感じがした。
（誰か）

（誰か止めないとまずい）

このまんま放っといたら〇・五秒後に凄いことがおこる気がした。何がおきるかなんて知らないけど想像つかないくらい絶対ひどいことになる気がした。

ばしゃっ、とすぐそこで水の音がした。

……ええええっ!?

いきなりだった。いきなり、海坊主かなんかに背中から両手でつかまえられたみたいだった。あたしはもうちょっとで、うにゃあって叫びながら尻餅をついてるところだった。滑った足元、ギリギリで踏みとどまったけど、そしたら、

「あ、あっ……あの、ご、ごめんね朱音ちゃん、大丈夫だった!?」

あたしの両肩つかんだ海坊主が喋ったセリフが、それだった。

「だっ……」

大丈夫だったって、んな平和なっ……。

こっちはこっちでまともなセリフなんか出てこない。

なんでまたこの人ってばよりによってこんなタイミングで戻ってきて。しかも。

「そうだ、今、坂本くんそこにいる!? 譜面書いてる時間ないから坂本くんのワークステーションにパターンだけでも打ちこんでもらおうと思うんだけど……！ あっそれから朱音ちゃんに同時進行でリズム憶えてもらえばいいんだよね、一石二鳥だし！ ああっ駄目だ喋ってると

ディテール忘れちゃうんだ、ほんと今のうちだから早くしないと早く！」

ひとりで一気にまくしたてたと思ったら、濡れネズミ状態の藤谷先生は——そうなんだよ藤谷先生なんだよこれが——玄関先に並んでる高岡尚と真崎桐哉っていう違和感ありまくりの顔あわせに気づきもしないで、靴ぬぐのもおざなりって感じで、そのまんま家の中にダッシュしていった。

——じゃなくて、ダッシュしていく寸前で、すかさず腕のばした尚に襟首つかまれた。

「センセイ、ここにいるのが……」

誰だかわかってる？　って尚は訊きたかったんだと思う。

だけど藤谷先生が左手の握りこぶし固めて、尚の肩のとこ一回叩いて、口をひらくほうが先だった。

「高岡君、例のアレンジなんだけど……」

最大の秘密情報、こっそり明かすっていうノリで。

「大変なんだよ……凄いんだよ、今日一日でできちゃったんだよ、実は!!」

「……そんなのあんた見てりゃわかるよ」

「ええっ？　も少し劇的にわかんないとつまらなくない？　あっいいや、どうせ現物聴かせたら涙流すくらい感動するから！　もう、それぐらい凄いからこれは！　どうして俺ってこんな人外魔境の音がひらめいたりするんだろう、やっぱり俺だからかなあ、いったい何者なんだろ

う俺……」

「……」

ああ、そう、なんて尚はぼそっと呟いていた。他に言いようがなかったんじゃないかって気が……。

「とりあえず……センセイ、その北極海に水没してきたみたいなカッコで楽器に触るのだけはやめてね……マジで感電するから」

「あ、触らないようにすればいい？」

違うっ！　とその場にいたあたしたち三人はそれぞれに声そろえて唸ってしまった。こんな冷たい雨の中、ずっと濡れっぱなしだったんなら、ほんとに今すぐでもあったためないと凍りついちゃうよ、この人。

「何の騒ぎやってんの？」

やっとそこに、隣のリビングから坂本くんが登場してきた。やっぱりずぶ濡れの藤谷さんのこと見てげっ、っていうカオして、何これ？　ってあたしに視線で訊いてくる。

「そうだ、わかった！　あのさ坂本くん、アレンジの大枠できてるから、俺が着替えしながら口で説明するから、それメモして打ちこんでくれる!?　そしたら時間がムダにならないんだ、今すぐやるから！」

「えええっ？」

脈絡ぶっとばした藤谷先生の命令に、坂本は頭を抱えている。そりゃそうだよね、なんつーか気の毒……。

「あの、桐哉ごめんね、今こんなんでとりこんでて、ハナシ聞いてる時間なくて……でも後で電話するから！　必ず電話する！　ほんとにごめんね」

あ……それでも一応、藤谷さん、桐哉がそこにいることくらいは、見てたんだ……。

（なんでそこにいるのかってのは全然考えてない……んだろーな、これは……）

藤谷先生がばたばたっと坂本ひきつれて奥の部屋に消えてくのを、桐哉は桐哉で、調子狂いすぎて溜息もつけないって感じで見送っていた。

「……さあて……」

しばらく空白があいたとこで、ぽつんと尚が言った。煙草の箱とりだしながら。

「寝ます。俺は」

え？　……あ、そうか、ずっと寝てなかったんだ、この人。

先生が帰ってくるまでは。

「なにか問題あったら起こせって、連中に言っといてもらえる？」

それだけ言い残して、のこのこと階段をあがっていく。さっきまでの桐哉とのゴタゴタなんかは、もうどっかに行っちゃってるみたいだった。

……あと、は。

あたしと桐哉のふたりしか残ってなかった。

「ひでぇ話……」

一言、桐哉はそんなこと呟いて、それから思いだし笑いっていうのか、どっかひっかかった、本気じゃない笑い方をした。

「あいつ電話なんかすると思う？　……きれいさっぱり忘れてるほうに五千円賭けてやれるぜ、俺」

8

実際、藤谷先生がリビングの定位置に座りこんで、坂本くんに号令かけて仕事をスタートさせてから先は、あっという間だった。

自分じゃもうほとんど楽器にも楽譜にも触らないで、そのかわりっていわんばかりに坂本の腕をがんがん使いまくって、それでアレンジの完成形までたどりつくのに正味一時間、たってるかどうかってくらいだった。

あたしはその天才アーティストふたりの凄絶にして凶悪なタッグから出てくる『音』の正面にずーっと座らされてる状態で、なんだか夢とか幻覚を見てるみたいだった。

「そこ、仕上げで、それに〇・二ミリ薄い膜かける感じで四小節だけかぶせといて。レモン風

味の、甘さ控えめの砂糖菓子で」
「って……これ？」
「そそそ、それそれ。あ、そいつの下の地面、はずまないからね、フィギュアスケートだからね、エッジきかせといて」
「えっ、あたりまえでしょ、それはそうでしょ？」
これが音楽やってる最中の人間たちの会話で、しかもお互いにばりばり通じてるんですってのは、説明しなかったら知らない人にはわかんないと思う……。
「あっそうだ、坂本くんショルキー使わない？　この最後のコーダから先のとこ。そしたら俺とギターと三人でバトルしてる感じで、すごい盛り上がりにならない？」
「――絶対やだ」
「なんで？　最初っからＭＩＤＩのコントロールそっちにまわしときゃいいだけじゃない？　どーせやってる仕事同じだよ。やっちゃおうよ、おもしろいよそれ」
「――死んでも絶対にやらない」
「でも俺がそれ前提にしてアレンジしちゃえば逃げ場なくなるよね」
「今、藤谷さん、自分で、どーせやってる仕事は同じだって言わなかった？」
「仕事は同じだけど曲は変わるんじゃない？　ライブなんだから」
「……その理屈よくわからないけど……どっちにしてもやらないから、絶、対」

「ええっ？　本当に？　キーボーディストの血が騒ぐんじゃないのかなあ、普通……」

「誰も彼もあんたと同じにしないでほしいんだけど」

ちなみに藤谷先生が言ってるショルキーってのは、要するにショルダー・タイプのキーボードってことで、ベルトで肩からかけるから身動きが自由になるっていう利点はあるんだけど……はっきり言って、よっぽどかっこいい人にしか似合わない（と、あたしは思う……個人的に）。使い方、慣れてないとつらいし。

「ピアニカのほうがまだマシだよ」

むすっとした感じで坂本が呟いた。

「……あ、それってすごく面白い……」

「ちょっと待ってよ、本気で考えなくていいよ、そんなこと！　で!?　ラストだけ残ってるよ、脇道にそれてないで、ここどうするのか決めておいてよ先に！」

「ラスト？　えーと、ラストはね……」

こうやって見てるとなんかすごく仲がいい人たちみたいだ、このふたり……。

ふたりのアレンジ作業と同時進行で、あたしはあたしで曲の構成とドラムパートを憶えなくちゃいけなかったんだけど、わざわざ憶えようとしなくたってそんなもの勝手に耳の中に入ってきた。一回で充分、だった。

別にものすごく簡単な曲ってわけじゃなくて、どっちかっていったら現実に演奏するのはめ

んどくさそうな構成なんだけど、それでもこんなにすんなり身体に入ってくるのは多分、藤谷先生の創ったその音が、自然にこっちをひきずっていってるんだ。

（どこでどうやって作ってきたんだろう）

結局、それは先生本人しか知らない。

まわりがどんな思いしてたかなんてことは関係なしで。

「ねえ朱音ちゃん、桐哉の用ってなんだったかわかる？」

突然、作業の合間にぽんと藤谷さんが言った。ええっ？

「あ、えーと……」

やだな、変なタイミングでやなこと思い出す人だなあ……。

だいたい、本当に何しに来てたんだっけ、って考えたらあたしも混乱してしまった。あれは何だったんだろう……尚に文句つけにきてたんです、なんて言っていいもんなんだかわからないし。

「要するに前回と同じ話？」

すぱっと言い当てて、あたしがこくこく頷くのも待たないで、

「だったら仕方ないね」

鍵盤の低音部のとこ見ながら、藤谷さんはそんな風に呟いていた。

「でも、真崎さんは、藤谷さんが戻ってきたかって、最初に」

「ああ、そうなんだ？」

その時の先生の反応はそれだけだった。ちょうどそこで坂本がワークステーションのシーケンサーブロックに必要な音を全部打ちこみきったから、だったんだけど。

「以上？　完璧？」

「まあ、一応……。あと藤谷さん、これって歌詞の変更とかは……」

シンセのディスプレイ表示を神経質に睨んだまま、坂本が言いかけた。

――その質問、さえぎるみたいに。

「あ、坂本くん駄目、今の俺なんにも聞こえてないから駄目……」

前触れなしに、それまで座ってた椅子の上から直接床に滑りおちて、藤谷さんはばたりと倒れこんでしまった。

「……何それ？」

冗談じゃないってカオして坂本が呟いた。

「ちょっと待って、背中痛い……あ、あのさ、ショウタくん呼んで、俺が背中痛くて頭も痛くて吐き気がして寒気がしてるって言ってもらえる？　あっ何だろうこれ、才能がオーバーヒートしたのかな、死ぬかな俺……」

「才能以前に、風邪の症状っていわない？　それ……」

ああもう次から次へとこれだから、なんて言いながら坂本は二階の部屋めざしてリビングを

出ていく。……な、なんていうか、確かに、やっぱし、こんな季節に十何時間も雨の中歩いてたら、あまりにもそれはあたりまえっていうか……。し、しかしっ。

「あのねえ、先生っ!!　具合悪いなら悪いって最初に言わなくちゃダメだよ、こういう時はっ!!」

「いや、ええと、あの、ごめんなさい、だって今まで気がつかなかったから」

あたしが思わずガンッと叱りつけたら、先生は情けない声で言い訳をしていた。こ、この人は……っ。

「変だな、やばいな……あれえっ？　なんでだろう、俺、絶対倒れないって予定組んでたんだけど……」

そういう問題じゃないと思う……。

ろくに寝てないとこを坂本にたたき起こされてきた挙句、

「三十九度六分」

火がついてない煙草の端のほう噛みながら、電子体温計、目の高さにかざして、ギタリスト高岡尚はなにやらおごそかに宣言してくださった。やっぱり病院送りかな、とかつけくわえて。

（三十九度台……）

今まで気がつかなかったとか言って。
そんな熱出しといて、平気でアレンジ仕上げてたってことになるんだ。
（バケモノじゃないんだから）
「西条は家に帰ること」
ついでって感じで、尚にはさらっと命令されてしまった。終電の時間だから。つくづく、やたら細かいことに気がつく人だ。
尚に言われちゃったらもう帰る以外ないんで、あとのことが気にならないっていったら嘘だったけど、しょうがなくて、あたしはごそごそとコート着込んで、じゃあお先に失礼しますって頭下げて退場することにした。
「あ、西条ちょっとそこで待ってて、今の音、テープに入れて渡すから！」
後から追っかけてきたのは坂本くんの声だった。
それから全然待たないうちに、録音ずみの真新しいテープ片手に、本人が玄関のとこまで出てきた。この手の作業させると、文句なしに早い。
「ＤＡＴじゃなくてカセットテープがいいんだよね？」
「うん、ウォークマンで聴くから」
「カセットだと音質がつらくない？」
「そりゃまあ坂本くんはそーでしょうけど……」



こんなことにまでうるさいし。それはそれでいーけどさ……じゃあ夜道が危ないから送ろうか、とか、そーゆー配慮はないのか？

「信じらんないよ、あの人」

カセットのケース両手で閉めて、あたしに渡しながら、坂本が言った。

「ほんとに、普通じゃないよ」

「……」

それいったら坂本くんだってそうだよって、あたしは言ってやりたかったけど、それで坂本が喜ぶかどうかはわからなかった。

「……あのさ、坂本は、ショルダーなんかいくらでも使えばいいんだよ。坂本だったら何やったっていいよ。そんでがんがんステージで目立つの」

あたしはそう言ってみた。坂本の反応は案の定、

「誰が!?」

ってやつだった。思いっきりバカにした感じで。

「そしたら坂本先輩、一気に『スター』だよ」

「……。西条、性格悪いって自分で思わない？」

「別に思わないよ」

「……」

思わないよ。だって絶対に、坂本がそんなことできないってはず、ないから。
いくらだって、どんなことだってやればいいんだよ。
誰も真似できないだろうって、堂々と自慢してまわるくらい。
「ええと……例えばそれは、音楽性と、プレイヤーとしての主張は違う次元で語られる場合の……」
坂本がぼそぼそっと難しい話題に持っていこうとしたとこに、がらがたんって金属っぽい音が藤谷さんの部屋のほうで聞こえて——あの音はごみ箱かなんか蹴とばしたって気がする——直後、
「っざけたこと言ってんじゃねえ、ど阿呆っ!!」
怒鳴り声がここまでぶっとんできた。え、え、え？
「九度六分で明日からリハができんのかあんたには。あんたどこの誰？　いったい誰に向かって口きいてんの？　相手のカオよく見てからぬかしなさいねこのくそガキャーは」
「あ、ごめん違った！　ごめん、俺が悪かった、ごめんなさい」
「違った？　ふうん違うの？　んじゃ誰が正しいの？」
「……だ、だからショウタくんの言うとおりに俺が寝てればいいんじゃないかな、なんて……あ、まだ違った？」
「どこが？　全然違わないじゃない、それが正しいんだよ、それ以外ないんだよ、ったりまえ

じゃない？　なんでそんなベーシックなこと知らないの？　画期的な人だねあんたも」
「だからごめんねって」
「何に対して謝ってんの、それは。俺の何？」
そこから先は、部屋のドアが閉まったらしくて聞こえなかった。今の暴言の数々はやっぱり、ええと、あの……。
「ああ……もうそろそろキレると思ってたんだ、高岡さんが」
坂本くんはあくまで冷静に客観的にそのよーな感想を述べられていた。——どーしたらいいんですかあたしは。

9

（……信じられない）
坂本くんの口癖じゃないけど、たった今、現在進行形で、あたしのいちばん正直な心境っていったら、まったく信じらんないってやつだった。
「甲斐ごめん、俺が使うマイク、スタンドじゃなくて、ヘッドセットに変更してもらえる？」
あたしの目の前では今、藤谷直季「先生」が、靴の紐ほどいたまんまで、固いソファの背もたれに埋まりこみそうになりながら、マネージャー甲斐さんにそんなことを言っている。

「それって何？　まさかもう足に来てるとか言わないよね」
「じゃないけど、曲の途中で俺がコケたら、誰の手もあいてないから。ショウタくんにそこのマイク持ってきてって言うわけいかないから」
「しょーがないよね……ええと、マイクの件は伝えますけど、コケるの前提にしないでほしいんだよ？　ほんとは」
「そうだ、ねえ、雑誌カンケイに、ステージのこと告知しといてくれた？」
「そーれーはー、勿論やってますよ、仕事だし、別にこっちだって藤谷につぶれてもらいたいわけじゃないんだから。願わくば、確実に、ブレイクしていただきたいんだから」
「うん、ありがと、甲斐大好きだから」
「高熱でモーローとしてる人のセリフには信憑性がないんだよねえ」
なんでこんなの担当しちゃったんだろ、とか呟きながら、でも甲斐さんはてきぱき部屋を出ていく。こんな時に甲斐さんぐらいカラッとしてられたらいいよなあ、なんてあたしは本気でうらやましがっていたりした。
で、部屋ってのはつまり——野外音楽堂の裏っかわにある、控え室ってやつで……。
信じられないのか信じたくないのか自分でもわからないけど、ええっそんな馬鹿なっていうくらい時間は早くて、気がついたらもうここだった。
（ここまできて、他にどんな目にあっても、これだけ綱渡りやったら何だって平気だ）

そうとでも思わないとやってらんない。

「朱音ちゃん、リハできなくてごめんね、なんだか全部ぶっつけになっちゃうね……」

ものすごく神妙に、藤谷先生がまた謝ってくださった。あたしがよっぽど死にそうに悲愴なカオ、してたんだろうか。

「全然、あたし本番強いから平気です」

まだひきつってるかもしんない。

「あの、知り合いのライブで穴あいちゃって、リハなしでいきなり代役やったりしたこともあるし、えっと、小学生のときに音楽の先生が事故っちゃって代わりに全校生徒の前でピアノ弾いたこととかも、あるから」

……レベルが違うんだよ、客のレベルが。

すごいバカなこと言ってるって自覚はあったけど、絶対、あたしより大変なのは藤谷さんのほうだ。

こんなことでぐらぐらしてちゃだめだ。

「序の口だから、この程度だったら」

よく考えたら序の口ってのは尚の受け売りだった。

……怖いのは怖いけど。

怖がって負けるのがいちばん嫌だ。

「朱音ちゃん俺より度胸あるよね」

九度台からどうしても熱さがらないまんまで今朝まで病院入りしてた人が、なんか笑った感じでそう言うんで、これはもう訂正なんてできかない。

先生は基本の体力がないから一度倒れちゃうと回復させんのが大変なんだって、尚が言っていた。倒れる寸前でセーブしておけば騙しがきくんだけどって。

その高岡ショウタさんはZ－アウトの楽屋のほうに、本日はたいへんお世話になりますってイミのご挨拶に行ってまだ戻ってこない。……行かなくちゃ、いけないんだ、やっぱり。

坂本は坂本で、シンセの接続とドラムのセッティングを両方とも自分でやるって言い張ってたんで、仕方ないから全部お任せしてしまった。そりゃあ、坂本くんにやってもらうのが何より確実でしょーけど……少しくらい手伝わせてくれても……。

つまり誰か先生のとこについてなきゃって、みんなが思ったってことなのかな。

（台風の目みたいな人だ）

まわりじゅう、めちゃくちゃなことになってんのに、でも結局真ん中にいるのは藤谷さんなんだ。

本人それわかってるかどうかは……知らない。

「うん、けどねえ、これは大丈夫だよ。俺はねえ、小心者だけど、その俺が絶対大丈夫だと思ってるからこれは凄いよ、ほんとに大丈夫ってことなんだよ」

毛布かぶってほこほこ暖まりながらこんなこと言ってるし。こ、この人が小心者だったら世界中の人間が百倍臆病だっ。

「あのさあ、朱音ちゃんって、ずっと、バンドで音楽やりたいって考えてたんだよね。クラシックでもなくて、キーボードプレイヤーでもなくて、『バンド』だって思ったのって、なんか理由があるの？」

いきなり藤谷さんが訊いてきた。……そういえばあたしたちって、その手の基本的なおハナシを一切やってきてない気が。

「……最初は、別に。兄貴がやっぱし友達同士でバンド組んで、ドラム叩いてて、それ見てうらやましくって、ずるずるそっち行って……。うち、父親がクラシック畑で、母親がロック畑で、よく考えたら兄貴がロックバンドやるんだったらあたしはまじめにクラシック勉強したほうが親孝行だったかもとか後になって思ったけど。でも逆に、うちの親、そういうの全然考えないで何でも好きにやれって無責任にけしかけるタイプだから」

「ああ……そうだよね、たいていの場合、ロックバンドやりますなんて言ったら親不孝だよね」

初めて気がついたみたいに藤谷さんが呟いた。

「それで頑張ってきついバイトとかして、地道にライブハウスで対バンやって、手売りでチケットさばいて、いずれなんとかメジャーのレーベルとつなぎがとれるまで粘るっていうのが定

番コースだよね……。ごめんね、結局、俺、そういうあたりまえのルートって一度も通ってこれなかったからリアリティなくて、ほんとのとこはわかんないんだよね。インディーズで一からやる苦労とか、認められないつらさとか、食べられないくらいの貧乏とか……わかれって言われても俺は絶対わかんない。今になってから、要らない苦労、わざとやったって、プロの音楽でアマチュアの世界かきまわして何が嬉しいのって感じだし。だから、『ロック』とか『バンド』ってものがもしも、そういう苦労を一緒につみかさねてつくっていくもんなんだったら、俺はそういうのはわかんないんだ」

「……」

聞く人によっては、今の藤谷さんのセリフ聞かせたらすごい嫌味に思うんだろうなってのは、あたしにもわかる。

アマチュアとじゃ勝負できないみたいなこと、サラッと言っちゃうところとか。

インディーズでいることにプライド持ってる人たちとかだったら、きっと怒る。

「けど、最後には、聴いてる人に届くのは、ステージで鳴ってる音だけなんだよ。……最後の、その時に、俺が『バンド』をやる意味の、答えがあるんだ。絶対にそこに、あるんだ」

あたしに向かってなのか、自分自身になのか、それとも別のどこかになのか、藤谷さんは足元見つめながらそう言っていた。

楽屋を出たとこの廊下で、なぜか真崎桐哉に出くわした。なぜか、そこに、いたから。
自分も出演控えてるその人が、なぜか。
（……相変わらず『芸能人』だ）
舞台裏なのにグラサン使ってる。
まさか今日のここまで来て、まだ藤谷さんやめさせるつもりでいるんだろうかとか思ったけど、別に楽屋訪ねてきてるっていう風でもなくて、ほんとにただそこにいただけだった。
（要するに前回と同じ話？）
（だったら仕方ないね）
藤谷さんのあの言い方からして、今さら桐哉がどうしたってやめない。
誰かが何か言ってやめるくらいだったら、とっくの大昔に尚がそうしてる。
「もう逃げだしてんの？」
視線合わせないようにしようって通りすぎたら、むこうから声かけられた。
「トイレですっ!!」
「ふうん、生理？」
……こーゆーこと平気で言う男ってサイテーに軽蔑する。
「違います……」
この人があたしとか尚とか、理屈ぬきに気にいんなくて文句つけたいんだってのはもうすご

いよくわかってる。
他人の音なんか入れても『藤谷直季の才能が壊れる』だけだから。
でもそれが藤谷さんの耳に届かないからって、尚のほうにぶつけてきたりとかするのは、なんか違う。
ねちねち裏側からやなこと言ってくるのとか。
相手がカッとなるの狙ってわざとやってんのが、わかるのが。
「……すごい勿体ないよ」
気がついたらあたしは口をひらいてて、桐哉のグラサン睨みながらそう言っていた。
「勿体ないよ、そんなことばっかし言ってんの……！　オーヴァークロームの桐哉の音がせっかくあんなかっこいいのに、自分でそれ台無しにしなくたっていいじゃんかっ!!」
「……」
（あ）
桐哉がいきなり指でグラサン引き抜いて、がしゃんって床に捨てた。
「へーえ……？」
（本気の目だ）
怒るんだったらあたりまえだ。
やばいとは思ったけど、やんなきゃよかったとは思ってなかった。

だって尚のギターにあんなこと言われたらあたしだって怒る権利がある。
今のと互角くらいで、絶対にある。
「名前なんてったっけ？　野望娘」
「……西条朱音」
です、まで言えなかった。
「歳、いくつ？」
「十七」
「ふうん？」
……あ、なんにもなしだ。
ちょっと拍子抜けした。
「どうせ藤谷、常識のモノサシが自分しかねーから、十七で野音のステージなんかあたりまえだと思ってんだろ。ついてくほうの苦労はおかまいなしだよな」
「……」
このセリフは同情なのか批判なのか、まだはっきりしない。
「なあサイジョウアカネ、藤谷がなんで一回、音楽やめたか知ってる？」
……え？
桐哉はあたしが全然わかってないの見て面白がるみたいに、顔ゆがめて笑った。

「一緒に音楽やってた奴に盗まれちまったんだよ、サイコーによくできた自分の曲。ちょうど今のサイジョウアカネくらいの頃に」

「……」

盗まれっ……て。

――最高の自分のオリジナル。

「で、そのくせ、盗ったジジイのほうが、自分のセンスも音楽性もズタボロにされちまってんの。結局、てめーの才能じゃ藤谷の音にかないっこなかったんだよ」

バカは自業自得だって感じで、桐哉はものすごくクールな言い方をする。

「誰が!?」

思いっきり、そう訊いてた。

一緒に音楽やってた奴って、言った。

十七歳くらいの頃に。

「あんたが知らねえジジイだよ」

桐哉はそんな風にしか答えてくんなかった。

……でも、なんか、別のとこで意味がつながった気がした。

多分、桐哉が言おうとしてるのは、だから藤谷さんと一緒に音楽やるなんてだめなんだってハナシで、そのこととは全然関係ないけど、あたしは逆のほうに考えを持っていってた。

（だから今、もう一回、やるんだ）

今、新しく、十七の頃につくった曲をやる理由がきっとそれなんだ。

五年前と今でアレンジの流行が変わったとかの問題じゃなくて、絶対、その時のまんまの音じゃ新しく始められない理由があるんだ。

そんな昔の嫌なハナシなんか、避けて通ったって誰も文句いわないのに。

……それで、避けて通っていいのか、別に挑戦しないならそれでもいいけどって、わざわざ訊くのが尚で、訊かれたら絶対やるって言っちゃうのが先生なんだ。

（すっげえ律儀なヒトたち……）

笑う場面じゃないけど、なんか、それだからあのヒトたちが一緒にやってられるんだってのは、わかる。

「あのさ、やっぱり、そっちのが違うよ。藤谷さんだって今は十七じゃないし、他人と一緒に音楽できないなんてこと、絶対、ないと思う」

こんなこと今十七のガキに言われて、桐哉がちゃんと聞いてくれる可能性はほとんどゼロで。

思ったとおり、桐哉はイラついた感じで舌打ちしただけだった。

なんでこういうのって、都合よくうまく伝わってくれないんだろう。

しかもそこに、

「西条、悪いけどペダルの角度だけ――」
戻ってきたのが坂本くんだった。背中でこっちのほう呼んだ声が、桐哉に気がついて止まった。……坂本が声かけてくる時って、いつも間がいいのか悪いのかわからない。
（え？）
桐哉が、ちらっと坂本見て、軽く笑ったみたいだった。どういうイミで笑ったのか考えようとして――考える前、だった。
「サイジョウアカネ、化粧すんの初めてか？」
突然、桐哉に言われた。
たしかに甲斐さんに、ステージに乗るんだからって無理やりルージュは塗らされたけど。
「口紅ズレてないか？」
「え、えっ？」
「ほら」
あっさり右手のばしてこられて、ひとつも、何も、そのほんとの瞬間まで、あたしは気がついてなかった。
（嫌だっ!!）
だめだと思ったときにはどこにも逃げ場がなかった。すごいバカだあたし!!　桐哉の指に顎、つかまれて、そのまんま何もできないうち――キスされてた。

（気持ち悪いっ）

冷たい。

胸の真ん中が、重くて、粘土か何かが乗ってるみたいだった。ずっと、頭がガンガン鳴ってた。

「っ……んだよ、馬鹿野郎っ!!」

何秒後だか知らない。

ぬけだせた——んじゃなくて、桐哉が両手離したからだった。怒鳴ったけど今さら遅かった。

今からじゃなんにもならない。

（騙された）

……知らなかった。

こんなやり方もあるんだ。

暴力の代わりに、こんなのも使えるってことになってるんだ。

横っ面、本気で一発殴るのと同じくらい、ひどい。

「んなカオしてないで喜べよ、応援してやってんだからさ」

だ、誰が……誰がてめえなんかっ……。

「じゃあな」

これで目的は果たしたって感じで、さっさと桐哉はひきあげていく。
ざまーみろバカ女って思ってる。絶対、思ってる。
あたしがそれで藤谷さんに泣きつけばいいと思ってる。
ショックで演奏できませんとか、弱音吐くのを待ってる。
「――人のっ……!!」
誰かが、怒鳴り声になりきってない、どっかかすれた声で言うのが聞こえた。
「人の気持ちを何だとっ……」
あ。――坂本だ……!
(まずいっ!!)
そん時のあたしは自分でも変だったけどキーンと頭が冴えてた。いつもより何倍も回転早くなってた。どっか普通じゃなかった。
「だめだよっ!! 仕返ししたらそれで因縁つけられて、こっちがトラブル起こしたってことにされんだからっ!!」
坂本の腕つかんで、それだけ言うので必死になってた。じゃないとこいつ絶対そのまんまダッシュして突っこんでくとこだったから。
「関係ないよそんなもの!! 誰が悪いかなんてハッキリしてんだよ!!」
凄い力でふりほどかれそうになった。どっから出てくんだよこんな力っ。

「そんでケンカして坂本の指とかケガしたらどーすんだよっ、あんた鍵盤弾きのくせにっ」
「指のひとつやふたつ壊れたって弾いてやるよ三曲くらいっ!!　それぐらいできるよ俺でも!!」
「んなことで威張るなよばかっ!!　誰の指だと思ってんだよ、坂本だけのじゃないんだよっ!!」
「じゃあ西条は自分が自分だけのもんだと思ってんの!?　違うだろそれだって!!」
正面から、びしっと叱られた。
「だってっ……」
フルスピードでぎりぎり動いてた頭の中が、そこから逆回転しはじめた。
そしたら今ごろ思い出したみたいに涙なんかが溢れてきた。……なんで泣いてんだ馬鹿。どんなに頑張ってもだめだった。
「だってあたしがっ……」
「……」
坂本もいきなり、どうしたらいいんだって顔になって、なんにも言わないで棒みたいに立ってた。
(つけこまれる弱さがこっちにあるだけなんだ)
足りないところがいろいろあるから。

先生とか尚が軽々かわせることでも、こっちにはそんな簡単にいかなくて。それでこんな風になるんだ。

手加減なんかしてもらえるわけない。

結局。

「……音楽で勝たなきゃだめだ」

そういうことだった。それしかなかった。

音楽で勝つ。

「……わかった」

ぽつりと坂本が言った。

10

後になって瑛子ちゃんに聞いたら、当日、尚が自分のバンドでオープニングアクトに出てくるって噂は、Z－アウトのファンの間でもけっこう広まっていたみたいだった。

「やっぱしね、タカオカ様がそれくらいやってくれるの待ってたのよ❤　っていう人と、なんでZ－アウトと対抗してくるの、裏切り者になっちゃったのっていう人と、両方いたみたい。でも、許せないって言ってる人以外は、尚がいるバンドならカッコいいよね、だったら絶対チ

エック入れなきゃってみんな言ってたの。で、ついでに、まあうちのレージには負けるけどとかフォロー入れてるのよ、みんな不純なのだわ……」

あたしだってきっと、その噂聞きつけたらどんな遠い会場にだって走ってた。

すごい期待してドキドキしながら、でももし新しいバンドの音が大ハズレだったらどうしようって、どっか怖い思いもしながら待ってた。きっと、そうしてた。

「まさか自分がZ－アウトのステージでMCをすることになるとは思わなかった、高岡です。お久しぶり」

ギターぶらさげてスタンドマイクの前に現れて、口をひらいた尚の姿見て、客席はざわっと動いたみたいだった。二列目にいるOLっぽいお姉さんが、尚のこと、やーんカワイイって笑ったのがドラムセットのこっち側からも見えた。

「ええと……今から、もう何年前になるか忘れましたが、俺がまだ名目だけは学生をやってる頃に、奇妙なきっかけで、なぜか東京大学などという場所で、しかも教育学というまったく似合わない学問をやっている奴と知り合いまして……。こいつが、たいへん生意気な人で、わがままで、自己中心的で、他人に平気で迷惑はかけるし、性格がまじめなボクとしては、こいつとだけは友達になるまいと……」

東京大学ってのを聞いて、キーボードの手前で坂本が思い切り眉をしかめた。

「しかしこの人が、ある時、友達になってくれなくても高岡君のギターの音が聴けるだけで嬉しいよと、非常に殊勝なことをおっしゃって、俺はホロッときたんですが……実は、本人はその後に『ただし自分の隣で弾いている場合にかぎる』と、あくまでも自己中心的に考えていたことが判明しまして……その困ったちゃんが、そこにいる、彼です」

尚が左手でネックを握りなおす。次のセリフでＭＣを終わらせる。

「《テン・ブランク》バンドリーダー、ベーシスト、ボーカリスト、藤谷ナオキ」

（え？）

（だれ？）

たくさんの、似たような声を、聞いた。聞いた気がした。

客席でみんなが同時に、そんな風に思ってた。それがわかった。

それまでよそ見して、興味ないって感じで喋りあってた人たちまでが、一瞬、そのまわりじゅうの空気にびっくりして、ステージの上、ふりかえってた。

黒一色のプレシジョンベース、片手に、ふらっと、人間ひとりステージの中央に出ていっただけなのに。

……集中してる。

視線がものすごい密度で。

（ぜんぜん違う）

さっき楽屋で毛布かぶりながらあたしと向かい合って話してた人とは、もう別の人だった。神宮前の家でシンセサイザー弾いてる人でもなかった。新宿の道端で作曲してる人でもなかった。

思わず、呼吸止めて、女の子たちが見上げてる理由は、きっとひとつだった。

その皆がぎょっとするタイミングで大音響のキーボードが、滝から転がり落ちてくるみたいな速さで走りはじめたのがその時だった。

さあ驚けといわんばかりの、例の『傍若無人に弾きとばすソロプレイ』で。

鍵盤を鍵盤とも思ってない、超高速の、そのくせなんでかメロディアスに聴こえてくるのが説明つかない音の連続。

まるまる十六小節。

(あ)

(笑った)

藤谷さんが、それで笑ったのがわかった。

狙いどおりの坂本の弾き方、聴いて。

だから言っただろって。

(そうでなくちゃ始まらないじゃない?)

その、坂本のソロの最後、十六小節目の、ラストの一拍だけに重ねて藤谷さんが下からベー

スの弦、ふわりってはじいたのが合図だった。う、わっ……。

やられるっ。

心の準備はしてたのに何の役にもたたなかった。

叩こうって気持ちより先に藤谷さんの音に連れていかれた。バスドラのペダル踏んだ足も、スネア鳴らしたスティックも、ものを考える頭とは別のところで、もう、気後れするどこじゃない違う次元で、勝手に動かされてた。

だって、いちばん欲しいものを目の前に出されたら反射的に手がのびる。

(だめだっ……)

こんな音、弾かれたら、逃げられない。

ベースは目立たなくて地味で裏方にまわる楽器だって思ってる人多いけどそれはもともと嘘で、藤谷さんの場合、もっと根本的に大嘘だった。こんな一気に、腰から崩される羽目になるなんて思わなかった。最初の一音でつかまったらそれきり主導権もリズムも全部あの人のものだった。

尚のギターが、横で、きちんと支えてくれてなかったら、今自分が何を叩いてんのかもわからなくなるとこだった。

あ、ずるい……。尚は平気で、自分のやりたいように弾けちゃうんだ。すぐ隣に、こんな極悪非道な、ブラックホール並みの重力でベースが鳴ってんのに。

（聴いてないとかいわないよね……）

しれっとして実はベースの音だけ聴かないようにしてんのかもしれなかったけど。でもそこで死んでも呑まれないで弾いてるってのが、さすがに本性ケンカ売りたがりの人だった……。

その尚に、ふうん、だったらこれでも？　って、先生が、も一回ケンカ売りかえした。まだあるんだよ武器なんか。

（やめてくれっ!!）

声、が。

最終兵器で。

なんであたしロックバンドやりたいって思ったんだっけ？

違うんだ。

やりたい、なんて、言葉で、わざわざ考えたわけじゃないんだ。ほんとは。

はじめからあたしの身体の中にあるんだ。

人間が生まれつき水の飲み方知ってて、飲まないと死んじゃうのと同じで。

爆発させなきゃなんない火薬の塊だけが身体の内側にあって。

だけどカンペキに爆発させる方法はちゃんと知らなかったんだ。

ちょっとずつでも、くすぶってても、燃やしてないとそのまんま死んじゃうから、とりあえ

ずハンパな爆発で我慢してきて。我慢すんのが当然ってくらいには、慣れて。
もちろん、今までもバンドで音楽やってたら、それだけで楽しかったけど。
（本音、出してなかったんだ）
ずっと、欲しいのはああいう音じゃなかったんだ。
ホンネってのは、本気の、本能の、本当の音。
（あたしひとりじゃ出せない）
（けどあたししか知らない）
ここから、自分のバスドラムのキックから出ていく音が、もうその瞬間に別の物になって、信じらんないくらい遠いところまで届いてくのが見える。
どこまでだって行ける。
一発のスネアが、こんなにあたりまえに、なんにも考えないで、すらっと叩いていいものだなんて知らなかった。
今までどんなに狙っても出せなかった響きが、あっさり鳴って、空のむこうに吸いこまれていく。
この音楽の中でだったら。

藤谷さんが病院入りしてる状態で用意してきた歌詞は、ぶっつけだからって理由で、全部英

語だった。なんでその理由でその結果にもっていくのか、英語平均点のあたしにはまだ納得できてない。

でも詞が日本語だって英語だって、この人が歌ったら同じだった。

（ほんとに歌ってる……）

毎日のように聞かされてたあの声が、実際、音に乗っただけのことなんだけど。

だけ、なんだけど……。

頭っからびっくりしてた客席が、じわじわっと、なんか少しわかってきたって雰囲気になってきたのが、二曲目の半分をすぎた頃だった。踊りだしてる子とか、手拍子とかが少しずつ増えてた。

二曲じゃ足りないって言い張ってた藤谷さんの読みは、多分あたってる。もっと聴かせてくれなきゃって、みんな思いはじめてる。

（あっ）

その一瞬だった。

変だ、って真っ先に気がついたのが坂本で、坂本の弾き方がビリッと伝わってきたからあたしにもわかった。

（声）

くりかえしのサビに入るところで。
「！」
藤谷さんがふっと一歩さがるのと、最初から決まってたことみたいに尚が予定外のギターソロはさんできたのとが、同時だった。次のフレーズからはまた、なにもなかった感じで藤谷さんが最後まで歌いきった。
きっと、ほとんどのお客にはバレなかった。
でも、わかった人も絶対いたはずだった。
歌えなかったんだ。今の場所は。声が出なくて。
（なんで!?）
とっさに思ったけど。
……なんでじゃないよ。三十九度の熱があるんだよ、あの人。
全然、それで狂いのないベース弾いて、普通に歌ってるほうが変なんだから。
尚がふりかえって、何か先生に言った。どうする？　みたいなことを。
ちらっとそっち見て、それから、
「……ええと、ね……」
ヘッドセットのマイク通して、藤谷さんは客席にむかって話しかけた。
「もう一曲だけ、やっていい？」

わらわらっ、と拍手がきた。

あっ……。尚より先にMCで言っちゃえば取り消しできないってやつだ、今の。が、頑固な人だなあっ……。

「これはもともと僕らのオリジナルじゃなくて、自分が昔、人のために書いた曲なんだけど。……きれいな心の歌です」

さらっと、藤谷さんはそんな言い方をした。

「僕も歳をとったから昔のとおりじゃないけど、今なりに……本気の気持ちに嘘がなかったら歌えると思う。いきなり強引で悪いんだけど、証人になってもらえる？」

このセリフのこと、後で先生は、俺って結婚サギ師みたいなこと言ってなかった？　って呟いて、あんたの場合いつもそうだよって尚に突っこまれていた。

藤谷先生の声は五オクターブも出るわけじゃないし、聴いたこともないような斬新な声質ってわけでもない。

だけどすごく自由だった。

ピアノの鍵盤を叩けば音が出るのと同じってくらいに、欲しい音をぴたりとおさえるキーが先生の中にはあるみたいだった。

この人にとっては自分の声も楽器のひとつなのかもしれない。

（歌詞が変わってる）

先生の隣で尚のざくっとした中低音のギターが鳴っただけで、坂本の奇術みたいなシンセのフレーズが新しく乗っただけで、あたしの考えてたグラスハートのイメージは全然違うほうに変わってた。だから最初は歌詞のことまでわからなかった。

もっと、透明なだけの、触ったら壊れそうな、薄いベールみたいな曲だと思ってた。

でも今はガラスの硬度が増してる。

ずっと、つよい音に聴こえる。

たとえば簡単な話
昨日ぼくに渡しそびれた手紙だとか
あの夕暮れの遠い壁に　届かなかった白いボールの行き先だとか
ふりむくのはもうやめていいんだ
誰もそんなことなんて知りはしないのさ
君の壊れたロケットシャトルより
三次元座標の位置より　もっと
うまく説明できるコトバがあるんだ　絶対にどこかに、あるんだ

君の破片が刺さる前に急いで
break your GLASS HEART　痛みの心臓を打ち砕け
誰かの輝きを粉々に消す前に
涙の意味がわからなくなる前に
break your GLASS HEART
傷ついたその腕から
始めるんだ

尚が心配したとおりだった。一コーラス目が終わるころには、藤谷先生の歌い方がどこか苦しくなってきてるのは、絶対間違いなしに伝わってきた。だけどそんなの関係なかった。客席の誰もがその時、本当に、真剣に正面からなにかすごいものぶつけられたって顔をしていた。

「break your……」

――あ。

藤谷さんが、突然、足元の床に右側の膝をついた。

あたしに聞こえてくるベースの音は何も変わってなかった。けど、もう、立ってられないんだ。

ステージの左側からすかさず尚がそっちに駆け寄って、肩を並べるみたいに重心落としてフ

ォローしてる。だーもー仕方ないって感じで坂本がショルダーキーボード抱えて、尚に続けてステージ真ん中にかっとんでいくのが見えた。あああああっ、ずるいっ……!!

「break your GLASS HEART……」

ええっ？　って、自分の両隣にまわってきた援軍ふたり眺めて、先生が最初びっくりして、なんか困ったのと嬉しいのといっしょくたにして、笑った。すっごい、気持ちよさそうだった。

（なんだよそれーっ、坂本ばかーっ!!　代われーっ!!）

別に何も坂本くんのせいじゃないんだけどっ。あああーっ、ちくしょー、ずるいよ三人ばっかしっ……。動けないこっちの身にもなってくれよーっ、いいなあ、いいなああーっ!!

ヤケになってシンバルひとつ多めにぶち鳴らしてやったけど坂本に聞こえたかどうかは知らない。

客席からの、わっ、ていう熱と、波が、ステージ前に三人揃ったところで、一気にかぶさってきたから。

break the GLASS HEART　脆い鏡の自分を打ち砕け
傷ついたその腕から
君を

始めるんだ

《テン・ブランク》最初のステージは、そんな風に、終わって――そして、始まった。

あとがき

さて、あとがきです。

この本は、雑誌「コバルト」誌上で、1993年2月号、8月号、10月号、12月号と、ちょうど一年間にわたって発表してきたシリーズ作品を、一冊にまとめたものです。

プロの小説書きとしてデビューしたころからずっと、書きたくて書きたくてしょうがなくて足踏みしたいくらいだった《テン・ブランク》の物語を、こういうかたちで（しかも！　念願どおり橋本みつるさんのイラストで）お届けすることができて、おいらは心底幸せ者です。

気がつけばもう、私も最初の文庫を出版してから四年になるんですが、しかし、どうも……困ったな、グラスハートについて語ろうとすると、まるでこの本でデビューする作家のような心境になってしまいます。あとがき書いてる現在まで心臓ドキドキいってるしさー……。

なんか本当、腰がぬけるような感じが（笑）。

藤谷直季氏の言を借りるなら、「結局、最後に届くのはステージで鳴ってる音だけ」なのと

同じく、「小説の本文以外に、何も語れるものはない」わけで、そうするとあとがきで作品についてどうこう喋るのは余分なことに違いないんですが……まあ、藤谷君のステージにもMCというものがあることだし（笑）、少しだけ書かせてやってください。

この小説が生まれたのは、今から五年前、「AGE」という百枚足らずの作品を書きあげたことがきっかけです。

それまでの私は、ずっとプロの小説屋になりたい一心でいたけれど、自分はSFやアクションや大河物語を書きたい種類の人間なのだと自分自身で決めていて、それ以外のものなんて書けないだろうし必要もないと考えていたんです。

そんな自分の中から、予想もしていない、ひとりの『生身』の高校生の物語が出てきて、それがちゃんと完結するところまで書けたことそのものが事件だったし、そうか！　こういうものが書きたかったのか！　と目からウロコが落ちるようなショックもありました。

結果として、その「AGE」がコバルト・ノベル大賞の佳作にひっかかって、そこから現在の若木未生が始まっているわけですが……以来、ずっと気になっていたのは、高校の屋上で似合わない煙草ふかして中古のバイク乗りまわして尾崎豊の歌を聴いていた高岡尚の、その後のことでした。

高岡の尚ちゃんと私は（私の感覚の中では）同い年なので、彼もそれから私と一緒に歳をとって、彼なりの夢や目標にぶちあたって、めげたり立ち直ったりしておりました。いつになっ

たらそれを書かせてくれるんだ、って、こっちはうずうずしてるばかりで待っていたんですが、やっと、四年もたったころになって、

「じゃあ、やれるものならやってみなさい」

というメッセージが彼から届いたわけです。……もう、これだけ大人になりゃー若い連中がメインになるから何を書かれても自分は恥をかくまいと思ってるんだったら甘いぞ、高岡。

唯一悲しいのは、これでまた尚ちゃんと自分の歳のとりかたがズレて、この物語を書きつづけている間はずっと、奴が年下になってしまうことかなあ……。

グラスハートの主人公は、やはり西条の朱音ちゃんってことになるんでしょうが、考えてみたらこの人は、最も作者にヒロイン扱いされないヒロインだった（笑）。女の子だと思ってないわけじゃないんだが、女の子として大事に扱ってないというか……好きにやっていいよと放りだしっぱなしにしているというか……。立場といい性格といい、坂本がヒロインで西条がヒーローってほうがハマらない？　んなこと思うの私だけか（笑）。

実際、私自身は、坂本くんと朱音ちゃんの二人がそれぞれ主人公っていうつもりで書いてます。どーせおいしいとこはみんな藤谷先生が持っていってますが。

個人的に気に入ってるのは桐哉みたいです。言動がいちいちバカでおかしい……。朱音ちゃんの前で投げ捨てたグラサン、あとでこそこそ拾いに行くのかなあとか考えるとものすごくお

かしい……。

そういえばオーヴァークロームの名前は、OVERSIGHT CYBERNISED CHROMATIC BLADEFORCEというのが正しいんじゃないかと私は思うんですが、桐哉くんが「CYBERNI-DEAD」って書き方が重要なのだと主張するので、とりあえずそうなってます。名前そのものにどういう意味があるのか私は知りませんが（無責任）、要するに、俺たちゃーSFが好きだあああっ、ってことじゃないかい？　え、違う？

テン・ブランクというバンド名の意味については、いずれ小説の中で語られることになるでしょう。

それから藤谷先生のセリフの中に出てきた《セクション》ってのは、『XAZSA』で書いたあのセクションです。Z－アウトってのも名前だけXAZSAに出ておりましたね。

（こんなところで他作品の話をするのも何だが、セクションの原型モデル、タネ明かししてくれって声がまだありますが……だからさ、COMPLEXだってば……）

オーヴァークロームには、実はものすごく音楽性が近い！　と思っているモデルがあります。男二人組でテクノと呼ばれてるあたりがヒント。Bで始まってEで終わる名前の……ってとこまで言ったらわかるか？

グラスハートの二話目を書いている時は、ちょうど並行して「ハイスクール・オーラバスタ

ー」のイメージアルバムを作っておりました。レコーディングにお邪魔しまくって音楽の現場を目の当たりにしていたせいか、小説のほうでも妙にハイになっていたような気がします。

（自分の作品のイメージアルバムだからって言うんじゃないけど、フェンスオブディフェンスの西村麻聡氏と、グラスバレーの本田恭之氏による、素晴らしい競演が聴きたければ、絶対に手にとって損はないアルバムです。パイオニアＬＤＣより発売）

実はレコーディングで面白いことなら沢山あったんだけど、今ここで書いてしまうと、せっかくのおいしいネタが小説の中で使えなくなってしまうー……のであんまし書けません。がーん、ジレンマ……。

西村さんがスタジオにダンベルを持ちこんでは曲の合間にふりまわし、グローブを持ちこんでは「キャッチボールしようぜっ」と外にかっとんでいってたとか、ボーカル録りでマイクの前にたった本田さんが、「やばい、この発声の仕方ってめまいがしてくるんだよねえ……」と酸欠に苦しんでいたとか、野村義男氏が「西村さんまだ来てない？　んじゃ内緒でギター足しちゃえ」と速攻で録っちゃったギターが大当たりだったとか、そのギターが入ったオケを後から現れて聴いた西村さんが「ん？　耳鳴りが……どこからか知らない音が」と呟いていたとか、まあいろいろあったんですが……（こんな書き方じゃわけわからねーって）。

特にＩＮＯＪＯさんがスタジオの仕組みなどをあれこれ教えてくださったので、とっても助かりました。後日、ＩＮＯＪＯさんが本屋でグラスハートの載ってるコバルト立ち読みしたっ

て話には思いきりビビっちゃいましたが（ちなみにＩＮＯＪＯ氏は作詞家でもありベーシストでもある、長髪の、どっからどー見てもミュージシャンな人です……）。

グラスハートを書くにあたって、このレコーディングが一番、得難い取材経験になりました。取材と言いつつ単にミーハーしてただけっつー説もありますけれども……ともかく、スタッフの皆さん、アーティストの方々、本当にどうもありがとうございました。

音楽関係の話を書いていると、自分も楽器やってます、という読者さんからお手紙をもらうことがあって、嬉しいです。やっている内容はクラシックだったりロックだったり、さまざまですね。学校のブラスバンド部に入っている人が特に多いかな。私自身も中学、高校とつづけてブラバンでクラリネットやってました。下手の横好きでしたが。

あと、比較的まじめに習ったのがピアノ。触ってすぐ挫折したのがクラシックギター。バンドを組んだはいいが全っ然まじめにやらなかったのがドラムでした。ドラムはさー……実はどうしてもハイハットが叩けなかったんですよ私（わかる人は笑ってくれたまえっ）。しかもあのバンド、今考えるとベーシストがいなかったな……。

で、一方、音楽のことは何も知らないけどグラスハート読んでます、というお便りも、本当にありがたいです。なるべく、専門的な部分があっても読んでて意味不明にならないよう気をつけて書いているつもりですが、わからないことがあったらどんどん手紙で質問してくださ

い。小説やあとがきの中で答えていくようにしますので……。

などと偉そうなことを言いつつ、私の場合、けっこう大ボケな勘違いなんかしてる可能性もあるので、おいちょっと変だぞ、という部分があったら詳しい人はこっそり教えてやってください。ううう情けない。

(勘違いじゃないけど、藤谷さんが壊したシンセの値段、後であらためて楽器屋で見て仰天した……。なんてことするのよ先生……)

本当はシンセとかシーケンサーについては、メーカーだけじゃなく機種まできっちり書きたいって気もするんですが、なにしろ続々と新製品が出てくる世界なので、活字にしてしまうとあっという間に時代遅れになりそうで、今のところ自重してます。まあ、それ言い出したらエフェクターもアンプもちゃんと書けよっつー状態になるしなあ……。もーやだ、この業界、進歩が早くて。しかし新製品の耳寄りな情報なんかもあったら、ぜひお知らせください。

まじめな話、楽器があまりに進歩してしまったので、現在は、バンドなんか組まなくても音楽って本当に作れてしまうんです。

楽器を演奏する技術がなくても、機械にインプットさえできれば、充分すごい音楽が作れるんです。それが良い悪いってのはまた別の話なんだけど、それでもそこで『バンド』をやろうとしているテン・ブランクの人たちは、いったいこれからどうなっていくのだろう……。

こんな凶悪で面白いもの、絶対書かずにはいられない。よろしければ、どうか最後までつきあってやってください。

とりあえず二巻目は書きおろしでさっさと出しちゃう予定です。それから、その二巻目とは別に、番外の短編（尚ちゃんと藤谷君の話です。やると思ったでしょ）をコバルト四月号で書きますので、こちらもよろしく。……燃えてますねえ若木さんてば。

橋本さんのイラストは、グラスハートを書くにあたって、絶対必要不可欠なものでした。雑誌発表時にひきつづき描いていただくことができて、すごく嬉しいです。ああ、おいらも野望を捨てなくてよかった。橋本さんの描く線の一本一本、トーンの細かい切れ端にいたるまでが、この小説にとって、かけがえのない空気を与えてくれているんです。

（あっ、橋本さんにイラストをお願いするのは、これが初めてじゃなくて、問題の「ＡＧＥ」が収録されている『コバルト・ノベル大賞入選作品集6』以来です。まだ読んでない人は、ぜひ本屋で捜してみてください。注文してくれたらなおさら嬉しいぞ！）

ラストのページです。ここまで読んでくださって、ありがとうございました。

それでは、また、次の機会に……。

ＢＧＭ——松井常松「あの頃　僕らは」

若木未生

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101―50　東京都千代田区一ツ橋2―5―10

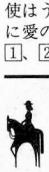
集英社コバルト編集部　気付

若木未生先生

わかぎ・みお

1968年12月２日、埼玉県生まれ、都内在住。射手座、A型。1989年４月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。能條純一氏を尊敬し、安達哲氏の作風に憧れを抱いている。最近の趣味はミステリー小説を読むこと。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ（前編）（後編）』『エクサール騎士団1、2』『XAZSA Ver. 1～2』『天冥の剣1～4』などがある。

グラスハート



COBALT-SERIES

1994年１月10日　第１刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

〒101－50
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1994
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611809-2 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

機械人間（マシノイド）ザザと少年たちの人気
シティサイバー・ファンタジー。

XAZSA（ザザ）
Ver.1 Ver.2

若木未生
イラスト／田村純子



夜の銀座の街角で、休業中のギタリスト・京平が偶然出会った少年ザザ。彼は、天才少女の優亜につくられた国家機密級（トップシークレット）の機械人間（マシノイド）だったのだ…！

〈好評発売中〉



妖者に挑む少年たちの人気ファンタジー。

若木未生 〈ハイスクール・オーラバスター〉

イラスト／杜 真琴

天使はうまく踊れない

高1生の亮介のまわりに、奇妙なヤツらが現われて。

セイレーンの聖母

十九郎が狙われた／　とてつもない妖力に忍は。

十字架の少女

亮介たちは、諒の妹・彩を迎えて軽井沢で合宿を。

迷える羊に愛の手を

転校先での諒は!?　シリーズ番外編。

炎獄のディアーナ 〈前編〉〈後編〉

女の子を狙う〝髪切り事件〟が発生／

天冥の剣 1～4

〝吸血鬼殺人〟の背後に妖者が。



コバルト ノベル大賞 募集中!

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。

この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後(400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下)を、お待ちしております。

〈入　選　作〉**正賞の盾と副賞100万円**
〈佳　　作〉**正賞の盾と副賞 50万円**
〈コバルト読者大賞〉**正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「Cobalt」に毎号掲載されています。

人気作家の最新作が一気に読める夢♡小説誌!

コバルト Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売!

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート ショート」を毎号募集しています。